
re-LIFE

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

re - LIFE

【Nコード】

N9783U

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

夫との冷め切った生活に疲れたある夜、彼女は高校時代の夢を見た。そこで彼女は後輩の男に告白される。夢の中だからと、気楽に付き合い始めるのだが夢は一向に覚める気配はなく、彼女も次第に彼に惹かれて行く。これは夢？それとも現実？

ブローグ

「おやすみなさい」

彼女は、ベッドの中で既に寝息を立て始めている夫に背中から声をかけた。

返事は期待していない。

それでも「おやすみなさい」と言ったのは返事をして欲しいからではなく、

単なる礼儀というやつだ。

彼女はそうするくらいのマナーは身に着けていた。

相手が誰で、どんな態度を取られようと、礼を失しない程度のマナーは。

夫は返事とも寝言とも取れるような声で「んー」とだけ言った。

2

結婚して6年。

結婚当初はこんな風ではなかった。

夫はちゃんとサラリーマンとして働いていたし、

彼女はまだ大学生だったが、少しでも夫の力になろうと慣れない家事を頑張った。

しかしそれは本当に「結婚当初」だけの話で、

「俺にはサラリーマンなんて合わない」と失笑モノの理由で夫が仕事を辞めてニートになり、

大学を卒業した彼女が仕事を始め、すれ違いの生活が続いて・・・

もうずっとこんな感じだ。

夫婦らしい会話どころか、「同居人」としての会話すらない。

夫は彼女の収入をあてにして家でゴロゴロしているだけで、彼女は小言を言うのも面倒臭かった。

何度離婚しようと思っただろう。

それでもそうせずにいるのは、これが親に決められた結婚だからなのか、

単に離婚するのも面倒だからなのか、彼女にも分からない。

まさか夫を愛してるとか？

そんな馬鹿な。

彼女は鼻で笑うと、ナイトテーブルの上に乱雑に置かれているシフト表を手にとった。

明日は、いやもう今日か、7月7日木曜日。開院は9時。

看護師は佐々木、江口、中森、水野。受付は小倉、川原。

医者は楽だと思う。

開院の準備は全部看護婦がやってくれるから、彼女は開院直前に病院へ行き、診察室に入って看護婦たちに「おはようございます」と言われ、椅子に座る。それだけだ。

後は自動的に患者が入ってくるから、機械的に見ればいい。

今までもそうだった。これからもそうだ。

夫との生活も。

彼女はため息をつくのも億劫で、

何も考えずに夫とは距離を置いてベッドに沈み、タオルケットに包くるまった。

夫は暑がりでもいつも寒いくらいにエアコンをつける。

そして冬になれば今度は暑いくらいにエアコンをつける。
その次の夏にはまた寒いくらいエアコンをつけて、冬になれば暑いくらいに・・・

これが後何年続くのだろう。

そんな寒い夏の夜、彼女は夢を見た。

『大きくなったら、結婚しようね』

幼い声がする。

周りは真っ暗で声の主は見えないが、彼女は懐かしい気分になった。
なんだろう、これは。

幼い頃の記憶なのか全くの夢なのかは分からないが、とにかく懐かしい。

彼女は暗闇の中必死に目を凝らして声の主を探した。

『誰？あなたは誰なの？』

しかし声の主はただ笑っているだけだ。

その声に別の笑い声が重なる。

その二つの声は、彼女を残して闇の奥へと吸い込まれていった。

そこで彼女は目を覚ました。

ざわめき。

キーンという機械音。

周囲がやたらとうるさく、そしてやたらと明るい。
目の前を何人もの人が行きかう。

彼女は目の前の光景に愕然とした。

第1部 第1話

あれ？ここどこだっけ？

私、家で寝てたんじゃなかったっけ？

自分が今いる場所が分からず、私はまさに夢心地で辺りを見回した。

広い空間で反響する独特のアナウンス、

大きなスーツケースを転がす人、

遠くからかすかに聞こえるのは・・・飛行機の音？

ああ、ここ、空港だ。

羽田だっけ？成田だっけ？

夢か現実かも分からないままそんなことをぼんやりと考えていると、突然私の真横で声がした。

「俺、先輩のこと好きなんですよね」

まさか自分の横に誰がいるとは思っていなかった私は驚き、首を右に回した。

見慣れない男の子が立っている。

その視線は、比較的背の高い私のそれとほぼ同じ位置にあるけど、顔はまさに「男の子」だ。せいぜい中学生くらいだろう。

でも、綺麗な顔をしている。サラサラの黒髪に知的な切れ長の目。いかにも頭が良さそうだ。スタイルも良い・・・

ん？

私は視線を男の子の身体に落として、ようやく気が付いた。
男の子の服装に。

制服を着ている。中学生だから当然なのかもしれないけど、この制服、見たことがある。

紺色の分厚い上品な生地できているブレザーの胸の部分に金色の複雑な刺繍があり、襟首にはホック式ではない本物のネクタイ。

そうそう、このネクタイ。自分で結ばなきゃいけないのよね。

高等部にあがる頃にはみんな上手に結べるようになってるんだけど、中等部の生徒はまだ結ぶのが下手で、みんな結び目がやたらと大きくって不恰好だった。

でも、この子は上手に結べてる。

「・・・海光かいこうの制服？」

思わず呟いた私を、男の子が訝しげに見下ろす。

「は？」

「あ、君が着てるのって、海光学園の制服？」

私は懐かしいその学校の名前を口にした。

男の子が眉を寄せる。

「何言ってるんですか。先輩だって着てるじゃないですか」
「え？」

今度は自分の身体を見下ろした。

本当だ。

私も海光の制服を着てる。

もちろんスカートだけだ。

そうよね。私だって海光の生徒なんだから、この制服を着ていて当然……

「はあ!？」

私は勢い良く顔を上げ、男の子を見た。

男の子は「何やってんだ、こいつ」と言わんばかりの呆れ顔だ。

「どうして私、海光の制服着てるの!？」

「海光の生徒だから」

「うん、そうよね。……じゃなくって!!!!」

私が海光を卒業したのなんて、もう10年も前の話だ。

なんで28歳の私が、今更海光の制服なんて着てる訳!？

ていうか、ここどこ!？

旦那は!？

病院は!？

この子、誰!？

私は今度はかなり焦って辺りをキョロキョロ……というか、ギョロギョロ見た。

人混み。

スニーカー。

カウンター。

ツアーガイド。

航空券片手に急ぐ人。

やっぱり空港だ。

一体、どうなってるんだろう。

ふと目が大きなガラス窓に止まる。

そこには、行きかう人々の波に取り残されたようにポツンと立っている私と隣の男の子が映っていた。

男の子の顔には相変わらず不審の色が漂っている。

そして私は・・・

おかしいことに、こんな時にもかかわらず私は「ああ、やっぱり私は昔からこんな顔だったんだ」と、
がっかりした。

周りの人は私のことを美人だという。

「モデルみたいだね」「フランス人形みたいだね」と。

確かに私のおばあさんはフランス人だから、

そういう意味で「フランス人形みたいだね」というのは当たっているのだけど、それは私にとって決して褒め言葉ではない。

みんなが私をちやほやしてくれていたのは子供の頃だけ。

小学校の高学年になる頃には、見た目だけで「冷たそう」「子供らしくない」「近寄り難い」というレッテルを貼られ、友達はほとんど少なくなっていた。

それに、自分の性格が暗いとは思わないけど、人とのコミュニケーションが苦手なのは事実。

それも友達を作れずにいた一因だろう。

中学受験をして、難関と言われる中高一貫の海光学園に合格した後は尚更だった。

「美人だし、頭はいいし、親は開業医だし。天は何物も与えるんだね」、なんていつも嫌味を言われていた。

ただ、海光に入っただのは正解だった。

海光は全寮制で、私は親戚や近所の人から離れ一から人間関係を構築できたし、海光の生徒はみんな将来を期待されているエリートばかり。頭は良くて当たり前。外見で浮くのは相変わらずだったけど、以前ほど「異色人種」として見られることはなかった。

仲の良い友達もできた。

それも意外なことに男の友達が。

人懐っこいその子は入学してすぐ私に、「お前って人形みたいだな。でも中身は俺と変わんなさそう」と言っ、何かと私にちょっかいをかけてきた。

最初はちよつと面倒臭い奴だと思っていた私も、次第に打ち解け、結局中・高校6年間ずっとその子とつるんで・・・

違った。

その子が高2になる時、交換留学制度を使って海外へ行っただ。あの時は寂しかったなあ。

空港まで見送りに行っ、思わず泣きそうになっただけ。

ん？・・・あ。

「あああ！」

「・・・何なんですか、さっきから」

「今つてもしかして、私、見送りに来たの!？」
「・・・」

思い出した!この光景!

高校1年の春休みに、あいつを成田まで見送りに来た時だ!
そうだ、そうだ!あの時と同じだ!

私はお腹を抱えて笑った。

「なーんだ!あの時の夢かあ。懐かしいなあ」
「・・・」

「でも、どうして急に10年も前の夢を見てるんだろう?
あいつはまだ海外だし、特に昔を思い出すような出来事もなかった
と思うけど」

「・・・」

首を傾げながら笑う私を見て、男の子が無言ですつと手を伸ばしてきた。

そしてそれがそのまま私の額に触れる。

その温かさが夢とは思えないほどリアルで、私は思わず笑うのを止めた。

「本当に大丈夫ですか?熱でもあるんじゃないですか?もう飛行機も行っちゃったし、早く寮に戻って休んだ方がいいですよ」

「う、うん・・・」

「今から生徒会で新入生の歓迎会の打ち合わせですけど、本竜先輩
は体調が悪いから休みですって僕言つときますから」

「うん・・・」

生徒会。

そうだった。私、生徒会やってたんだ。

普通は成績が学年で1番の生徒がやるんだけど、その生徒であるあいつが「生徒会なんか面倒臭い」なんて言って、2番の私に振ったもんだから、渋々やってたんだっけ。

どうやらこの子も生徒会をやっているようだ。

それに、ネクタイの色が高等部の青ではなく赤のところを見ると、やはり中等部の生徒なんだろう。

えーっと。ちょっと待って。思い出しそう。

この子は・・・この子は・・・確か・・・

「つきしま月島君？」

「はい」

「やっぱり！」

そうだ！月島君だ！

入試で過去最高得点を叩き出した、超秀才の月島君だ！
一緒に生徒会やってたんだった！

「うわー！懐かしい！久しぶり、月島君！」

「はい？」

「あ、そっか。これは夢だから久しぶりも何もないか。でも懐かしい！月島君、今はどこで何やってるんだろう」

「はい？」

思わぬ再会（？）に大興奮の私を、月島君はいよいよ本気で心配し始めたのだった・・・。

第1部 第2話

私は成田から海光へ戻る電車の中、ずっと無言のままだった。

いつもは言葉数が少なく「冷めてる」キャラなのに、夢の中とはいえ懐かしさのあまり騒いでしまったのを恥じていたからだ。それに、奇妙な気分だった。

この夢、凄くリアルだ。

忘れていたけど、確かに私は高校1年の春休みに月島君と一緒に友達を見送るため、成田へ行った。そしてこうして一緒に海光へ戻った。

私と月島君は、生徒会で顔見知りではあったけど、そんなに仲が良かった訳じゃない。

というか、挨拶程度しかしたことがない。まあ、これは私からすれば月島君に限ったことではないけれど、とにかく私と月島君は一緒に出掛けるような関係じゃなかった。一緒に成田へ行ったのは、月島君もあいつを見送りに行くというのでたまたま一緒になっただけだ。

そんなこと、すっかり忘れてた。

自分でも忘れていたことを夢で見えて思い出すなんて、変な感じ。

だけど、それだけじゃない。

電車の揺れ、レールの軋む音、吊革の感触。

全てが生々しい。

時間の流れも正確だ。

夢の中つてよく急に場面が飛んだり、ゆっくり時間が進んだりするの、この夢は現実と同じ速度で時間が流れ、場面もちゃんと繋がっている。それも12年前のあの日と全く同じように。

まるでタイムスリップでもしたみたいだ。

私は吊革を何度も握り直して、その感触を確かめた。

「やっぱり今日の本竜先輩、変ですよ」

月島君が心配そうに私を覗き込む。

「そうかな」

そうよね。

夢の中とは言え、中身は28歳で外身は16歳だ。
自分でもチグハグした感じがする。

それにしても月島君、かつこいいな。あの頃はそんな風に思ったことなかったのに。

夢の中だから美化されてるんだろうか。

いや、違う。

あの頃の私は、他人に全く興味がなかった。

それは今でも余り変わらないけど、さすがの私も大人として子供の月島君に対して完全には無関心でいられないのだろう。

つまり私も、周りに少し気配りできる程度には成長しているということなのかな。

「やっぱり今日の生徒会は休んでください」

月島君が隣で何度も握られては解放される吊革に同情したのか、私にそう言ってくる。

「うん・・・」

私は、そんな演技をする必要があるのか分からないけど、なんとなく恥ずかしくて、今より更に無口な昔の私を演じ続けていた。でも頭の中では、理性とある衝動が激しいバトルを繰り返していた。

生徒会に出てみたい。

昔の私なら渡りに船とばかりに面倒な生徒会を休んでいただろうけど、28歳の私には12年前の学校生活が宝石のように輝いて見える。

夢とは言え、こんなまたとないチャンスを見すみす逃したくはない。でも、本当の自分を晒すようで妙な羞恥心がその衝動を邪魔する。

「・・・だけど夢だし」

「え？」

「出るわ、生徒会」

月島君が意外だと言わんばかりに目を丸くする。

「何、張り切ってるんですか。生徒会の時なんていつも以上に無口なくせに」

「そうだけど・・・。あ、ほら、休むと五月蠅いじゃない？委員長が」

そうそう、思い出した。生徒会の委員長ってやたらそういうことに
厳しい人だったんだ。

我ながら上手い言い逃れ（？）だわ、と、思ったのだけど、月島君
は首をかしげた。

「委員長って、昨日卒業した前の委員長のことですか？それとも今
日就任する新高校3年の委員長のことですか？」

あつ。しまった。

「前の委員長は優しい人でしたよね。新しい委員長のことは俺はよ
く知りませんけど」

「あー・・・うん、えーっと」

そうだった。生徒会の委員長は毎年この時期に変わるんだった。

私が高2の時の委員長は確かに口うるさかったけど、

このころの月島君は、そして私も、そんなことはまだ知らないんだ。

「ほら、なんかそんな感じがする人じゃない？」

私は苦しい言い訳で逃げた。が。

「そうですか？人を見た目で判断しちゃいけませんよ」

「・・・」

なんか面倒くさい子だな、月島君。

もつと中学生らしく大人の言うことには素直に従いなさい。

でも、自分の思ってることを何の遠慮もなく口にできるのは子供な
らではなのかな・・・

とにかく面倒くさい。

それから海光につくまでの間、私は再び口を噤んだのだった。

「では、今年も例年通り新中学1年生の歓迎会は、まず寮生活の案内と部活紹介、その後に食堂で立食パーティにしたいと思います。賛成の人は手を上げてください」

生徒会が会議室代わりに使っているパソコンルームのあちこちでパツと手が上がる。

その数、わずか九つ。

だけどそれは反対多数ではなく、満場一致を意味する。

海光は1学年に2クラスしかなく、1クラスに1人生徒会委員がいる。

つまり、生徒会委員は中等部・高等部でそれぞれ6人。合計12人。ただ今は高校3年生が卒業した後なので、一時的に10人だ。

そのうち9人が賛成。残りの1人は提案した本人である新・委員長。つまり、満場一致なのだ。

もちろん私も手を上げている。こんなところで反対してもなんの意味もない。

私は最前列の左端の席を見た。

そこには、私と同じように右手を上げた月島君が座っている。

席は学年順。ということは月島君、中学1年生なんだ。もうすぐ2年になるとは言え、見た目はやっぱり随分と大人っぽい。夢の中だからだろうか。

これで中身ももう少し大人っぽければ言うことないのに。

探すのが骨なくらい古風な黒縁眼鏡をかけている委員長の子が、手の数を数えて（数えるまでもないだろうに）満足げに頷いた。

「では、これで決定です。立食パーティの手配は僕がやっておきます。部活紹介の手配は・・・月島君」

「はい」

「部活に所属しないといけないのは中等部の生徒だけだから、部活紹介の手配は中等部の委員がやった方がいいと思うんだ。月島君、頼むよ」

「分かりました」

私は委員長の言葉でまた懐かしい気持ちになった。

海光はただのエリート学校じゃない。将来の日本の経営者を育成するというのがコンセプトの学校だ。そのため生徒は少数精鋭で1学年50人しかおらず、全員中学からの入学で高校からの入学は認められていない。

更に校則はないに等しく、全て生徒の自主性に任されていた。だから全寮制のくせに門限もなく外泊も自由。何かルールが必要な時は生徒会が作る。

海光はそんな学校だ。

そして極めつけは「バイト」。

海光では高等部の1年生と2年生には全員バイトが義務付けられている。これは生徒会が決めたことではなく、学校の授業の一環だ。「経営者を目指している人間が最前線を知らなくてどうする」ということらしい。

バイトをしなくていいのは、生徒会委員と大学受験がある高3とバイトの募集自体が無い中等部の生徒。その代わり中等部の生徒は部活か生徒会をやらなくてはならない。なんとも変わった教育方針である。

「月島君、1人で大丈夫かな？必要なら、誰かに手伝わせていいよ」部活紹介の手配を新中3の委員ではなく、しっかり者とは言え新中2の月島君に頼んだことにちょっと後ろめたさを感じたのか、委員長が気を使う。

でも月島君は「いえ、1人で大丈夫です」とキツパリと返事をした。・・・が、何故か急に弱気な声を出した。

「あ、でも・・・そうですね。高等部の先輩に手伝って頂いてもいいですか？」

「構わないよ」

「じゃあ、本竜先輩。お願いします」

はいよ。お姉さんに任せなさい。

って、はあ？

第1部 第3話

中等部の部活紹介の手伝い!?

なんで私がそんな面倒なことしなくちゃいけないの!?

私、高等部の生徒なのよ!

じゃなかった、28歳なのよ!

もうとつくに卒業してるんだから!

・・・と。これ、夢だったんだっけ。

落ち着け私、と自分に言い聞かせ、

時間稼ぎの為に曖昧な笑顔を作りながら私は猛スピードで頭の中の日記帳をめくった。

ない。

中等部の部活紹介の手伝いを頼まれたというページも、実際に手伝ったというページも、日記帳のどこにもない。

なんで?

そりゃ夢だから現実にあつたこと通り進まなきゃいけない訳じゃないけど、今までは全く現実通りだったのに、なんで急に現実にはなかったことが起きるの?

夢だから、と言ってしまえばそれまでだけど、なんか引かかる。

「本竜さん。いいね?」

出席にはうるさいくせに、いつも早く生徒会を終わらせたがる委員長が、「いい?」じゃなくて「いいね?」と言ってくる。

良くないわよ、全然！

そんな思いで月島君を睨むと、月島君は懇願するような目で私を見ていた。

月島君と言えども、初めての大事な仕事が不安なのかもしれない。

なによ。そんな目しないでよ。

高1の私ならそんなのお構い無しに「お断りします」と言っただろうけど・・・やっぱり大人として、子供は見捨てられない。

私は諦めて肩を落とした。

「・・・分かりました」

とたんに月島君がホツとして破顔した、よくに周りには見えただろう。

だけど私には分かった。

月島君の目がニヤリとしていたことが。

・・・こいつ!!!

困った振りして私を巻き込んだな！？

私は思わず顔を赤らめて月島君をもう一度睨んだ。

だめだめ、もう遅いよ、本竜先輩。

と言わんばかりに、月島君はついつと前を向く。

やられた!!!

「では、部活紹介は月島君と本竜さんが担当ということで。今日の生徒会はこれで終わります」

終わりますじゃない！

前言撤回！

絶対手伝ったりなんかしないんだから！

って、ん？

終わり？これで？

「あ、あの！」

頭で考えるより先に口が動いた。

ついでに身体も動き、腰がスチールの椅子から浮く。

委員長は驚いた顔をして、ノートを閉じていた手を止めた。

「なんですか、本竜さん」

「あ。ええっと・・・もう終わりですか？」

「はい」

ええ？

歓迎会の流れと部活紹介の担当を決めただけで終わり？

そんなんで歓迎会、大丈夫？もっと細かいことも決めておいた方がいいんじゃない？

そう言えばこの委員長、いつもこうだった。

大まかなことだけ決めて、後はその場で適当に考えて対応するんだった。

だから「その場」で私たちはいつも困ってたんだ。

でもそんなこと、わざわざ私が進言しなくても・・・

だけど椅子から浮いた腰を今更何も言わずに下ろす訳にはいかない。月島君が私を見ているのを視界の端で感じながら、私は腹を据えた。

「あの・・・えっと、案内の紙とかを作った方がいいと思います」「紙？」

「はい。歓迎会の日のスケジュールや担当者、連絡先が書かれた紙です。」

在校生には事前に、新入生には入寮の日に配るんです」

「そんなの、今まで通り口頭で連絡すればいいじゃないですか」

委員長がパタンとノートを閉じる。

くっ。こうなりやヤケだ！

「でも！新入生は緊張してるし、新しい環境でトイレの場所一つ覚えるのも大変です。」

いくら海光の入試に受かった子たちだと言っても、小学校を卒業したての１１歳だし・・・

学園内の地図も作って、部活紹介をする場所や立食パーティーをする食堂の場所も分かるようにしてあげた方がいいんじゃない、」

「僕もそう思います」

突然左前の席から声がした。

その目はもう笑ってはおらず真剣だ。

「僕も去年入寮したとき、右も左も分からずに困りました。地図は便利だと思います」

「・・・」

委員長は無言のままだ。でもその手はまたノートを開いている。どうやら月島君の発言には力があるらしい。

ちよつと悔しいけど、月島君の口から次々に出てくる言葉には、話し方には、

「力」があつた。

「新入生の入寮日は入学式の2日前の春休み中です。実家に帰省中の在校生も多くて、新入生は相談できる人もおらず、『食堂はどこだろう』『外出してもいいのかな』『誰に聞けばいいんだろ』と、不安になります。そういう心配事を相談できる窓口的な人がいた方がいいと思います」

「それはつまり、強制的に誰かに、帰省をせずに新入生のお守りをしろと命令するということですか？」

そんな酷な事やらせれるはずないだろう、という考えを委員長は言葉の裏に滲ませた。

その実、そんな面倒なことを議論したくないだけだとは思うけど、確かに月島君の提案には無理がある。

在校生だってみんな、親元を離れて寮生活している子供だ。長期休みくらい実家に帰りたい。

口には出さないけど、この部屋にいる全員がそう思っているのは明らかだ。

だけど月島君は怯まなかった。

「はい」

「でも・・・」

「何も、春休みの間ずっと帰省するなど言っている訳ではありません。春休みは2週間あります。入学式は1学期の始業式の2日前です。いつもより2日か3日早く学校に戻ればいいだけです」

「・・・」

「それに新入生は50人。面倒見役は1人か2人で充分です。それで新入生全員の不安を取り除けるならやる価値はあると思います」
「・・・誰にやらせるんだい？」

そう。それが問題だ。そんなこと、誰だってやりたくないに決まっている。

「基本的には在校生から募集するのがいいと思いますが、どんな問題が起きるか分からないから最初の年は生徒会の人間がやった方がよいと思います。来年からは、面倒見役をやってくれた生徒には何か特典を与えるという風にすれば、結構応募する人がいるんじゃないでしょうか」

「特典？」

「寮の共同スペースの掃除を1ヶ月免除とか」

あちこちから「おお！」という声が上がった。

寮の共同スペースというのは、お風呂やトイレなんかのことだ。この掃除当番は、生徒会が決めた順番で回ってくるんだけど、生徒数が少ないからかなりの頻度で当番に当たってしまう。

これを1ヶ月も免除してもらえらなら、確かにおいしい！

「なるほどね。それはいいかもしれない」

珍しく委員長がすんなりと月島君の提案を受け入れた、と思いきや。

「でも、最初の年を担当する生徒会の委員にはその特典は与えられない。自分で自分にご褒美をあげるようなものだからね。それでもやるという委員がいるなら、やってみようじゃないか」

委員長は挑みかけるように月島君にそう言った。

高2のくせに中1の子供にムキになるなんて大人げない。

だけど、委員長が大人げないなら、月島君は子供げなかった。

「僕がやります」

「え？月島君が？」

「はい。もちろん特典はいりません」

「・・・そんなこととして、月島君になんのメリットがあるんだ？」
「ありません。時間的に拘束されるという意味では僕にとってはむしろデメリットかもしれません。」

でも新入生50人にメリットはあります。1人のデメリットと50人のメリット、差し引きして49人のメリットが期待できます。全体としてメリットの方が大きいなら、やるべきでしょう？」

「・・・」

委員長が言葉を続けれずに黙り込む。

なんとまあ筋が通っているというか、理屈っぽいというか、
だけど説得力はある。

中1のくせに、なかなかやるじゃない。

「委員長」

「・・・なんですか、本竜さん」

「私もやります」

「え？」と言ったのは委員長ではなく月島君だ。

「いくらなんでも月島君1人じゃ大変でしょう？どうせ部活紹介の準備も一緒にしなきゃいけないんだから、新入生の面倒見役の方も手伝います」

月島君の提案は、高く上げられた8つの手によって承認された。

残る2つの手の1つは提案者の月島君。

もう1つは委員長。

だけどこの生徒会は純然たる民主主義だ。

こうして月島君と私の大仕事が始まった。

第1部 第4話

「遅かったわね」

扉を開けた瞬間、待つてましたとばかりに嫌味な声が聞こえてきた。でも、そんな声ですら久しぶり過ぎて懐かしく思える。

紛糾した(？)生徒会の後、真っ直ぐ寮の部屋に戻ればそんなに遅くはならなかっただろうけど、私はある理由で帰るのが遅くなってしまった。

その理由とは・・・そう、迷子。

だって、10年以上も前に自分が寮のどの部屋に住んでたかなんて、さすがに覚えてない。しかも海光では毎年部屋替えがあったから、高校1年の時にどの部屋にいたかなんて尚更分らない。

そういう訳で、私は記憶にある部屋を片っ端からピンポンダッシュするはめになった(実際には「ピンポン」なんて部屋についてないから「ノックダッシュ」だ)。

で、ようやく正解に辿り着いたというのに、そこで私を待っていたのは6年間の中で1番相性の悪かったルームメイトの声。もっとも、どのルームメイトとも大して仲良くはなれなかったから、「1番」も何もないけれど。

「すみません、山脇先輩。生徒会で遅くなりました」

案外覚えているものだ。私は自分の記憶力に拍手を送った。

そう、この人は山脇なんとか先輩。確か私の1つ上だ。高2の初めの部屋替えで離れられた時はお互いホッとしたっけ。

山脇先輩は英訳された宮沢賢治の本から顔を上げ、眼鏡の奥の小さな目で私を見た。

「生徒会がある時でも、いつもはこんなに遅くならないでしょ」

私に興味なくせにこういふところは気にする。相変わらずというか、夢の中でも現実と同じというか。

面倒臭いなと思いつつも、一応説明しておく。

「特命の仕事ができたんで、他の担当者と打ち合わせていました」
「特命の仕事？他の担当者？」

山脇先輩がまた質問を返してくる。

・・・あれ。もしかして山脇先輩って、私のことそんなに嫌いじゃなかったのかな。

本当に興味なかったら、こんなにつつこんでこないよね・・・？

私は目から鱗の思いで山脇先輩を見た。

いや・・・これは夢だから、自分の中で思い出を美化しているだけだ。あの山脇先輩が私に興味を示すなんてこと、あるはずない。

それでも私は、昔のように「はい、ちょっと」で済ませられなくなってしまった。自分を無視しない人間を無視するというのは、思っている以上に難しい。

「新入生の受け入れと中等部の部活紹介の手伝いをする事になったんです」

「本竜さんが？」

ビビッとした反応。私が働くことがそんなに意外なのか。

「はい。中等部の月島君と一緒に」

「月島君!？」

更なるビビッドな反応。

山脇先輩は本を閉じ、椅子を回転させて完全に私の方を向いた。どうやら月島君のことが気になるらしい。

「月島君に興味あるんですか？」

「もちろん!」

・・・驚いた。

私が言うのもなんなんだけど、山脇先輩は勉強にしか興味がないと思っていた。

ううん、山脇先輩だけじゃなく、海光の生徒のほとんどが勉強にしか興味がないと思っていた。

恋愛だ友情だで騒いでるのはごく一部の生徒——もしくは海光以外の「外」の人間——で、そんな物は私の世界には存在しないのだと。

だけど視野を少し広げると、実はみんな色んなことに興味を持っていて、そうじゃないのは私だけだったのかもしれない。

山脇先輩が椅子から身を乗り出す。心なしか目が大きくなってキラキラしている。

「だって、まだ13歳なのにすぐかつこいいし、海光始まって以来の秀才じゃない?どんな子が興味あるわよ。ねえ、月島君でどんな感じの子?見た目通りクール?」

ク、クール……。あれをクールと言うんだろうか……。

私は生徒会での出来事を思い出しながら言った。

「なんかちよつとそんなんじゃないかったです。どちらかというと、腹黒い感じがしました」

「あー、そっちな」

どっちよ。

「でも、あの見た目で腹黒いのは許せるわよね。俺様って感じで、それはそれでかつこいい」

「それもちよつと違う感じがします。ただ生意気なだけですよ」

「あれだけ頭が良けりゃ、生意気にもなるわよ」

「それもそうですね」

変なの。現実ではほとんど話したことのない山脇先輩とこんな風におしゃべりしてるなんて。

しかも男の子の話。

そして山脇先輩も、ここぞとばかりにあることを私に訊ねてきた。

「そう言えば、本竜さんて彼氏とはどうなったの？」

「彼氏？」

「ほら、あの変わった子。茶髪でピアスの。留学したんでしょ？続いているの？」

「ませぎ 柵木君ですか！？」

思わず大きな声で、昔アメリカへ旅立って行った・・・違った、「今日」アメリカへ旅立って行った同級生の名前を口にする。いつの間に、柵木君が私の彼氏になったのか。

「柵木君は彼氏じゃありません」

「だって、噂になってたじゃない」

「なってますん」

「なってるって。『氷の女王と学校一のやんちゃ坊主が付き合ってる』って」

氷の女王・・・は、私ね？

で、学校一のやんちゃ坊主が柵木君か。

的確なネーミングだ。

「仲は良かったですけど、付き合ったことなんてありません」

「そうなの？面白くない」

「面白くないです。私、もう寝ます。おやすみなさい」

私がわざとらしく会話を切り上げると、山脇先輩はちょっと笑ってからアルファベットで作られた宮沢賢治の世界へ戻って行った。

もし本当に山脇先輩がこういう人だったのなら、昔の私は物凄くもつたいないことをしたのかもしれない。そんなことを考えながら私はベッドに入った。

きつと次に目が覚めた時にはこの夢は終わっていて、またいつもの生活に戻ってしまう。

だけど高校時代を再体験できて面白かった。

ただ、やっぱり私が部活紹介の手伝いをしたという記憶はない。

月島君が部活紹介を担当したかどうかまでは覚えてないけど、私を手伝ってないのは確かだ。

それに新入生の面倒見役。これも間違いないと断言できる。そもそも、そんな企画自体なかったと思う。

あ、そうか。面倒見役は月島君が言い出したことだけど、案内の紙を作った方が良く言い出したのは私だ。月島君はそれに対して追加案を出したただけだ。

つまり、現実の世界では起きなかったことを起こしたのは、私自身ということになる。

そうよね。この夢は、私が見ている夢なんだから、私の都合のいいようにできるのよね、きつと。

でも、じゃあ部活紹介の手伝いは？

あれは間違いなく月島君が言い出したことだ。私は何も言っていない。それとも、無意識のうちにやっぱり私が何か現実とは違う言動を取ったから、月島君がああ言ったのだろうか？

だとしたら、私、何をしたんだろう？

えっと・・・なんだろう、何か大切なことを忘れている気がする。

「あーあ、私も彼氏、欲しいなー」

どうしたら宮沢賢治を読みながらそんな台詞が出てくるのか、山脇先輩が独り言のように呟いた。

「私も、って・・・だから、柵木君と私は付き合ってません。私は彼氏なんて欲しくないし」

「そうなの？私は欲しいな。男を見る目を磨いて良い結婚相手を見つけない」

結婚相手。その言葉が一気に私を現実の世界に引き戻す。

そうだ。私、許婚が、というか、旦那がいるんだった。

だからずっと、恋愛なんかするだけ無駄だと思ってたし、告白なんかされても困るだけだと思ってた。

もつとも、私に告白してくる人なんて誰も・・・

「あ」

「どうしたの？」

「あああ！」

思い出した！

物凄く大事なこと！どうして忘れてたんだろう！？

「・・・そうか・・・だからこんな事に・・・」

「？」

「山脇先輩、私ちょっと出掛けてきます」

「ええ？こんな時間からどこ行くの？」

「男子寮」

山脇先輩は目を丸くした。

学年末テストも終わり、高3の卒業式も済み、在校生は春休みを待つばかりの時期・・・だからなのか、平日なのに外泊者が多いらしく、男子寮の入り口から見えるロビーに人影はほとんどなかった。そう言えば女子寮でもあんまり生徒に会わなかったな。

でも良く考えればそれもそのはず。男子寮の住人が一緒に外泊する相手は、たいてい女子寮の住人なのだから。

このへんはいかにエリート学校と言えども、世間と変わらない。いや、親元を離れている分、海光の生徒の方がそういうことに関しては案外大人だ。生徒会も「男女の外泊を禁止する」なんてルールは作ってないから、みんな堂々と遅い時間に手を繋いで外出して行ったりする。

だけど「男子が女子寮へ入ること、また、女子が男子寮へ入ることを禁止する」というルールはある。

だから私はこうやって男子寮の入り口で待っている訳で・・・

来た。

明らかに不機嫌な月島君がエレベーターから降りてきた。

もう寝ようと思っていたのか、下はストライプが3本入ったジャージのズボン。上はTシャツにズボンとお揃いのジャージを羽織っている。

どうでもいいけど、男の子って普段と違う服装をすると、足が長く見える。

ズボンをずらしてはかなければ、だけど。

「ごめんね、月島君。寝るところだった？」

「はい」

・・・声が低いな。本当に機嫌が悪そうだ。

「俺、睡眠をしっかりと取らないと調子がでないんです」

「じゃあ、明日でいいわ」

「呼び出しといて、それはないでしょう。さっさと用件、言ってください」

「・・・」

なんの為にわざわざ来てやったと思ってるのよ。
そう言いたいのを、グツと抑えていつもの冷静な私を装う。

「じゃあ用件だけ言わせてもらっね。月島君、今日の昼間、私に告白したでしょう？」

「・・・」

今度は月島君が黙り込んだ。

今日の昼の成田。

突然夢の中に舞い込んで驚いていたから忘れたけど、月島君は「俺、先輩のこと好きなんですよね」と言っていた。

そして思い出した。

同じことが12年前にもあったことを。

あの日、柵木君が乗った飛行機が飛び立つのを見た直後、私は確かに月島君に告白された。

第1部 第5話

「なんだ。覚えてたんですね」

月島君は、焦るでもなく照れるでもなく、そう言った。

「ごめんね。バタバタしてたから返事できなかった」

まさか忘れてたとも言えないし。

だけど月島君は素直に「そうですね」とは言わなかった。

「そうですね」の代わりに・・・

「そうですか？」

「・・・」

「バタバタなんかしてました？普通に学校に戻っただけだと思いますけど」

「・・・」

「まあ確かに、先輩ちよつと変でしたけど」
「・・・」

どこまでも可愛げのない子だ。

待て待て。

実年齢では私とこの月島君は倍も違う。こんな子供のペースにはまっつてどうする。

そう、私は大人なんだ。13歳の月島君を振るには「大人の配慮」
ってやつが必要だ。

月島君がこれからまた新しい恋愛をしようと思えるように。

だけどそれなりに失恋の痛手を味わえるように。

私はこれが夢だということも忘れて、頭をフル回転させた。

どんな言葉をで振るのが理想的だろう？

少なくとも、12年前に実際に私がした返事は有り得ない。だって、あの時空港で私は・・・

「何考え込んでるんですか。本竜先輩なら『そう』って言って流す
思ってたのに」

「・・・」

凶星だ。12年前、私は確かにそう言った。

「俺、先輩のこと好きなんですよね」と言った月島君に対して「そう」と。

月島君の告白は、告白というより報告に近かった。「好きだから付き合っ
て欲しい」というような「告白」ではなく、「自分は先輩を好きだ」というただの「報告」。

だから告白なんかされ慣れていない16歳の私は「そう」とだけ答え
えた。

報告を受けた者としては、その内容をただ聞くしかない。

だけど12年前のあの時、私は正直「助かった」と思った。

もし月島君が「報告」ではなく「告白」してきたら、私は困っていた
と思う。

私は誰とも付き合う気なんてない。

だから月島君のことは振るしかない。

でも誰かを振るなんて、私にはとても気の重い仕事で・・・

今思えば、月島君はそんな私の考えを分かっていたのかもしれない。だから敢えて「報告」にしておいてくれたんじゃないだろうか。そして私は月島君の予想通りそれを「そう」と流した。月島君もそれ以上何も言わず、もちろん私を部活紹介の手伝いに誘ったりしなかった。

でも、今日は私が流す以前に返事することすら忘れていたから、月島君は思い切って私を部活紹介の手伝いに誘ったのだろう。

そんな月島君に、私も真摯な態度で返事をしなくちゃいけない。例え振るにしても。

それが「大人」だ。

「あ、あのね、つきし、」

「無理しなくていいですよ」

「え？」

月島君が欠伸を噛み殺しながら言う。

「俺、何か返事を貰おうと思ってた訳じゃないから」

「でも・・・じゃあどうして告白したの？」

「別に。思ってること言っただけです」

「・・・」

私に気を使ってくれてるのよ・・・ね？

うーん、どうだろう。怪しいな。

実はこれが月島君の本音なのかな。

よく分からない。

「先輩は誰のこと好きじゃないでしょう。俺分かてるから、無理して何か言おうとしなくていいですよ」

「う、うん」

機嫌が回復し、まるで私を諭すように話す月島君。どっちが年上なんだか分かりやしない。

だから。これじゃダメなんだって。

巡回にきた寮の警備員さんが、男子寮の入り口で話し込む私たちに冷やかすような視線を投げてきた。

若いねー、とか思ってるんだろうけど、私の実年齢はあんたより上よ、きつと。

さっさと仕事に戻りなさい。

余計な思考へ逃げようとする脳を必死に呼び戻し、私は月島君になんと言うか考えた。

『月島君にはもっと相応しい人がいるよ』

『3つも年上の女なんかやめときなさい』

『初恋は片思いで終わらせたほうがいいのよ』

うーん。どれもまいち。

もっとストレートなのはどうかろう。

『月島君のこと、恋愛対象として見たことがないの』

『私、許婚がいるの』

ダメだ。全然大人な答えになってない。

もっと月島君の心に響くような、意外なことを言いたい。

「じゃ、おやすみなさい」

警備員の視線をやりすごした月島君が、背伸びをする。

え？行っちゃうの？
待ってよ。

「明日の放課後から、部活紹介と面倒見役の打ち合わせをしまし
う」
「う、ん」

待って、待って。
今、考えてるから。

「面倒見役って名前、嫌ですね。何かかっこいい名前考えないと」

そう。考えないと。

大人な答え。

意外な答え。

月島君が「おっ」と思っような。

「じゃあ」

月島君はなんの未練もない様子で私に背を向け、寮の入り口に向か
って歩き出した。
足取りも至って普通だ。

このままじゃ、本当に行っちゃう！

「待って！」

思わず声が大きくなる。

月島君は足を止めて驚いたように振り向いたけど、それは私に呼び止められたからではなく、ただ私の大きな声に驚いただけみたいだ。

「なんですか？」

「えっと・・・」

何か言わなきゃ。

何か、凄いことを。

「私、」

「はい」

「・・・いいよ！」

「はい？」

「月島君と付き合ってもいいよ」

月島君が目を見開く。

やった！大成功！

じゃなくって！

何言ってる、私！

こんなこと言って驚かせてどうする！

い、いや、頭のいい月島君のことだ。

きつと「何言ってるんですか」とか「無理しなくていいですよ」とか言ってくれるはず。

ねえ？月島君？

「何言ってるんですか」

ほら！さすが、月島君！

私はしおらしく「だって・・・」という表情をした。

我ながら気持ち悪いけど、仕方がない。

これで月島君がもう一度「おやすみなさい」と言ってくれれば、それで終わりだ。

ちよつと予定が狂っちゃったけど、まあいいや。

ところが。

寮の入り口にある外灯の光の中、月島君はしばらくポカンと私を見つめた後、急にニヤリと目で笑った。

昼間に私を部活紹介の準備に巻き込んだ時と同じ目だ。

な、何よ。何なのよ。

「本竜先輩」

「は、はい」

「自分の言葉に責任持つてくださいね」

「えっ」

「取り消しは無しですから」

「えっ」

「じゃ、そーゆーことで」

「えっ」

月島君は再び私に背を向け、歩き出した。
ちよつと待って。

そーゆーことってどーゆーこと？

・・・まさか。

まさか、まさか。

「あ、そうだ」

月島君が寮の扉に手を掛けながら、忘れてた、というような声を出した。

「明日からは先輩のこと、桜子って呼びますよ。敬語もなし。いいですね？」

「・・・」

声とは裏腹に、寮の扉に映った「してやったり」という月島君の顔を、私は一生忘れないだろう。

第1部 第6話

「部活紹介は、基本的に去年と一緒にいいかなー。まず文化系の部活、それから体育会系。体育会系が先だと、どうしても文化系が地味に見えるから」

広げられたノートに、月島君が文字を書いていく。

一つ一つ丁寧に並べられた綺麗なそれは、まるで習字の手本のようだ。

「その中でも順番を決めないよね。」

まあ、うちは文化系の部活も体育会系の部活も3つずつしかないけど」

「・・・」

「文化系のトップバッターは去年家庭科部だったから、今年は別のところがいいな。体育会系のラストは一番派手なバスケット部にお願いしよう」

「・・・」

「あ、場所は体育館でいいよね？去年もそうだったし、一番準備がしやすいし」

「・・・」

「どう思う？桜子」

月島君はTHE・優等生な笑顔でノートから顔を上げた。

昨日の夜、男子寮からフラフラと戻った私は、「夢なら一晩寝れば覚めるはず」と自分に言い聞かせて頑張って寝たけど、目が覚めて

も夢は覚めていなかった（ややこしい）。

しかもこの夢、ちゃんと昨日の続きになっていて、月島君は約束通り放課後に私の教室へやってきた。

そして宣言通り私のことを桜子と呼び、敬語もやめている。それはもう見事なぐらい自然で、ずっと前からそうだったかのように。

つまり。

私と月島君は、「そーゆーこと」になっただけらしい。

「はあ」

「どうして私、月島君と付き合うことになっちゃったんだろう。あんなこと言わなきゃよかった。でも、自分の言葉に責任持てと言われれば確かにその通りだし」

「・・・ちよつと。私の心を勝手に読むの、やめてくれる？」

「心を読んだんじゃない。顔に書かれてある文字を読んだだけだよ」

クールなのかお茶目なのか良く分からない月島君が、真面目な顔をして答える。

これだ。みんなこの優等生面に騙されてるんだ。

実はとんでもない詐欺師なのに！

「人聞きの悪いこと言うなよな。俺、騙してないし」

「私は騙された！」

「勝手にそう思ってたれば？よし、次は『面倒見役』の新しい名前を考えよう。英語だとどうなる？」

「baby sitter」

「違うだろ。ヘルパー、アシスタント、マネージャー、アドバイザー・・・うーん、なんか違うな」

「月島君で英語の発音下手ね」

「うるさい。なんかこう、新入生が親しみを持てるような名前がいんだけど、なんかない？」

へいへい。

考えればいいんでしょ、考えれば。

私は両手で頬杖をついて、向かいに座っている月島君のサラサラと揺れる綺麗な前髪を見た。

だって真正面から人の目を見るなんて、なんか恥ずかしい。向かいに座らないんで欲しいですけど。

「無理にちゃんとした英語使わなくていいんじゃない？ミニ・ティーチャーとかどう？」

「嫌だ」

「じゃあ、リトル・ティーチャー」

「それも嫌だ。ティーチャーっていうのがなんか嫌」

「贅沢ね。じゃあこの制度の名前を『リトル・ティーチ制』にして、面倒見役のことはリトルと呼ぶ、でどう？」

月島君は返事をする代わりに目で笑った。
お気に召したらしい。難しい王子様だ。

「ついでに言わせてもらうと、部活紹介の順番、ちょっと考え直した方がいいわよ」

「どうして？」

「基本的には文化系が先・体育会系が後で良いと思うけど、全部のラストは演劇部がいいんじゃない？演劇部って毎年演劇をするでしょ？」

「そっか。演劇見た後ってなんかフワフワした気分になるもんな。

その後の部活紹介なんて集中して見れないだろうから、演劇部は最後にしよう」

ノートの中に訂正線が引かれ、文字列の最後に「演劇部」とい文字が加わる。

その後も私と月島君は、かなり細かく部活紹介について打ち合わせた。

演劇部以外の文化系の部活（家庭科部と歴史研究部）には、今年から何かを展示してもらうようにお願いする、という大きなことから、新入生の席、部活紹介をする在校生の待ち場所、最初と最後の挨拶、といった小さなことまで。

月島君のノートはゆうに3ページは文字で埋まった。

「ふう、今日はこれくらいにしようか」

「そうね、結構頑張ったわね」

本当に頑張った。

本気で頑張ってしまった。

こんなに一生懸命何かの企画を考えるなんて、現実の仕事でもしたことがない。

まだ部活紹介を成功させたわけでもないのに、すごい達成感だ。

月島君はノートを閉じて、右手を軽く振った。小指側の肌がシャーペンで真っ黒になっている。

「明日、早速家庭科部と歴史研究部へ行って展示品のお願いをしないと。」

あ、そうだ。俺、当日は自分の部活紹介があるから、司会進行は桜

子ね」

「はあ？何言ってるの？ていうか、自分の部活紹介って何？

月島君、生徒会やってるじゃない。生徒会やってる生徒は、部活は免除されるでしょ」

「生徒会なんて、成績トップの生徒が強制的にやらされてるだけじゃん。俺は自分がやりたい部活もやってるの」

「何？」

「バレーボール部」

・・・意外だ。

いかにも歴史研究部って顔してるくせに体育会系だなんて。

「桜子みたいにずっと生徒会じゃ、つまらないでしょ」

「掛け持ちなんて面倒よ。・・・あれ？どうして私が中等部の時も生徒会やってたって知ってるの？」

月島君が入学してきたのは去年だ。

私の中等部時代なんて知ってるはずがない。

私が首を傾げていると、月島君は「当たり前だろ」という顔をした。

「好きな人のことくらい、なんでも知ってるよ」

・・・そんなストレートな。

それから月島君は、本当に「なんでも知ってる」ことを証明し始めた。

「本竜桜子、15歳。誕生日は3月19日、魚座のA型。身長167センチ。体重は、」

「体重は！？」

「知らない」

良かった……。

「って、どうしてそんな私のデータ知ってるの？」

「聞いても無いのに、湊さんみなとが教えてくれたから」

湊さん？ああ、アメリカに行っちゃった柵木君のことか。

柵木君って、いつも月島君にちょっかいかけてたもんね。

月島君はそんな柵木君を「うっとうしい先輩だ」と思いながらも好いてみたいだ。

私は月島君のことはよく知らなかったけど、柵木君と月島君がじゃれ合ってるのは良く見てたんだっけ。

そして月島君のことを「案外面白い子なんだな」とも思ってた。

そんな昔の記憶が蘇ってくる。

月島君が口を尖らせ、柵木君の口真似をした。

「『お前、よく本竜のこと見てるよな？好きなのか？好きなんだろ？

千円払ったら本竜のこと教えてやるよ』って。もちろんお金なんか払ってないけど、

結局湊さん、勝手にペラペラ桜子のこと話すから、覚えた」

「……私のこと、よく見てたんだ？」

「うーん、どうなんだろう。自分じゃ分からないけど、無意識に見てたのかも。

誰かを好きになったらそんなもんじゃない？」

月島君の辞書に「照れ」という文字はないらしい。

恋愛の話なんて、ましてや自分に関する恋愛話なんて、恥ずかしくてとてもじゃないけど口にできない私だけど、月島君の超・直球が私の羞恥心をさらって行く。

「どうして私のことなんか、好きになったの？」

「それも分らない。でも最初はやっぱり見た目かな。桜子、綺麗だから」

「でも、それだけじゃ月島君は人を好きになったりしないでしょ？」
「もちろん。それに桜子は綺麗過ぎて近寄り難いオーラ発してたし」

28年間、耳にタコができるくらい聞いた言葉だ。

「だけど桜子、湊さんと仲が良かったでしょ？」

「うん」

「湊さんて、馬鹿だしスケベだし情けない人だけど、人を見る目はあると思う」

「・・・すごい言いようね」

「本当のことだから仕方ないでしょ。でも、その湊さんが仲良くしてるんだから、本竜先輩って見た目とは違う人なのかなって思ってたにしたら、いつの間にか好きになってた」

「・・・」

「桜子を見た目は冷たそうだけど、実は中身は結構熱いし面白いよね」

「・・・そんなこと、初めて言われた」

「そうなの？周りに見る目がない奴ばかりだったんだね。でも湊さんはそう思ってたと思うけど？」

月島君は当たり前のようにそう言うと、「行こうか」と笑顔で立ち

上がった。

第1部 第7話

部活紹介の打ち合わせの後、校舎を出たところで月島君が足を止めた。

「どこか行く？」

「どこかって？」

「せっかく付き合ってるんだし、恋人っぽくデートでもしようよ」

おっと。

そうか、私、月島君と付き合ってるんだっけ？
ていうか、付き合ってるっていうのかな、これ。

月島君は私に「好き」と言い、

それに対して私は「付き合ってもいい」と答えた。

うーん。不本意ながら、やっぱり付き合ってるっていうんだろうな。

私が考え込んでいると、月島君はどうやら私がデートの行き先について悩んでいると思ったらしい。

「桜子は誰かと付き合ったことある？」

「ないわ」

これから先も、結婚するまでない。

「俺も。初心者同士かあ。これじゃあどこで何をしたらいいかわからないな。行きたいところある？」

「行きたいところねえ」

そう言えば前読んだ雑誌に、新しいセレクトショップが銀座にできたって書いてあったな。

あそこ、行ってみたいかも。

・・・ダメだ。

あれは現実で読んだ雑誌だから、12年も前の夢の中にはそんな店は存在しないはず。

それに、高校1年生と中学1年生のカップルが行くような所じゃない。

学生のデートと言えば・・・

「カラオケ？」

「嫌だ」

嫌だ、は月島君の口癖らしい。

「じゃあ漫喫」

「2人で行くところじゃない」

「映画？」

「悪くないね」

「食事？」

「決定」

どうやら月島君はお腹がすいていたらしい、

と思った瞬間、自分も物凄くお腹が減っているのに気が付いた。

普段はこんな時間にお腹なんかすかないのに、夢の中では胃袋まで高校生になっているようだ。

私と月島君は迷うことなく学校から徒歩10分程の全国どこにでもあるファミレスに入り、ペラペラした大きなメニューを開いた。

パスタ、サラダ、肉料理、パン、ライス、ピザ、フライドポテト、それに120円のドリンクバー。

食べ合わせを全く無視して目に付いた物を次々と注文する。すると、食べる順番なんて全然考えていないような順番で、一目で冷凍食品だと分かる料理がすぐに出てきた。

だけどそんなのはこの空腹の前では些細なことだ。

私はドリンクバーでコップにコーラをなみなみ注ぐと、早速ピザにかぶりついた。

ファミレスの料理がこんなに美味しいと感じたのは初めてだ。

「お上品な顔してるくせによく食べるな」

「月島君こそお肉ばかり食べてるんじゃないわよ。野菜も食べなさい」

「そっちもだろ」

月島君は決してガツガツ食べている訳じゃないのに、食べる速度が凄く速い。

あっという間に肉料理の皿（鉄板？）が空になる。

そもそも男の子の月島君と女の子の私では口の開く大きさが違うし、口内の体積も私より広いだろうから、月島君が私より早く食べれるのは当然なんだろうけど、なんか悔しい。

速度でどうしても勝てないなら、量で勝ってやる！

私は妙な闘争心を燃やし、フライドポテトに手を伸ばした。

「やっぱり桜子は外見と中身が全然違うね。どうして普段はツンツとした振りしてるの？」

「その方が、誰も近寄ってこないから」

「近寄って欲しくないの？」

「うん。人付き合いなんて面倒よ。だから本当は月島君とも付き合いたくない」

敢えてさらっと言ってみる。

だけど月島君もさらっり返す。

「ふーん、そう。でも付き合いつつて言い出したのはそっちだろ」

「分かってるわよ。だからこうやって責任取ってるんじゃない。いつまで付き合えば、責任を果たしたことになるの？」

「一生」

ゴクンと。

喉が音を立てる。

「・・・それ、プロポーズのつもり？」

「さあね」

月島君の長い指がフライドポテトを2本つまむ。

それはそのまま斜め上へ移動し、月島君の口へ入る。

人が物を食べる時の当たり前の動作。

だけど私はそれを生まれて初めて見るモノのように見つめた。

月島君て本当に不思議な子だ。

28歳の私から見ても大人っぽい面を持っている一方で、生まれたての子供のような純粹さ、素直さを持っている。

「さあね」なんて言葉は向こう側が見えるハーフミラーみたいなもので、意味はない。

月島君は今、私と一生一緒にいたい、本当にそう思ってるんだ。

それは、小さな子供が「パパとママとずっと一緒にいたい」と思っているのと同じで、

実現可能かどうかなんていうのは二の次で、ただ今この瞬間の真実の想いなんだ。

唐突に胸の中に何か温かい物が流れ込んできた。

私、誰かにこんな風に思われた事、あったっけ。

旦那のことが頭をよぎる。

少なくとも旦那がこんな風に私のことを思っていない・思ったことがないのは確かで、それは私も同じだ。

これが夢じゃなければ。

これが現実なら。

私の人生は何か変わっていただろうか。

「・・・私、許婚がいるの」

「え？」

再びフライドポテトに伸びた月島君の指が止まる。

「許婚？」

「柵木君から聞いてない？」
「聞いてない」

柵木君、肝心なことは話してないんだから。
それとも、月島君のことを思って、敢えて話さなかったのかな。

「じゃあ桜子、その人と結婚するんだ？」

そうよ。22歳の冬にしたくもない結婚をするの。
結婚式も披露宴も指輪もない、ただ婚姻届を出すだけの結婚を。

「うん」

「・・・ふーん」

さっきの「ふーん」とは明らかにトーンが違う。

私の中に焦りが生じる。

私、月島君を傷つけてしまったのかもしれない。

「だ、けどまだ分からないの。親同士が勝手に決めたことだし、私も向こうも、結婚したいなんて全然思っていないし」

「でも結婚するんでしょ？何言い訳してるの。俺に気を使わなくていいよ」

「・・・」

少しペースを落として月島君がフライドポテトを食べる。

「桜子も食べなよ」と言われて機械的に手を伸ばしたけど、さっきまで塩辛いと思っていたフライドポテトから味は消えていた。

しばらく2人とも無言でフライドポテトを消費する。

「・・・俺、こーゆーの嫌なんだよね」

月島君が急に口を開いた。

「こーゆーのって？」

「だから、こーゆー気不味い雰囲気。喧嘩して気不味くなるのは仕方ないけどさ、桜子に許婚がいるってことに關しては俺も桜子も悪いわけじゃないんだから、気不味くなる必要なくない？」

「・・・うん。そうね」

「桜子の『責任』の期限は、桜子が俺と一緒にいたくなくなるまでにしよう」

「え？」

月島君がニヤツと笑う。

だけど段々分かってきた。

月島君は直球な性格のくせに、その表情は気持ちとは真逆になる。

この笑い方をする時は・・・本気の時だ。

本当に自分が望んでいることを話す時の顔だ。

「桜子が結婚する時になってもまだ俺と一緒にいたいと思ってたら、結婚はやめてそのまま『責任』を取り続ければいい」

「・・・何言ってるのよ」

ダメだ。この直球、堪えられない。

私は顔が赤くなるのを止められなくせに、精一杯天邪鬼になる。

「だったら、もう期限切れよ。言ったでしょ、私、月島君と付き合いいたいなんて思ってたない」

「もちろん、それならもういい。俺、もうちょっと食ってくから、1人で寮に戻っててよ」

「・・・」

ラッキー。これで解放される。

さあ、立ちなさい、桜子。

あ、でも自分で食べた分のお金は置いていかなきゃね。

大人の女なんだから。

うん、うん。

・・・うん。

「何やってるの？さっさと帰れば？」

何故かいつまでも立ち上がれない私を見て、月島君が「真面目な顔」で聞いてくる。

つまり。

心の中では笑ってる訳で。

「なんだよ。結局俺と一緒にいたいんじゃないか」とか思ってほくそ笑んでる訳で。

悔しい。

なんでこんな子供に掌の上で転がされてるのよ、私。

突然、月島君が立ち上がった。

私がいつまでも帰らないから自分が帰ろうとしたのかと思い、私も慌てて立ち上がる。

「桜子もドリンクバー行くの？」

「！！！！」

しまった！

私は真っ赤になって月島君を睨み、ドサツと腰を落とした。

「何、怒ってるの。帰らないなら食べれば？冷めるよ？」

なんてわざとらしい冷静さ。

ムカつく。

ムカつく、ムカつく、ムカつく！

スタスタとドリンクバーに向かう月島君の背中では背筋がピンと伸びてて綺麗だけど、私には大爆笑しているように見える。

でも、さすがに月島君も苛め過ぎたと思ったのか、ウーロン茶片手にドリンクバーから戻ってくると、私に助け舟を出してきた。

って、私。本当にいいように転がされてる。
情けない。

「何か言いたいことは？」

「・・・ないわよ」

「じゃあ、質問は？」

「質問？」

「俺は桜子のこと色々知ってるけど、桜子は俺のこと全然知らないでしょ？だから、何か質問したら？」

何よ、偉そうに。

「・・・身長は？」

「165センチ」

「体重は？」

「53キロ」

「足のサイズは？」

「26センチ」

「誕生日は？」

「12月24日」

「名前は？」

「・・・」

月島君が詰まる。

そして初めて。

初めて、本当に照れたように頬を少し赤らめ、小さな声でこう言った。

「ノエル」

ノエル。

変な名前。

月島君にピッタリだわ。

・・・そうか。

私の彼氏は「ノエル」って言うんだ。

第1部 第8話

「ただいま」

私は実家の玄関の重い扉を力を込めてゆつくりと押した。

「重い」というのは比喻ではなく、物理的に重いのだ。

まあ、この大きな一戸建てにはこのくらい扉がちょうどいい。

ただ、この扉。

確かに今の私には物理的にだけではなく精神的にも重い。

本来帰省は楽しみなものだ。この扉を重く感じることは無い。実家は私が心からくつろげる数少ない場所なのだから。

でも、今年は・・・

「お帰りなさい、桜子」

フランス人と日本人のハーフモデルとして昔は結構有名だったらしいママが、ふわふわしたスリッパで音も無く廊下を歩いてきた。我が母ながら、いつ見ても優雅で美しい。今は若いから余計だ。

私は玄関にドサツと荷物を置いた。

「ああ、疲れた。あ、もう少ししたら、出かけるから」

「言ってることが滅茶苦茶よ。久しぶりに帰ってきたんだから、少しはゆつくりしなさい。」

いつもは帰ってきたら一日中ゴロゴロしてるじゃないの」

そうなんだけど。

今年は違う。

今年は帰省しなくなかった。

ノエルと付き合い始めて一週間が経った。

最初の頃は「この夢、早く覚めないかな」とばかり思っていた私だったけど、次第に「この夢、ずっと覚めなきゃいいのに」と本気で願うようになっていた。

それほどに、ノエルとのお付き合いは楽しい。

小さな喧嘩なんてしょっちゅうだし、イライラさせられることも多いけど、ノエルは3歳年上の、ううん、15歳も年上の私を楽しませるのに十分な話術と知識を持っている。

時間も相変わらず現実と同じスピードで流れ、私は半ば本気でこれが夢ではないんじゃないかと思い始めていた。

つまりこれは、タイムスリップ。

神様が私にくれた再チャンス。

私は人生をやり直せるんだ。

もしかしたら、ノエルと一緒に。

だけど頭の中には冷静な私もいる。

タイムスリップなんてある訳ない。

これはただの夢。ちよつと長い、ただの夢。
いつか覚める時が来る。

でもこれが夢なのかタイムスリップなのかなんてどうでもいい。私は今、高校時代を生きている。
今この瞬間を大事に過ごそう。

だから帰省なんてせずにノエルと一緒に寮に残っていたかったけど、寮は今日から1週間閉鎖されてしまう。

・・・まあ、今日も後で会う約束してるけどね。

何着ていいのかな。いつもは制服ばかりだから、こういう時くらいお洒落したい。

ノエルをあつと驚かせてやるんだ。

でも、ノエルってフリフリした格好は好きじゃない気がする。

私も好きじゃないし、どうしようかな。あの服はどうだろう、それともこっちの服の方が・・・

ところが。ママの一言が私の浮かれた気分を打ち砕いた。

「そうだ、桜子。今日は出掛けちゃダメよ」

「え！？どうして！？」

私はブーツを脱ぐ手を止め、ママを見上げた。

もうノエルと約束しちゃったんだから！

「伴野^{はな}さんが来るのよ」

「・・・」

ママは私の浮かれた気分を打ち砕くだけでは飽き足らないのか、更に冷や水をぶっかけてくる。

もちろん、ママに悪気がないのは分かっている。

でも、その名前は今私が一番聞きたくない名前だ。

「・・・いなきやダメ？」

「当たり前でしょ。みんなで夕食を食べましょうね」

嫌だ。

ノエルの口癖が頭に浮かぶ。

だけど逆らえないのは分かってる。

私はどんよりとした気持ちで、足を引き摺るようにして2階の自室へと上がっていった。

「桜子ちゃんは見るとびに綺麗になるな」

いかにも大企業の重役といった感じの伴野のおじ様がワイン片手にご機嫌な声を出した。パパとママはそのおじ様の向かいで穏やかに笑っているだけだ。

私はここぞとばかりに「氷の女王」に変身する。

「恐れ入ります」

「いやー、美人で頭もよくて上品。非の打ち所がないとはこのことだ」

あっそ。それはどーも。

さっさとそれ飲んで帰ってよ。

ウザい客相手にお酌をするキャバクラ嬢ってこんな気分なんだろうな。だけど私はキャバクラ嬢じゃないんだから、お世辞の笑顔なん

て作れるはずがない。

ノエルと一緒にの時は、自然と笑顔になれるのに……。怒った顔になることの方が多いけどね。

でも私がお世辞でも笑えない理由はこの伴野のおじ様だけではない。

私は伴野のおじ様の横で、私に負けず劣らず仏頂面をしている派手な男を見た。

金さえ積みめ入れる高校の制服を着崩し、頭は赤に近い茶色。顔の作りだけはハツとするほど綺麗だけど、そのいでたちとやる気のないオーラが全てを台無しにしている。

伴野聖。

私の将来の旦那だ。

厚顔無恥タイプの伴野のおじ様と冷静沈着で穏やかなパパは、高校の同級生で何故か仲が良い。

だけど、周囲の目を気にしないおじ様を、パパが放っておけなかっただけなんじゃないかと私は睨んでいる。

とにかくこの2人は、自分たちの子供が同じ年に生まれたのいいことに、勝手に結婚の約束をしてしまった。お陰で私たちは小さな頃からあることに「お前たちは大きくなったら結婚するんだよ」と、言い含められてきた。

誤解のないように言っておくと、私は昔から聖のことを嫌いだったわけじゃない。

子供の頃は純粹に聖のことをかっこいいと思っていたし、聖と結婚するのも悪くないと思っていた。

だけど聖は違った。

伴野建設という大企業の社長一家の三男坊として甘やかされて育った聖は我が儘したい放題だった。

そして小学校に上がる頃にはことごとく親の言う事に反発するようになり、親も賢い兄二人と聖を比べては聖を「出来損ない」扱いした。

伴野のおじ様が私と聖の婚約を解消しないのは、それが昔パパと約束したことだからなのか、お邪魔虫を本竜家に押し付けたいからなのかは、分からない。でもどちらにしろ、私にはいい迷惑だ。

もちろん私はパパに何度も婚約解消を頼んだ。でもいつもは優しいパパも何故かこれだけは了解してくれない。パパは聖のことを生まれた時から知っているから、我が子のように思っているのかもしれない。うちは女の私一人しか子供がいなかったから余計なのだろう。

パパは、荒くれ者の聖を心配して、本気で自分の息子にしたいんだ。

「今日は聖君がうちに来たいと言ってくれたんだってね、ありがとう」

パパがまるで患者さんに尋ねるような口調で聖に話しかける。

パパは小児科のお医者さんだ。つまり「パパの患者さん」というのは子供。

聖の扱いなんてお手の物なんだろう。

だけど聖は私のパパをも邪険に扱う。

「いえ、別に」

聞いてるこっちがイライラしてくるような、口の中でもぐもぐと話す話し方。

いつもそうだ。聖はこれからさきずっと、私が知ってる限りでは12年後もこういう話し方をしている。

パパは気を悪くした様子も無く、笑顔で「うんうん」と頷いた。

ああ、面倒臭い。

どういう風の吹き回しか知らないけど、なんでわざわざうちに来たなんて言い出したのよ。さてはパパにお小遣いでもせびろうとしてるのね？ありがた迷惑とはこのことだ。

やっぱり、適当な理由をつけて出掛ければよかったな・・・

私はわざと正直に「許婚が来るから会えない」と電話で言った時のノエルの反応を思い出して、1人でむうつと膨れた。

ノエルが少しでも妬いてくれたら私だってなんとかして家を抜け出したのにさ。「あつそう」じゃあやる気も出ないわよ。ノエルは携帯を持っていないから、わざわざノエルの実家にまで電話したっていうのに。

私は自分から会う約束をキャンセルしたにも関わらず、理不尽にも心の中でノエルを責め始めた。

ふんっ。

明日会ったら、許してやらないんだから。

明日会ったら、とことん無視してやるんだから。

明日会ったら、・・・どこへ行こう？

そう言えばノエル、美術館に行きたいって言ってたな。どこまでも優等生なんだから。でも美術館じゃ、カジュアルな格好もなんだな。春用のワンピース、あったっけ？

私の脳は、相変わらず仏頂面な聖を映し出す視神経をシャットアウトし、代わりにノエルと白いワンピースを着た私が一緒に美術館の中を歩いている光景を作り出していた。

第1部 第9話

「変態」

まさに一刀両断の一言で切り捨てると、ノエルは軽蔑したような眼差しを私に寄せた。

「そういう発言をする桜子の方が変態だよ」

そんなことない。

絶対アンタの方が変態よ。

伴野父子の襲来の翌日。

私はノエルと一緒に、前からノエルが行きたいと言っていた美術館へ来ていた。ちょうど期間限定のイベントの最終日で、どうやらノエルはこのイベントに来たかったらしい。

そのイベントというのが・・・

「変態」

私はもう一度そう言って、目の前の肉感たっぷりの裸婦画から目を逸らしながらノエルの脇腹を軽くつねった。

「『裸婦展』！？よくこんなのに来たいだなんて言えるわね！しかも彼女に！」

「俺は別に裸婦に興味あるわけじゃない。この画家が好きなんだよ」

ノエルが裸婦画の脇の小さなプレートを指差す。
そこには私が聞いたことも見たこともない外人の名前が書かれている。

私は小声で「知らないし」と言った。

「俺もちよつと前まで知らなかった。有名な画家じゃないし。でも俺の姉が絵を描くのが好きで、その影響で俺も色んな絵を見るようになったんだ。それでこの画家のことを知った」

「お姉さんが？」

「うん。まあ姉は描くのが好きなだけで、他の人の絵には興味ないんだけどね。」

俺は逆に自分じゃ絵なんか描かないけど、見るのは好き」

ふうん。

絵画鑑賞が趣味だなんて、さすが優等生・月島ノエル。
しかもその絵画が裸婦画だなんて、さすが変態・月島ノエル。

「だから。裸婦は関係ない」

「でも、裸は裸じゃない。こんなの普通、中1の男の子が彼女と見ようと思わないよ」

これがもう少し大人になるとそうでもないんだけど。

でもやっぱり、彼女と一緒に裸婦画を見るのはちよつと変じゃない？
しかもノエルは本当に純粋にこの画家が好きらしく、真剣に一つ一つの絵を見て回っている。

ほんと、ノエルって変わってる。

まあノエルがここに来たいと思ってたんだから別にいいけど、初めてのまとなデートがコレっていうのは「彼女」としてはやっぱり微

妙だな。

デートっていったら、一緒に買い物したり映画見たりが普通じゃない？

・・・だけど。

良く考えたら私、そんなデートらしいデートなんてしたことがない。旦那、つまり伴野聖と結婚するまで現実には誰とも付き合ったことがなかったし、聖とも恋人時代なんてなかった。結婚後だって、2人で出掛けたことなんかほとんどない。

そもそも2人で出掛けたいなんて思ったこと自体ないし。

それが夢の中とは言え初めてのデートが裸婦展。これってどういうこと？

私の深層にある欲求の表れ？

だとしたら私、かなり欲求不満なのね。

私は自分自身に呆れながら、裸婦画に2時間以上囲まれ続けたのだった。

「あー、来れてよかった」

美術館を出ると、満足そうにノエルはそう言った。

珍しく心からの言葉のようで、その表情はとても晴れやかだ。でも。

「あっそ。よかったわね」

私は素っ気なく返した。

「何怒ってるんだよ？」

「別に」

怒ってはない。でもなんとなく面白くない。

何が面白くないのかもわからないけど、とにかく面白くない。

私が無口なまま地下鉄の駅に向かって足を早めると、ノエルはそんな私の微妙な女心が分らないのか、勝手に怒ってるとばかりに私の後ろをついてきた。

私はふと、そのことに違和感を感じた。

ああ・・・そっか。

聖と一緒に歩く時はいつも私が聖の後ろを歩いていたから、こうやって男の人に自分の後ろを歩かれることに慣れてないんだ、私。

背が高く足長の長い聖について歩くのは大変だ。でも聖の後ろにいれば私は歩くペースなんかは考えずに、ただただ必死に歩けばいいだけだから、それはそれで楽だった。

だけどノエルは私の後ろにいる。

私がペースを考えて歩かなきゃいけないんだ。

私はわざと歩く速度を速めたり遅くしたりしてみた。

するとノエルは私との距離が変わらないように、上手に自分のペースを調整してくる。

なんか小癪だ。

よし。みてなさいよ。

青信号が点滅を始めた横断歩道の手前で私は立ち止まった。

ノエルも距離を縮めることなく、私とほぼ同時に足を止める。

信号の点滅の回数を心の中で数える。

1、2、3、4・・・そろそろかな。

点滅が6回目になった瞬間、私は突然ダッシュした。後ろを全く振り返らず、ひたすら向こう岸を目指す。

そして横断歩道を渡りきったところでようやく振り返ると、行き交う車の向こうにノエルの顔が見えた。ちよつと呆れたような顔をしている。

ふん。これくらいいい薬よ。

・・・でもちよつと大人げなかったかな。

私は辺りを見回して、横断歩道の脇にあったガードレールに腰かけた。

ノエルは信号が青になったら横断歩道を渡ってやって来るだろうか、ここで待ってしよう。

怒ってるかもしれないけど、まあいいや。今のダッシュでモヤモヤしていた気分が少しスツとした。

ノエルが来たら仲直りをして、一緒にご飯でも食べに行こう。

その時、私の目の前を一組の高校生のカップルが通り過ぎた。

制服姿が滑稽に思えるくらい派手でお水っぽい女が、お似合いな感じに派手な男に甘えるように寄り添っている。

そのわざとらしい「ラブラブ感」に嫌気が差して、私は不自然じゃない程度にそのカップルから視線を外した・・・けど。

私は再びカップルに視線を戻した。

・・・聖？

2人は私に目もくれることなく通り過ぎて行った。

私の前では笑顔なんか見せたことのない聖が、大きな声で笑っている。

それは意外な光景であると同時に、「ああ、やっぱり聖ってああいう笑い方なんだ」と思えるような下品な笑い方だった。

笑い声がやたらと耳につく。

私は呆れ返って聖を目で追った。

やっぱり聖は聖だ。

高校生の頃から、ううん、きっと生まれた時からあんな感じなんだ。

2人は私のいるところから数十メートル行ったところで足を止めると、手を振り合って別々の方向に歩き始めた。女の方はそのまま真っ直ぐ駅の方へと向かう。そして聖は脇道へ入って行った。

聖の姿が雑居ビルの狭間はざまに消えるその一瞬前、聖の横顔が見えた。

そこからはさっきまでの人を馬鹿にしたような笑顔は完全に消えていて、何故か物凄く真面目な顔をしている。

その目は真っ直ぐ前を見ていて、どこか輝きさえ帯びていた。

「・・・聖？」

私は思わず呟いて、聖の後を追いかけた。

後ろで歩行者用の信号が青に変わっていることなど、全く気がつかずに。

第1部 第10話

ここ？

私は閉ざされた扉の前でしばらく固まっていた。

聖が入って行ったのは、

聖を見つけた横断歩道から徒歩10分くらいの怪しげな雑居ビルの2階の一室だった。

一室と言っても、とにかく小さいビルなのでワンフロアに一室しかないから、「一室」とは言わないかもしれない。とにかく聖はそんなビルの2階の部屋に入って行った。

そして私は今、狭い階段を登ったところにある1メートル四方もないような狭い踊り場に立ち、目の前の扉を見つめている。

もしここがキャッチセールスやテレクラの事務所みたいな所だったら私はたいして驚かなかっただろう。いかにもフラフラした聖にはお似合いの場所だ。

だけど、どうなのよ、これは。

何の冗談？

『劇団 こまわり』

ひまわりじゃなくて、こまわり？

って、そんなことはどうでもいい。

私は、扉に掛けられたお手製の木の可愛い看板を、何度も目を

擦って確かめた。

でも何度見てもそこには「劇団 こまわり」と書かれてある。

劇団？聖が？

それってつまり、聖が劇をやってるってこと？

それとも、ここに知り合いか何かがいて、遊びに来ただけ？

どちらにしろ、聖が劇団と関係を持ってるなんて話、聞いたことがない。

夢の中とは言え突拍子なさすぎる。

現実の何が影響して、私はこんな夢を見てるんだろう？

それとも・・・これはやっぱり夢じゃないんだろうか。

もうこの夢の世界に来てから半月が経つ。

だけど夢は一向に覚める気配はなく、着実な時を刻んでいる。

私はこのままこの世界で、もう一度16歳からの人生をやり直すことになるのかもしれない。

だけどそれも悪くない。

少なくとも本当の「今」よりはずっといい。

だってノエルがいる。

・・・あ！ノエル！

私はようやくノエルを放ってきてしまったことに気が付いた。

まずい。

戻らなきゃ！

その時、扉の向こうから弾けるような笑い声が聞こえた。
聖の声だ。

さつきド派手な彼女と一緒にいた時のようなフザケタ笑い声じゃなくて、お腹の底から出しているような、本当の笑い声だ。

私は再び金縛りにあったかのようにその場から動けなくなった。

聖が笑ってる。

親の前でも妻の前でも笑うことのなかったあの聖が。
それも本当に愉快そうに。

階段を下りかけた格好のまま、私は穴が開くほど扉を見つめた。
この扉の向こうには何があるんだろう。

どういう世界が聖を笑わせているんだろう。

夢？そう、これは夢なのかもしれない。

だけど「今」聖が笑っているのは事実だ。

そつとドアノブに手を伸ばす。

もしこれが夢ではなく過去のやり直したとしたら、聖は高校時代にこの劇団に出入りしていたことになる。だけど28歳の聖はこの劇団との関係を断っている。

どうして？

こんなに楽しそうに笑っているのに、どうしてこの劇団へ行かなくなったの？

私がほとんど無意識にドアノブに触れようとした瞬間、ドアノブがカチリと回った。

部屋の中の誰かが回したのだ！

私はまるで感電したかのように、触れたか触れてないかのドアノブから手を離し、転がり落ちるようにして階段を下りた。そしてビルから飛び出でて、そのままビルの壁に背を押し当て息を殺す。かつては白色だったのであらうそれは、今は薄汚れて灰色に変色してしまっているけど気にもならない。

ドアの内側で響いていた笑い声が階段に溢れ出て来て、幾つかの足音と一緒に上の方へと移動して行く。どうやら聖は何人かの人と一緒に上の階へのぼっていったようだ。

ボタンボタンと扉を開閉する音が聞こえた。

私は壁から背を浮かすと5歩ほど歩いてビルを見上げた。

3階の窓に数人の人影が見える。

その動きはなんだか普通の動きではなく・・・劇の練習？

じゃあ、やっぱり聖は・・・

「おい！」

突然、右手首を強い力で掴まれて心臓が飛び跳ねる。

「！！！！ノエル！！！！」

そこには怒った顔をしたノエルがいた。

走ってきたのか、息があがり頬が紅潮している。

ノエルは私の手首を強く握ったまま怒鳴った。

「なんで急にどっか行くだよ！？ビックリするだろ！」
「ビ、ビックリしたのはこっちよ」

だけどバクバクしてる胸に手を当てそう言いながらも、自分が理不尽なことを言っているのは分かってた。ノエルを置いて勝手に聖を追いかけたのは私だ。

「・・・ごめん」

そう素直に謝ると、ノエルは少し手の力を緩めた。
でも離すつもりはないらしく、私の右手は解放されないままだ。

「こんなとこで何してたんだよ？」

「あ・・・うん、知り合いを見つけて・・・」

仮にも彼氏であるノエルに、「許婚を見つけて」とは言いにくい。
それに、今思えばどうして聖を追いかけてきたのか、自分でもよく分からない。

「ふーん」

ノエルの声にはまだ怒気が含まれている。
私は心臓がつかまれたように苦しくなった。

「・・・ごめんなさい」

「・・・」

どうして黙るのよ。

いつもの調子で「ま、いいけど」って言ってよ。
でないと、仲直りできないじゃない。

私は握られている手首に視線を落とした。

・・・私、何やってるんだろう。

いい大人のくせして自分勝手なことやって、中学生のノエルを怒らせて、「仲直りできないじゃない」なんてノエルの文句つけて。

最低だ。

今までずっと面倒臭いからといってロクな人間関係を築いてこなかったツケが、こんな形でやってくるなんて思いもなかった。

視界が滲んでくるのを必死に堪えていると、ノエルが黙ったまま、そして私の手首を掴んだまま唐突に歩き出した。私もノエルに引張られるようにして足を動かす。

私たち2人は押し黙ったまま、人混みを潜り抜けてひたすら歩き続けた。

第1部 第11話

ようやくノエルが足を止め私の手首を離したのは、雑居ビルが立ち並ぶ区域を抜けて元の大通りに出たところだった。私はもう一度ノエルに謝りたかったけど、喉がつまって声が出ない。

「これ」

ノエルが俯いている私の顔の下に、葉書くらいの大きさの薄紅色の紙を一枚差し出した。

その声にもう怒りはない。いつものノエルの声だ。それなのに。

「・・・何よ、これ」

どうして私はこういう時にこういう言い方しかできないんだろう。つくづく自分が嫌になる。

こういう自分を隠すために私は人付き合いを避けてるんだろうか、それとも人付き合いを避けてるからこういう自分になってしまったんだろうか。

だけどノエルは自己嫌悪に陥っている私に気付いてるのか気付いていないのか、ちょっとイタズラっぽくこう言った。

「さっきの美術館で買った裸婦の絵葉書。あげるよ」

「・・・いらいない」

「あつそ。じゃあ、あげない」

ノエルがあつさとそれを引っ込める。

何よ。そんなことされたら気になるじゃない。

「貰うわよ」

私はひったくるようにしてノエルの手から紙を奪った。

便箋だ。ノリはされておらず、すぐに開ける状態になっている。

私は何故か偉そうに「仕方ないから見てやるわよ」といった感じで便箋を開いた。

「映画のチケット？」

「うん」

そこにはなんとなく見覚えのあるタイトルが書かれた映画のチケットが2枚、入っていた。

そう言えば昔、こんな映画あったような気がする。

あ、「昔」じゃないか。ここではきつと「今」なんだ。

「それ、本当は昨日渡したかったんだけどさ」

「え？」

「桜子が急に会えなくなっただけだって言うから、一日遅れた。誕生日、おめでとう」

誕生日？

・・・あ。

私はハッとして顔を上げた。

「今日って、3月20日？」

「うん」

「じゃあ昨日は3月19日？」
「うん」

ノエルがちょっと呆れたように笑う。

「もしかして、自分の誕生日忘れてたの？」
「・・・うん。忘れてた・・・」

本当に完全に忘れてた。3月19日は私の誕生日じゃない・・・。
ノエルはまた苦笑いしながら映画のチケットを指差した。

「3つも年上の女の人に何あげたらいいか分からなかったし、プレゼント買うのも恥ずかしかったから、それにしてみた」

そう言うノエルに今度は私が笑った。
そしてそれと同時に、堪えていた涙が何の抵抗もなく流れ出す。

「恥ずかしいって・・・平気で『好き』とか言うくせに・・・」
「それとこれとは別だろ。って、何泣いてるの？」

ノエルが焦ってズボンの上からポケットを触る。
ハンカチを探してるんだろう。

ふふ。ノエルでも焦るんだ。

私はいよいよお腹を抱えて笑いだした。
涙も自然と乾いていく。

「・・・なんなんだよ」

「あはは。ううん、なんでもない。ありがとう、ノエル。凄く嬉し

い。今度一緒に見に行こうね」

ノエルは「あつそ」と言つて照れ臭そうにそっぽを向いた。素直なんだか照れ屋なんだかよく分からないんだから。

でも嬉しい。親以外から誕生日プレゼントを貰うなんて初めてだ。きっと、私が喜ぶようにとあれこれ悩んで選んでくれたんだろう。その気持ちは何より嬉しい。

そうか。プレゼントってこういう物なんだ。

「行こう」

ノエルが私の手を取った。

そこから温かい体温が流れ込んでくる。

・・・男の子と手を繋ぐのも初めてだ。

私は自分の手の方が熱くなってくるのを止められず、思わず俯いた。何を中学生に赤面させられてるのよ。

だけど心の中でいくら文句を言つても、顔の赤みは一向に引かない。

それに不思議だ。

私の手は確実にノエルの手より熱いのに、ちゃんとノエルの手の温かさを感じられる。

これが人の温もりってやつなのかな。

聖とは手を繋いだことはないけど身体を重ねたことはある。

だけどそれも結婚直後の数ヶ月だけで、その後は多分聖は適当に外の女と遊んでる。

私は元々そういう欲求が余りないのか、男の人を欲しいと思ったことはない。

聖とのことが「熱い」というより「暑い」という思い出しかないからかもしれない。

「温もり」なんてものを感じることは一度もなかった。

「気持ちいいもんなんだね」

「何が？」

私のすぐ横でノエルが不思議そうに訊ねる。

「手を繋ぐのって、気持ちいいね」

「・・・そう」

ノエルの手がちよつと熱くなる。

面白いなあ。手を繋ぐだけでいろんなことが分かる。

ノエルって結構一步が大きいんだ、とか、
でも私に合せてちよつと小さな歩幅で歩いてくれるな、とか、
いつつもちよつと遠くの方を見てるんだな、とか。

「贅沢を言えば、早く私より身長が高くなって欲しいな」

「は？」

「そのくせ歩幅が私より大きいってことは、ノエルの方が足が長いってこと？やだなあ」

「は？」

「頑張って牛乳飲んでね」

ノエルが「何、訳の分かんないこと言ってるの？」とため息混じり

のいつもの呆れ口調で言う。
「ただ今のはなんだかそんなため息さえも心地よい。」

「ねえ、ノエル」

「今度は何？」

ふふ。呆れてる、呆れてる。

「私、ノエルのこと結構好きになってきたかも」

「・・・あ、そう」

「何よ、それだけ？」

「・・・」

ノエルは無言だったけど、その手は一段と熱を帯びた。

言葉に嘘はない。

16歳の私がノエルを好きなのか、28歳の私がノエルを好きなのかは分からないけど、「好き」は「好き」だ。

私が誰かに対して「好き」だと思うなんて。

それをこんな簡単に口に出してしまえるなんて。

夢の中だから大胆になれるんだろうか。

それとも・・・ノエルとの時間が私を変えてきているんだろうか。

ただどちよつと赤くなってるノエルを見てみると、さすがに私も恥ずかしくなってきた。

手を繋いだまま一歩大きく踏み出して身体をクルッと反転させ、ノエルと向かい合うように後ろ向きに歩く。

「そうだ！リトルのことだけど、」
「リトル？なんだっけ？」

ノエルが私の肩の向こうをキョロキョロと眺める。
後ろ向きに歩いている私が誰かとぶつからないように見てくれているんだろう。

「リトル・ティーチャー制！新入生の受け入れのことよ」

「ああ、そっか」

「自分から言い出しといて忘れないでよ。ねえ、学園内の地図も必要だけども、学園外の地図もあった方がよくない？」

「学園外？」

「うん。コンビニとか薬局の場所とかを書いた地図。駅までの抜け道なんかも書いてあると便利ね」

とたんにノエルの顔がパツと輝いた。

ノエルは色恋話より、やっぱりこういうビジネスチックな話が好きみたいだ。

でも、嫌じゃない。

こういうノエルも好きだ。

「そうだな。電車とバスの時刻表のコピーも載せるといいかも」

「うんうん」

「部活紹介の方もつめないと。演劇部の舞台準備って、部員だけで大丈夫かな？」

「準備自体は大丈夫だろうけど、演劇部の前に紹介やってる部が、舞台に何か持ち込んでたりしたら、それを片付けるのは私たちがやった方がいいかもね」

私とノエルは手を繋いだまま、どちらが前にいくでも後ろにいくで

もなく、横に並んで歩いた。

お互いがお互いのことを思って、少しいつもと違うペースで歩くだけで、こうやって並んで歩けるんだ。

ノエルと一緒にいると、新しい発見がたくさんある。

それはきっと、私が若いうちにしとかなきゃいけない経験だったに違いない。

やっぱりこれは夢ではなくて現実のやり直しだ。

神様からのプレゼントだ。

そう信じたい。

どうかいつまでも、この時間が続いていきますように。

私はノエルの手を強く握ってそう祈った。

第1部 第12話

ノエルと美術館へ行つた翌日、私は暇を持て余していた。

だってノエルが「今日は姉が『どこかに連れて行つてあげる!』とか言うから、付き合つてきてあげてくる」と、よく分からない日本語を言ってきたから。

多分ノエルのお姉さんとしては、全寮制の学校から久々に帰つてきた弟に「弟孝行」しようとしてるんだろうけど、ノエルからしてみればお姉さんに付き合うのは「姉孝行」なのだろう。

ところでこの「ノエルのお姉さん」、海光ではないもののかなりレベルの高い私立高校の1年生らしい。

つまり、私と同じ年。

うーん、もしノエルと私が結婚したら、同じ年でも「お義姉さん」って呼ばなきゃダメなのかな?

そんな妄想でにやけていても春休みの宿題は終わらないので、ノエルに会えない春休みの火曜日、私は頭の中の古い引き出しを引っ張り出して、机に向かつている。

だけどこれが結構、いや、かなり厄介だ。

現実では私は28歳。高校を卒業して10年も経つ。

大学の医学部でみっちり6年間勉強してきたから生物と英語は難なくこなせるけど、その他の科目は数学でさえお手上げだ。

ああ、やっぱりこれ、夢だったらいいのに。そしたら宿題や勉強から解放されるのに。

昨日はこのまま時間が続けばいいとか思ってたくせに、そんな甘っちょろい考えが頭をよぎる。

だって！このまま時間が続くということは、またあの受験地獄を味わわないとダメって事なのよ！？

高校1年の宿題ですらこれだけでこずってるのに、受験なんて絶対に無理！

ましてや医学部なんて！

私が卒業した大学は世間的には「一流」と呼ばれている私立大学の医学部だ。

受験勉強の量も半端ではなかった。

加えて、海光は将来経営者を目指す生徒が多いので、基本的にみんな文系だ。

そんな中、理系で、しかも医学部を目指している生徒なんて私くらいなもので、他の生徒より勉強しずらかった覚えがある（教師も文系に重点を置いた進路指導をするから）。

将来は医者になって家を継ぐと決まっている私は海光なんかに入學するべきじゃなかったのかもしれない、と何度思ったことが。

でも人付き合いが苦手な私には、海光という特種な空間は居心地がよかったから、入學したことを悔やんだことはない。

だけど、このやり直しの人生でも私は同じ大学の同じ医学部に進まなくてはいけないんだろうか？

そもそも私が医者になろうと思ったのは家が開業医で、一人っ子の私が継ぐのが当然だと思っていたからだ。

でもよくよく考えてみればそんなこと、パパにもママにも言われたことがない。私が勝手にそう思い込んでいただけだ。

もちろんパパ達も口には出さなくても期待していただろうけど、もし私が別の道を強く希望すれば反対しなかっただろう。

だったら、私が本当に行きたい大学って・・・

私はノートから顔を上げた。

そう言えば、ノエルはこの大学を受験するつもりなんだろう？
まだ中1だから具体的には考えてないだろうけど、現実の世界では
ノエルは今25歳だから、とつくに大学を卒業してるはずだ。

その大学が分かれば、私が先回りして入学できるのに。
そうすれば同じ大学に通えるのに。

私とノエルは3歳差だから大学で一緒に過ごせるのは1年だけだ
けど、少しでも同じ時間を、同じ空間を共有したい。

いや、私が医学部に進めば6年間は大学にいられるし家も継げて一
石二鳥だ。

ノエルは国公立の文系に進むだろうから・・・私はその国公立の医
学部？

うわ。勉強を厄介だと言ってる場合じゃない。

私は慌ててまた机に向かった。

午後7時。

頑張った甲斐あって、ようやく宿題に一区切りつけることができた。
それに少しずつだけ勉強の仕方も思い出した。

そりゃ昔あれだけ勉強したんだもんね。ちょっと歳とったくらいで
全部白紙じゃ意味が無い。

けどさすがに何時間も宿題をしていたので集中力が途切れた。
お腹もすいたし、今日はここまでにしよう。

もう一度時計を見えると、7時5分を少し回ったところ。そろそろ夕ご飯の時間だ。

食べ終わったら・・・もう勉強は無理だな。でも、見たいテレビがあるわけでもないし・・・ノエルに会えないかな。もう家に帰ってきてるよね？

だけどノエルの家に電話するのは気が引ける。

3日前、「許婚が来るから会えない」ということを伝えるために電話した時は、最初にノエルのお母さんが出てかなり緊張した。

こういう時、ノエルが携帯を持ってたら気軽に「今から会えない？」ってメールできるんだけどな。

・・・会いたいな。

私は鳴るはずのない携帯を見つめた。

私、本当にノエルのことが好きになったんだ。

この世界がなんなのかとか、自分が何歳なのかとか、これから私はどうなるのかとか。

もうそんなことはどうでもいい。

ただ、今私はノエルのことが好きで、一緒にいたい。それだけだ。

人を好きになるって、そんな単純なことなんだ。

私と聖は複雑過ぎた。

お互い好きでもないのに、許婚という関係に縛られ過ぎていた。その結果が、離婚したくてもできない仮面夫婦だ。

昔一度、私たちの婚約が破棄になりそうになったことがある。

聖が親に相談もせず勝手に大学を辞めたことに伴野のおじ様が怒り、聖を勘当したからだ。

私は内心とても喜んだのだけど、やっぱり聖は意地もプライドもなく家に戻ってきて、おじ様の経営する伴野建設の社員に収まった。そしてそのお陰で私との婚約も継続された。

あの時聖がそのまま家に帰らなければ、私は聖と結婚せずに済んだのに。

せめてこの世界では、聖と結婚せずにいたい。
でも、そうするにはどうしたらいい？

許婚、勘当、結婚……。

頭の中で色んな単語が駆け巡る。
そして最後に頭に浮かんだのはノエルの顔だった。

・・・そうだ。
いい事を思いついた。

私は携帯をポケットに入れると、薄手のコートを羽織って家を出た。

第1部 第13話

「伴野聖？ああ、さとのことですね」

ビルに入ろうとする男の人を捕まえて、聖のことを訊ねるとこういう返事が返ってきた。

一瞬意味が分からなかったけど、なるほど、聖は「さとの」という芸名（？）で役者をやっているということか。

「はい」

「君はさとのファン？」

20代前半くらいに見える穏やかそうなその人は、別に警戒するでもなくにこやかにそう言った。

つて、聖のファンなんかいるの？

私はそんな疑問を飲み込んで、丁寧にお辞儀をした。

「いえ、個人的な知り合いです。本竜桜子と申します」

「あはは、礼儀正しい子だね」

見た目は高校生でも、中身は28歳の大人ですから。

「あいつ、昨日が終業式だったって言ってたから、今日から春休みか・・・ちえつ、学生はのん気でいいよな」

ほんと、そうですよね。社会人に春休みはありませんもんね。

「さとするは、学校が休みの時は一日中ここで練習してるから、まだいると思うよ。呼んでこようか？」

私は頭の中に時計を思い浮かべた。

多分今、短針が8で長針が7つぺんを少し過ぎたところだろう。この時間から、いつ練習を終えるとも分からない聖を待つのは、家で家族が待つ高校生にはちょっとキツイ。

でも。

「いえ。結構です。ここで待ってます」

「そう。分かったよ」

男の人は更に柔らかい笑顔になり、ビルの階段を上がっていった。

私はビルの前の歩道にあるガードレールにもたれて、コートの前をしっかりと閉じた。3月下旬とは言え、夜は冷える。

せめてこのビルの出入り口が見える場所に喫茶店でもあればいいのに。

こんなツギハギみたいなビルが立ち並ぶ場所にあるのは、どう考えても高校生なんかお呼びじゃないスナックとかだけだ。

早くも「待ってます」なんて言ったことを後悔し始める。

でも、自分でも理由はよく分からないけど聖の邪魔をしたくない。

あのいい加減な聖が一日中練習しているというのだから、よほどのことだろう。

そんな演劇を聖が辞めてしまった理由がますます気になる。

見上げると、ビルの3階にチラッと人影が見えた。

あれは聖だろうか。

聖がビルを出てきたは、それから1時間ほどしてからだった。だけど、半袖Tシャツにジャージのパンツという姿から想像するに、ちよつと練習を抜けてきただけのようだ。

おそらく、私に会うために。

案の定、聖は私を見ても驚かなかった。

「何しに来たんだよ。つか、来たんなら、声かける。

都築さんがお前のこと思い出さなかったら、後2時間は待ちぼうけだったぞ」

いつもとは全く違うハキハキした口調で聖がそう言う。

「都築さん？ 優しそうな男の人のこと？」

「ああ」

どうやらその都築さんが、私が待っていることを聖に伝えてくれたようだ。

いい加減身体が冷え切っていたから助かった。

だけどそんな寒さの中で、聖の身体からは湯気が立ち上っている。よほど激しく動いて汗をかいたのだろう。

頬も上気していて、なんだか生き生きしていて・・・

ふふふ。こつやつて見ると幼いなあ。

一昨日うちに来た時は28歳の聖とあまり変わらないように思ったけど、やっぱり子供だ。

「で、何しに来たんだよ。にやにやしやがって」
「うーん、と」

私は慌てて「にやにや」をやめた。

正直に言つと、私は聖に私との婚約を破棄するように頼みに来たのだ。

もつと正直に言つと「大学生になったら聖は家を出るから、そのまま帰らないでほしい」と言いたいところだけど、それは今高校生の聖に言つても無駄だろう。

「聖は・・・演劇やってるんだ？」

「なんで知ってるんだよ。この場所のことも」

「昨日、たまたまここに入っていくのを見かけたの」

「ふーん」

「ご両親も知ってるの？」

「ああ」

「辞めろって言われない？」

「言われない。どうせ、子供のお遊びだとも思ってたんだろ」

ということは、お遊びじゃないってことか。

「好きなんだね、演劇」

「・・・」

「なんか、意外。聖が劇をやってるのなんて、想像つかない」
「あつそ」

私は聖に言葉を投げかけながら、心地よい違和感を覚えた。

私、今まで一度も聖とこんな風に他愛の無い会話をしたことがない。それなのに、どうしてこの世界ではこんな風に話せるんだろう。

ノエルと付き合いだしてから分かったことがある。他愛の無い会話って凄く難しいということだ。

だってそれは、親しい者同士にだけ許される行為だから。

家族とか、友達とか、恋人とか。

聖と私は戸籍の上では「配偶者」だったけど、家族じゃなかった。

でも、今目の前にいる聖はなんだか私の知ってる聖とは違う。いつもの聖は、この前うちに来た時も含めて、全てに対して面倒臭いという雰囲気纏っている。

でも今の聖は、内から溢れ出てくる生命力を一生懸命抑えるために、「面倒臭い」を装ってるみたいだ。

それは目の輝きを見れば一目瞭然で・・・

私はベッドの上で早く退院したくてうずうずしている10歳の男の子を思い出した。

その男の子は風邪をこじらせて肺炎になってしまっていたのだけど、本人は至って元気で、生命力の塊だった。

それなのに無理矢理ベッドの中に押し込まれて、だけど嫌がって大騒ぎできるほど子供でもなくて。

ちやうど今の聖を似ている。

ここは役を演じる場所だけど、聖にとっては本当の自分に戻れる場所なんだ。

「帰る」

「え？」

私がガードレールから腰を外し地面に下りると、聖は少しだけ眉を上げて驚いたような顔にした。

「練習頑張つて。いつか、聖が演じてるところを見せてね」

聖がまた「面倒臭い」オーラを発する。
でもちよつと照れ臭そうだ。

「なんでお前なんか・・・それに、だから何しにきたんだよ」
「もういいの。じゃあね」

私は訝しそうにしている聖を残して劇団こまわりの前から立ち去った。

ここは私は私みたいな他人が来る場所じゃない。
そう思った。

そして、本当に「頑張つて」とも。

第1部 第14話

月島先輩は後輩に大人気だ。

見た目、頭、手際の良さは100点。

愛想の良さは40点くらいだけど、それよりも前者の3点の方がピカピカの海光1年生には魅力的らしい。

「月島先輩！入部届けてどこに行けばもらえますか？」

「ホームルームで担任が配ってくれる」

「月島先輩！職員室ってどこですか？」

「後から案内するよ」

「月島先輩！今日外出しようと思うんですけど、寮って何時までに帰ればいいんですか？」

「門限はないからいつでもいいよ」

「月島先輩！外泊は？」

「自由。でも外泊届けは書くこと」

「月島せんぱーい！」

もう、月島先輩・月島先輩の嵐だ。

私は部活紹介が無事に終わった体育館で新入生に囲まれているノエルを遠巻きに見ていた。

4月に入り、私とノエルは他の在校生より一足先に寮に戻って新入生を迎えた。

受け入れ、寮と学校の説明、入学式・始業式の手伝い、そして部活紹介。

ようやく初代「リトル」としての役割も一通り終わった・・・と思っただけど、

元気な新入生達はまだまだこれからもノエルを解放してくれそうにない。

特に寮が同じ男子生徒たちは何故か妙にノエルになついている。

あんなに愛想の悪い先輩のどこがいいのかと思うけど、同じくノエルに「なついている」私としては何も言えない。

え？私は何をしてるのかって？

・・・別に何も。

作業的なことはもちろん色々やってるけど、ノエルとは違って私には全然新入生はなついてこない。

見た目、頭、手際の良さはノエルに負けてないと思うけど（自称ね）、愛想の良さ0点はやっぱりよろしくないらしい。

そういう訳で、今はひたすら体育館の後片付けに追われてる。

「ほら、早く教室戻れよ。俺、片付けがあるから」

ようやくノエルが質問攻勢にストップをかける。

「えー？片付けってなんですか？」

「体育館の。ほら、桜子が1人でやってるだろ」
「・・・」

数人の女子生徒の視線が背中に刺さる。

新入生の視線だけじゃなくて在校生の視線も。

ノエルには「隠す」という概念がないらしい。

「桜子。椅子は俺が片付けるから、桜子は舞台の方頼む」

「・・・わかった」

「なんか怒ってる？」

「別に」

だから。みんながいる所でそうやって話しかけないで。
でももう手遅れだ。

今日中には「氷の女王が中等部の秀才・月島と付き合ってるらしいぞ」って噂が、学校中に広まることだろう。

「なんで？ いいじゃん」

「よくない！」

私の手から椅子を取ろうとするノエルに小声で怒鳴る。

「それって俺と別れた時に困るから？」

「そうじゃないけど！ 恥ずかしいじゃない」

女子視線、怖いし。

でもノエルは本気でそういう女心が分からないらしい。

少し不機嫌そうにパイプ椅子を3つ重ねて持ち、備品倉庫の方へ歩き出した。

私も3つは無理だけど2つ持ってノエルの後に黙って続く。

突然、ノエルの背中から声がした。

「・・・桜子はいずれ俺と別れるつもりなんだろ」

「え？」

「いつかは許婚と結婚するんだろ？」

「しない！」

思わず口調が強くなる。

声も思いのほか大きかったようで、まだ体育館に残っている生徒達が驚いて私とノエルの方を見た。

だけどノエルはそんな周囲の視線を気にすることなく、そして私に振り向くこともなく、歩き続けた。

「どうして急にそんなこと言うのよ？」

さすがに声の大きさは抑えたけど、反対に口調は更に強さを増す。私は視線を自分の持っている椅子の背もたれの部分に落とした。

今までノエルは一度も私の許婚のことを話題にしたことがない。

それは、ノエルは私が許婚と結婚するつもりがないと分かっているからだ、私は思ってた。

だけどそうじゃなかったの？

涙が出そうだった。

人が泣くのって、痛い時と悲しい時と感動した時だけだと思ってたけど、怒ってる時も泣くんだ。

ノエルのお陰でまた一つ勉強になった。

でも、嬉しくない。

ノエルの背中が急に遠くにあるように思えた。

「春休みの初日、許婚が家に来るからって俺との約束を取りやめた
だろ？」

「……気にしてたの？」

一言もそんなこと言ってなかったのに。

「違う。そのこと自体はどうでもいい。だけど、あの日は桜子の誕生日だった」

制服の襟に少しかかった黒い髪がノエルの歩調に合わせて揺れる。

「あ……うん。そうだったね。それで気にしてるの?」

「だから違うって。俺が気にしてるのは、俺が桜子と会えなかったことじゃなくて、桜子の許婚が桜子に会いに来た事だよ」

思わず。足が止まった。

背中でのその気配を感じたのか、ノエルも立ち止まる。
でもまだ振り向いてくれない。

「桜子の許婚は、あの日が桜子の誕生日だって知ってて、桜子に会いに来たんだよね?」

「……まさか」

そう言いながら、私は必死に記憶を辿った。

あの日。3月19日。

どうして聖はうちに来たんだっけ?

ぼんやりとしか聞いていなかったあの日の会話の中から私がその答えを見つけたのは、10秒ほどの沈黙の後だった。

—— 今日 聖君がうちに来たいと言ってくれたんだってね、ありがとう

そう言ったのは確かパパだ。

私の誕生日なんて、伴野のおじ様が覚えていなかったのはもちろん、パパとママでさえ、私の帰省と伴野父子の訪問のせいで忘れていた。

それを聖が覚えていたというの？

そして私を祝うためにうちに来た？

まさか。

まさか、まさか。それだけは絶対有り得ない。

だって、結婚する前もしてからも、聖に誕生日を祝われたことなんて一度もない。

私の誕生日自体、知ってるのかどうかも怪しい。

それに前うちに来た時だって「誕生日おめでとう」の一言もなく、ただ黙ってご飯を食べながらおじ様とパパの会話を聞いていただけだ。

私の誕生日に聖がうちに来ようと思ったのは単なる偶然だ。

そもそもうちに来たのだって、どうせパパからお小遣いでも貰おうと思ったんだろう。

「違うよ、ノエル。それは違う。あの日私の許婚がうちに来たのは偶然よ。」

彼が私の誕生日なんか知ってるはずないし、私も彼の誕生日なんか知らないし」

忘れたんじゃないって知らない。

聖が私の誕生日を祝ってくれたことはないし、私が聖の誕生日を祝ったこともない。

「生まれてきてくれてありがとう」なんて、お互い思ったことがない。

私の言葉を聞いたノエルが、ようやく振り向く。

「桜子の許婚は桜子のこと、大切に思ってるんじゃない？」

「思っていない、思っていない。絶対思っていない。面倒臭いって思ってるだけよ。なによ、ノエル。そんなこと気にしてたの？もし本当に彼が私のことを大切にしたら、私も情にほだされて彼と結婚するとも思っただの？」

「・・・」

「馬鹿ねえ」

私は心の底からそう言った。
有り得ない。

聖が私のことを大切に思ってるなんてことも、私が聖と結婚したいと思うなんてことも。

ノエルは物凄く頭がいいのに、どうしてそんな簡単なことが分からないんだろう。

1 + 1 より簡単なのに。

「私と彼の心が交わることは絶対ないわ。何度人生をやり直したとしても」

私がそう言つと、ノエルの表情がふつと和らいだ。

その瞬間、今の今まで遠くに感じていたノエルが私のすぐ近くにやってきた。

いや、今まで以上に近い場所に戻ってきた。

また涙腺が緩む。

今度はどういう涙なんだろう。
感動？ちよつと違う。なんだかホツとして・・・ダメだ。本当に泣きそう。

「文学少女みたいな発言だな」

「私、結構よく本読むのよ？」

「知ってる。それも湊さんから聞いた。『本竜はいつも違う本を持ち歩いてるけど、俺はあれは文学少女を装うためのカモフラージュだと思う。あいつ、絶対本の中身は読んでないぞ』って」
「なっ！」

ちよつと、柵木君！！！！ちゃんと読んでるわよ！！！！

ノエルは一度椅子を持ち直して、笑いながら歩き出した。
私もそれを追いかける。

数秒間だけ、ノエルが少し歩く速度を遅くして、私は少し早くした。
2人が並ぶ。
自然に2人の速度ができる。

この瞬間が、たまらなく好きだ。

もしも。本当にもしもだけど、一度だけでも聖とこの速度を共有できていれば、私と聖は「夫婦」になれたのかもしれない。

だけでももう手遅れだ。

私の新しい人生は始まってしまったのだから。

第2部 第1話

ハア、と。

右隣から深いため息が聞こえた。

この息遣いはノエルだ。そう思っ
て右隣を見たけど、私が予想した
場所にノエルの顔はなかった。

視線の位置を修正して、少し上に向ける。

あった。ノエルの顔。

でもノエルってこんなに背が高かつたっけ？

ハア。

もう1つ、ノエルの口からため息が漏れた。

何をそんなにため息をついているんだろう。

それに・・・ここはどこ？

じつとりとした汗が私の頬を伝った。

頭の真上に太陽がある。

暑い。

「・・・分かったよ」

ようやくため息以外の声が聞こえてきた。
その声は心なしかいつもより低く感じる。

でも、分かったって何が？

ノエルが私を見た。いや、見下ろした。

ノエル、いつの間にこんなに背が高くなったんだろう。
それに顔も少しシュツとしていて大人っぽい。
・・・なんかかっこいいよくなったじゃない。

ただドキツとしたのも束の間、ノエルの口から衝撃的な言葉が発せられた。

「そんな理由で振られるとは思わなかった」

・・・は？

振られる？

誰が？

困惑している私をノエルは切なげな表情で見つめた。
そこには一種の色気すらある。

待つて。待つて、待つて。

何なのこれは。

ここはどこ？私、ノエルとここで何をしているの？何の話をしているの？

オーバーフロー気味の脳をなんとか制御して、私は辺りを見回した。

海光の校庭だ。

数人の生徒が暑さをもろともせずにバレーボールをやっている。
どうやら昼休みらしい。

だから待つて。

私今まで何してたんだっけ？

新入生への部活紹介を無事終えて、ノエルと2人で「打ち上げだ」とか言いつついつも通りのファミレスでいつも通りのご飯を食べて、寮に帰って眠って・・・

で、今？

背中を汗が流れた。

でもそれはさっき私の頬を流れた汗とは違う。

私、また「飛んだ」んだ。

やだ。なにこれ。

またなの？どうして？

今、いったいいつなの？

右手で前髪をかき上げ、動揺を隠しつつ自分の服を見下ろした。

海光の制服だ。つまり私はまだ高校時代にいる。

だけどその制服というのが・・・夏服だ。

部活紹介は4月上旬。つまり私は3ヶ月ほど「飛んだ」ことになる。

よかった。たいしたブランクじゃない。

でも・・・本当に？

私は前髪をかき上げた手を頭に置いたまま、ノエルを見た。

やっぱり背が伸びてる。

顔も大人っぽい。

声も低くなってる。

・・・まさか。

おそろおそろ自分の左胸の名札に目を落とす。

『3 - 1 本竜』

3 - 1。3年1組。

3ヶ月じゃない。

1年3ヶ月飛んだんだ。

また背中を冷や汗が流れた。

「1年以上も付き合ってきて、今更そんなこと言っんだな」

嫌味ではなく、純粹な感想といった感じでノエルが言う。

「そんなこと」って何？

私、何を言ったの？

振られるって何？

分からないことが多すぎて、言葉も出ない。

ハア。

三度目のため息。

「・・・でも、分かった。桜子がそう言うんなら仕方ない」

ノエルが立ち上がったのを見て、私はようやく自分が校庭の淵にある花壇に腰掛けているのに気が付いた。

ノエルはポケットに突っ込んでいた両手を出し、少し無理して笑顔

を作る。

「受験、頑張つて」

「・・・あ」

やっと声が出た。でも言葉にならない。

「俺も勉強頑張らないとね。桜子に振られたからって成績が落ちたんじゃない」

「ノエル・・・」

「じゃあ」

ノエルは一瞬笑顔を崩して真顔で私を見つめ、そして踵を返して歩き出した。

待つて。ノエル、待つて。

心はノエルを追いかけようとしていたけど、身体が動かない。

待つて。お願い。

ノエルも。時間も。

だけど私は、校庭にチャイムが鳴り響いても動けずにいた。

あれ。鍵穴に鍵が入らない。

時間だけじゃなくて扉まで私を拒むのか。

限らない脱力感の中で、そんな被害妄想に襲われた。

結局私はパニック状態から立ち直ることができず、先生に気分が悪いからと言って午後の授業をサボって寮に戻ったのだけど、制服のポケットに入っていた鍵が寮の部屋の鍵穴と合わない。

・・・そうだ。私今、3年生なんだ。つい数日前に2年生になったところなのに。

必死に記憶を辿り、3年生の時にいた部屋を探し当ててベッドの上に身を放り出した時には、時計は午後2時を回っていた。

うつ伏せになってベッドに顔を埋め、考えてみる。

どうしてこんなことになったんだろう。

高校1年生からもう一度人生をやり直せると思っていたのに。

このやり直しの人生は神様からのプレゼントじゃなかったの？

どうしてノエルと別れないといけないの？

しかも、私が振るなんて！

だけど心の中で散々神様を罵る一方で、私の頭の一部は冷静だった。

さっき私がノエルを追いかけられなかったのは、パニックのせいだけじゃない。

今の私には、1年3ヶ月の間に何があって私がノエルと別れる決意をしたのかが分からない。

だって例えばノエルが凄く暴力を振るう人だったら？

付き合い始めた頃には分からなかった本性が少しずつ分かってきて、私はノエルと別れる決心をしたのかもしれない。

そんなはずがない。

でも絶対ないとは言えない。」

私はノエルのことを信じ切れなかった。

だから追いかけれなかった。

私、ノエルのことを好きとか言ってたくせに、信じることもできないんだ。

「桜子さん、何やってるんですか？」

パツと部屋の電気が点き、視界が明るくなる。

ん？電気？

私はベッドから顔を上げた。

眩しさでぼやける視界の中に、誰かが立っている。

「あれ・・・今何時？」

「7時ですよ」

「夜の？」

「当たり前じゃないですか、大丈夫ですか？体調悪いんですか？」

「ううん・・・今日、何日？」

「7月16日ですよ。ほんと、どうしたんですか、桜子さん。変ですよ」

「えっと・・・」

目が光に慣れてきてその声の主の姿がはっきり見えてくる。

癖もボリウムもないストンとした髪を高い位置でポニーテールに

している、ちょっと吊り目で小柄な女の子。

見たことはあるけど誰だか思い出せない。

でもなんだか私に親しげに話しかけてくれるから今更「あなた、誰？」とも聞けない。

だけど取り合えず私はホッとした。

また「飛んだ」のかと思ったけど、どうやらただ眠っていただけらしい。

じゃあノエルと別れ話をしたのはまだ「今日」の昼なんだ。

せつかく晴れてきた視界がまたばやけそうになる。

ポニーテールの女の子はパパッと制服を脱いでジャージに着替えた。

「桜子さん、今日私たちトイレ掃除の当番ですよ」

「トイレ掃除？」

「もう。それも忘れてるんですか？でも体調悪いなら私1人でやるから寝てください」

そうだ。海光では部屋ごとに共有スペースの掃除当番が回ってくるんだっただ。

どうやら今日は私の部屋がトイレ掃除の当番らしい。

つまり、この女の子は私のルームメイトってことか。

あ。この子、もしかして。

「じゃあ、お願いしていい？・・・小島さん」

「え？『小島さん』？」

女の子が驚いた様子で私の方を見た。

しまった。違ったかな。

確かこの子、3年の時に同室だった2学年下の小島さんって子だと思っただけだ。

もつとも、お互いに全然興味がなくて、ロクに話したこともなかったから顔も名前もうる覚えだ。

ところが。

「どうして急にそんなよそよしく苗字なんかで呼ぶんですか？いつもシズちゃんって言ってるのに」

シズちゃん？

そう言えば小島さんの下の名前は「しずえ」だとか「しずか」だとかだった気がする。

やっぱりこの子は小島さんのようだ。

でも小島さんのことを「シズちゃん」なんて呼んでた覚えはない。

「桜子さん」なんて呼ばれてた覚えもない。

そもそもこんな風に話したことなんてあつたっけ？

「やっぱり今日の桜子さん、変ですよ。休んでてください」

「う、うん。ゴメンね、よろしく。シズちゃん」

若干きこちなく「シズちゃん」と言ってみただけ、

小島さんは特に怪しむことなく「了解です」と笑顔で返してきた。

私が飛んだ1年3ヶ月の間には、ノエルとのこと以外にも変化があったらしい。

私は「いつてきまーす。お大事に」と明るく部屋を出て行く「シズちゃん」を
啞然として見つめた。

第2部 第2話

必死になり過ぎるのは醜い。ずっとそう思ってきた。いつも一歩退いたところにいるのが利口なのだとも。恋愛に関しては特にそうだ。

片思いは疲れるだけ。

両思いになれば周りが見えなくなる。追いすぎるなんて愚の骨頂。

だけどそんなのは恋愛をしたことのない人間の僻^{ひが}みだということが、いきつもとどりつ色んなことを考えた結果、ようやく分かった。

愚の骨頂？

いいじゃない。臨むところよ。

愚でもなんでも極めたもん勝ちなんだから。

1年3ヶ月の間に何があつたのか知らないけど、このまま泣き暮れていてもノエルは戻ってこない。

戻ってこない方がいいのかどうかも分からない。

私取るべき道は二つに一つ。

きっぱりと諦めるか、追いすぎるか。

そして私は決めた。

「あんた」になんか負けないんだから。

私は心の中で過去の自分にガンを飛ばし、月が照らす学園内の歩道を今にも走り出しそうなスピードで進んだ。

男子寮は女子寮と300メートルほど離れていて、その真ん中に食堂がある。

ちようどみんな夕ご飯を食べ終える時間らしく、女子寮から食堂までの間は寮に戻ってくる女子生徒たちに逆らうように歩き、食堂から先は男子生徒たちの流れに乗って歩く。

そういう訳で私はかなり浮いていたけど、「恋は盲目」とはよく言ったものだ。

この言葉も以前は悪い意味に取っていた私だけど、今はこの言葉を考えた人にノーベル平和賞を贈りたい。

そして私の執念が通じたのか、男子寮の前に辿り着くと同時に、私を盲目にしている張本人が2人の友達と一緒に寮から出てきた。

友達たちが逸早く私に気付^{いちはや}き、ニヤニヤしながらノエルを見る。

まだ別れ話をしたことを言っていないらしい。

それって、寄りを戻す可能性があるって思ってるから？

そう願いたい。

「ノエル、俺たち先行ってるわ」

「ああ」

ノエルが、なんてことはないという風に応える。

ただ友達が食堂の方へ歩いて行くのを見送ると、ノエルは私から視線を逸らすかのように地面を見た。

「何？」

「・・・」

言うことは決めている。
ちよつとの勇気が必要なだけだ。

だけど私に口を開かせたのは勇気ではなく、ノエルを失うという恐怖だった。

「ノエル。昼間はごめんね。私、やっぱりノエルと一緒にいたい」
「・・・」

今度はノエルが黙る。
私は構わず続けた。

「私、ノエルが好きなの。だから・・・別れたくない」

自分から別れ話を切り出しとして、何言ってるんだ。
きつとノエルはそう思ってる。私も思ってる。
だけど理屈じゃない。

私はノエルが好き。それだけだ。

そして「好き」という言葉を口にして気が付いた。
高校1年生の私は確かにノエルを好きだったけど、高校3年生の私はもつとノエルを好きになっている。
だってこの苦しさは半端じゃない。
私は、ノエルのことを大好きなくせに、何かの理由で別れる決意をしたんだ。

それほどまでに私を追い詰めたものはなんなのだろう。

ノエルが顔を上げ、私を見る。その瞳は月明かりに揺れていた。

「そんなの知ってるよ」

「・・・」

「俺だつて桜子が好きだ。別れたくない。でも、桜子はそれでも俺と別れるつて決めたんだ。一時的な感情なんかで別れるのをやめたら、桜子はきつと後悔する」

「しない！勝手に決めないで！」

「決めたのは俺じゃない。桜子だ」
「！」

そう。そうよね。私が決めたんだ。だけど。

「いや・・・別れたくない」

大粒の涙がポロポロとこぼれる。

男を涙で繋ぎとめるような女なんて、卑怯で芝居染みてるつて思つてたけど、こういう時つて本当に涙が出るんだ。

寮の入り口あたりで人の気配がした。

私にはそれを見る余裕はなかったけど、ノエルは私の手を引いて寮の裏側に移動した。

そこは林というほどではないけど、木々が立ち並びちよつとした「自然」になっている。

「振つて、やつぱ取り消しつて言つて、泣いて・・・どんだけ我がままなんだよ」

歩きながらノエルが心底呆れたような声で言う。

私は目を擦つて、私を引っ張つて前を歩くノエルの後姿を見た。

背が高くなつて背中も肩幅も広くなつて・・・中1の時より髪も伸びている。

なんだか「男」を感じる。

その時、私の中である気持ちガパンと弾けた。
抱き締めたい。

この背中を思い切り抱き締めたい。

私は強引に足を止めた。

腕を引っ張られたノエルが振り返る。

と、同時に。今度はノエルが強引に私の腕を引っ張った。

気付くと私はまさに「すっぽり」という感じでノエルの腕の中にいた。

やっぱりノエル、背が伸びた。

体感して改めてそう思う。

ドキドキはあまりしない。

ただただ居心地がいい。

自然と手がノエルの背中に回り、それはまるで決められているかのように一番しっくり来る場所に着地した。

きつと私、こうやって何度もノエルに抱き締められてたんだ。

お互いの息遣いが交わる。

身体が外気より熱くなる。

私は気が遠くなりそうな快感に襲われた。
まるで天国の中にいるみたいだ。

だけどその天国はすぐに離れていった。

「約束を・・・」

「え？」

「今年の桜子の誕生日にした約束だよ」

ノエルが私の両肩を掴んで腕を伸ばした。

二人の体が遠ざかる。

そしてノエルは私の目をまっすぐ見て、こう言った。

「あれを実現できたらやり直そう」

バサバサバサ！

大量の本が本棚から落ちる。

私はその一つを手に取りざっと目を通して、次の本へと手を伸ばした。

約束って何？

そう聞きたかったけど、

真剣なノエルの表情を見ているとそんなこと「忘れたから教えて」とは言えない。

ましてや「知らないから教えて」なんて。

だったら自分でその「約束」を探すしかない。

部屋に飛んで帰って最初に見たのは携帯のメールの受信箱だった。けどそこにはおるか、アドレス帳にもノエルの名前はなかった。まだ携帯を持っていないらしい。

そして次に私が手をつけたのが本棚だ。

日記があればベストだけど、28年間そんなものはつけたことが無いから、あまり期待できない。

それならスケジュール帳とかメモ帳とか、なんでもいい。

私の17歳の誕生日にノエルとした約束が分かるのであれば。

だけどそう都合よくそんなものは見つからない。

私は床に散らばった本の間にペタンと座り込んだ。

一体どんな約束したんだろう。

一緒の大学に行こうとか？

どこかに一緒にでかけようとか？

ノエルとの約束なんて大事なことで、どうしてなんの手がかりも残してないのよ、私！

本の隙間から覗くカーペットを思わずギュツと握り締めた。すると、そこからカサツという変な音がした。

なんだろうと思って見てみると、ごく普通の茶封筒だ。

住所も宛名も差出人も書いてないし封もしていないということは、私がおかを入れて保管していたということだろうか。

本棚に忍び込ませてあるなんてまるへソクリみたいだ。

実際、感触からしてお札くらいの大きさの紙が何枚か入っているよ

うに思える。

まさか本当にヘソクリとか？

だけど中を見てみると、そこにはとても意外な物が入っていた。

どうして私、こんな物を持ってるんだろう？

「うわ！桜子さん！？本棚ひっくり返して何やってるんですか!？」

「あ。小島さ・・・シズちゃん」

トイレ掃除から戻ってきたシズちゃんが、本まみれの部屋を見て目を丸くする。

「もー！体調悪いなら、ちゃんと寝てなきゃダメじゃないですか!」

シズちゃんはそう言いながら、本の合間を踏んで私の方へやってきた。

「体調が悪いなんて嘘だったんですね!？」と怒ることなく、さつきから言動のおかしい私を本気で心配してくれてるみたいだ。

小島さんてこんなにいい子だったんだ。昔は気付かなかった。

うつん、気付こうとしなかった。

そんなことを思ったせいかな、私は思わずポロっと本当のことを口にした。

「私の誕生日にね、ノエルと何か約束したみたいなんだけど、それを思い出せなくて・・・」

「ええ？」

シズちゃんが更に目を丸くする。だから私はてっきり、「それでどうして本棚をひっくり返してるんですか？」という返事が返ってくるのかと思ったら。

シズちゃんは大きな声でこう言った。

「あんな大事な約束、忘れちゃったんですか？」

第2部 第3話

「シズちゃん、私がノエルとどんな約束したか知ってるの？」
「あれだけノロケて話されたら、忘れたくても忘れられません」

シズちゃんは方向転換して私の机に向かった。

そしてその上に置かれた、ある「不思議な物」を手に取った。

ミッキーマウスの絵が描かれた缶だ。大きさからして、クッキーか何かの空き缶みたいだけど、私は今まで一度もミッキーマウスなるもの実際に目にかかったことがない。

興味ないのだから仕方ないんだけど、それ故にどうしてそんな「不思議な物」が私の机の上に置いてあるのか分からない。

・・・もしかして。

私、ノエルと一緒にデイズニールランドに行ったんだろうか。

ふと、軽い嫉妬を覚えた。1年3ヶ月の間、ノエルと一緒に過ごしていた「私」に対して。

一体「私」はノエルとどんな時間を過ごしてきたんだろう。

私もそれを味わいたかった。

ノエルと一緒にいたかった。

シズちゃんがミッキーマウスの缶を手にも、床に座り込んでいる私の所へ戻ってきた。

そして本をどけて私の横に座り、缶をパカッと開く。

そこには・・・なんだかよく分からないものが色々入っていた。一番多いのは紙類。それに何かの景品なのか、売り物にならないような簡単なおもちゃ。

他にもごちゃごちゃした物がたくさんある。子供のおもちゃ箱みただ。

私はその中の紙を一枚取り出した。開いてみると、レシートだ。学校の近くのファミレスの物で、日付は「今」から1年ほど前。ポテト、ソーセージ、チーズの盛り合わせ、サラダ、ドリンクバー2つ・・・

もしかして。これ、ノエルとの思い出の物を入れている箱？

よく見ると景品らしきおもちゃはファーストフードのお店の物だ。きっと私はノエルとこのファーストフード店で何かを食べて、その時貰った景品をここに入れていたのだろう。

それにしてもレシートまで取ってるなんて・・・痛すぎるぞ、「私」。

1人で赤面していると、私の「痛い」行動に慣れているらしいシズちゃんが、缶を漁り始めた。

「えーっと。これじゃないなあ。あ、これこれ。ほら、日付が桜子さんの誕生日になってる」

そう言っただけでシズちゃんが私に渡してくれたのは、映画のチケットの半券だった。

日付は確かに私の誕生日である3月19日。

西暦も、一瞬分からなかったけど、私が高校2年生の年だ。

高1の時にもノエルは映画の前売り券をくれた。

どうやら私の誕生日に映画のチケットをプレゼントするのが2人の間の決まりになっているらしい。

そして私は高校2年の誕生日にノエルと一緒に映画を見に行つて、何かの約束をしたんだ。

「それ見ても、思い出しません？」

シズちゃんが訊ねる。

だけど私にはさっぱり記憶がなくて、正直に首を横に振ると、シズちゃんは何故かちよつと本気で怒った。

「桜子さんが強引に月島君と約束したんでしょ？どうしてそれを忘れちゃうんですか！」

「う、うん・・・ごめん」

「謝るなら、私じゃなくて月島君に謝ってください」

「はい・・・」

ごもつともだ。

すると今度は、シズちゃんは床に散らばった本を漁り始めた。なんだかシズちゃんは色々知っているらしい。それはつまり、私がそれだけシズちゃんを信頼して色々話したということなのだろう。

「あつた、あつた。はい、桜子さん。これを読んで思い出してください」

「え？」

シズちゃんに手渡されたのは、2冊の単行本だった。

1冊は赤いブックカバー、もう1冊は青いブックカバー。どちらのカバーにも同じタイトルが書かれてある。

2冊を交互にパラパラとめくると、私が最も苦手な恋愛系の小説だということが分かった。赤い方は女の視点で、青い方は男の視点で

書かれている。

「私、この本の映画を見に行ったの？」

「そんなことも覚えてないんですか？桜子さんがこの本を大好きで、『興味ない』って言う月島君を強引に映画館に引っ張ってったんじやないですか」

「え？私が？」

「そうですよ」

私が恋愛小説を好んで読んでたなんて・・・
恋愛って人間をこんなにも変えるんだ。

私はシズちゃんに「だけど受験勉強もちゃんとしてくださいよ」と釘を刺されながらも、徹夜の覚悟で小説を読み始めた。

青の本を閉じた時には、やっぱりもう太陽は完全に顔を出していた。赤の方はだいぶ前に読み終わっている。単行本とは言え、一気に2冊読むのはさすがに疲れた。だけど眠さは感じない。それほど夢中になった。本の内容自体も面白かったけど、何より主人公の境遇が今の私と似ていて共感できた。

別れた男女が再会するまでの物語。

2人は二十歳の頃、別れる前に「彼女の30歳の誕生日にイタリアのフィレンツェで会おう」という約束をする。
そしてそれが実現するのだ。

じゃあ、私がノエルとした約束って・・・

「思い出しました?」

いつの間にかシズちゃんが起きてきて、目を擦りながら私の横に立っていた。

私は椅子に腰掛けたままシズちゃんを見上げた。

「私の誕生日にどこかで会おうってこと?」

「そうです。その映画を見て桜子さんは『私たちもこんな約束しようよ』って月島君に言ったんです。付き合っても別れてても、いつか約束の場所で会おうって。ま、映画と違って『5年後の私の誕生日に自由の女神の前で』っていう約束だったみたいですけど」

「自由の女神?」

「はい。本物ですよ。ニューヨークの自由の女神。映画を見た後に行ったお台場で自由の女神を見た桜子さんが『一度本物を見たいから、場所はニューヨークの自由の女神にしよう』って決めたんです。月島君はそういうロマンチックなのが苦手で嫌がってたみたいですけど、最終的には『いいよ』って言うてくれたって嬉しそうに桜子さん話してました」

シズちゃんはとても丁寧に説明してくれた。

まるで、私が何も知らない「第3者」だというのを分かっているかのように。

「シズちゃん・・・」

「昨日寝る前にベッドの中で考えたんです。月島君との約束をあんなに嬉しそうに話してた桜子さんが、それを忘れちゃうなんてことあるのかなって」

「・・・」

「桜子さん。桜子さん、ですよ?記憶がないんですか?」

「・・・うん」

シズちゃんは私と目線の高さが同じになるように跪き、私の目を見た。

驚いている様子はない。

「やっぱり。記憶喪失？」

「違うの。どうしてか分からないけど、私、勝手に意識だけ時間を越えちゃうの。これが夢でなければね」

シズちゃんは表情を崩さず、じっと私の話を聞いた。私がこんな冗談を言わないことをよく分かってくれているのだろう。

「本当の私は28歳。でも目が覚めたら高校1年生に戻ってた。前の私はノエルと付き合ったことなんてなかったけど、『戻って』から付き合い始めたの」

「もしかして、それからまた時間を越えたんですか？」

「うん。目が覚めたら昨日の昼で、私は何故か校庭でノエルと別れ話をした」

ここでシズちゃんは初めて驚いた。

「別れ話！？どうして!？」

「分からないの・・・しかも私から言い出したみたいで」

「月島君は了解したんですか？」

「うん。でも私が、やっぱり別れたくないって言ったら『約束を実現できたらやり直そう』って」

「それって、5年後の桜子さんの誕生日にニューヨークの自由の女神の前で会えたら、ってことですよね」

「多分そうだと思う・・・あ」

「どうしたんですか？」

いけない。大事なことを忘れてた。5年後の私の誕生日ということ
は、私の22歳の誕生日だ。

それはつまり。

私が結婚した2ヵ月後ということだ。

第2部 第4話

「じゃあ桜子さん、私のこと全然覚えてないんですか!？」
「うん」

シズちゃんが朝ごはん代わりにと机の中から引っ張り出してきた菓子パンを一口かじり、不満げな顔をする。更に。

「桜子さん、21歳なんかで結婚するんですか？」
「うん」

シズちゃんの顔がますます渋くなる。それでもお腹はすくようで、もう1口、パンをかじった。

私もおこぼれにあずかり、クロワッサンを食べる。

シズちゃんは口をもぐもぐさせながら呟いた。

「ふーん・・・でも、そつか・・・」
「え？」

「前の桜子さんは、月島君と付き合ってたんですよね？」
「うん」

「だったら当然、月島君との再会の約束もなかった。だから桜子さんは親の言う通り、21歳で結婚したんですよ。月島君と付き合ってたなら、結婚しなかったんじゃないですか？」

確かにそうかもしれない。だって私は今、絶対聖とは結婚せずにノエルと再会したいと思っているから。

「それに、私が桜子さんと仲良くなったのも、桜子さんが月島君と

付き合ってたからです」

「どういうこと？」

シズちゃんは時計を見て授業が始まるまでだいぶあることを確認すると、安心したように3つ目のテーブルロールに手を伸ばした。

「正直昔は桜子さんのこと、とっつきにくそうな先輩だなんて思ってた。でも月島君と付き合ってるって噂で聞いて、今年の3月に桜子さんと同室になった時思い切って『本竜先輩ってあの秀才でイケメンの月島君と付き合ってるんですか？』って聞いたら、幸せそうに『そんな秀才でイケメンなんて…でも、うん、付き合ってるよ』なんて言うから、拍子抜けしちゃって。それから桜子さんと仲良くなっただんです」

「そうなんだ・・・じゃあ、シズちゃんと私が仲良くなれたのは、ノエルのお陰なんだね」

「はい。だから私、2人には別れてほしくないんです」

それでシズちゃんは、昨日私がノエルとの約束を忘れたって言ったら怒ったんだ。それなのにこんなことになってしまって、なんだか申し訳ない。

それから私は授業が始まるギリギリまでシズちゃんからこの1年3ヶ月の出来事を聞いた。

シズちゃんと同室になった直後、私がノエルとの約束をデレデレしながら話したこと。

私がデートらしいデートがしたいと言って、ノエルとディズニールンドへ行っただこと。

でもその帰りに些細なことでノエルと大喧嘩したこと。

そして私が国立のC大学を目指しているということ。

「大学は医学部を含め、色々な学部があるマンモス校だ。レベルもかなり高い。」

シズちゃんの話によると、私は頭のいいノエルに「一緒に大学に行こう」と強要するのが嫌だったらしく、でもノエルと同じ大学に行きたくて、ノエルにはそうとは言わずに自分が行きたい医学部とノエルが目指すであろう経済・商業のレベルの高い大学を志望校にしたらしい。

本当に私、ノエルのことを好きだったんだ。

だから私は決めた。

ノエルがどの大学を目指すかは分からないけど、私はこのまま大学を目指そう。そして5年待とう。
待ってもう一度ノエルと出会っただ。

だけどその前に、どうしてもシズちゃんに確かめておきたいことがある。

私はシズちゃんと一緒に廊下を急ぎながら訊ねた。

「ねえ、シズちゃん。私、1人でどこかに出掛けることってよくあった？」

「1人ですか？うーん・・・あ、そうですね。よくって訳じゃないけど、たまにありましたよ。3、4ヶ月に1度くらい。デートですか？って聞いたら『ううん。1人なの』って言ってました」

やっぱり。

「自分がどこに行ってたか分かるんですか？」

「多分ね。28歳の私は行ったことのないところだけ」

「へえ？」

「私」は、そのことに関してはシズちゃんにも詳しく話していないらしい。

そうだよ。ノエルとのかを応援してくれているシズちゃんにはちよつと話しくいもんね。

例え、何の下心がなかったとしても。

私は本鈴ギリギリで教室に滑り込んで教科書を開いた。

それとほとんど同時に数学の教師が教壇に立ち、遙か昔に聞いたことのあるような公式が教室の中を流れ始める。だけどその公式をどういう問題に当てはめて使えばいいのかさっぱり思い出せない。28歳の脳での受験勉強は厳しそう。でも、頑張らなきゃいけない。それが今の私にできる唯一のことだ。

私は頭の中のスケジュール表を「受験勉強」という文字で埋めていった。

ある一箇所だけを除いて。

夏休み初めの日曜日。

私はC大模試を受けに大手予備校へと向かった。

もちろん自分がこの模試に申し込んだことは覚えてない、というかわからないけど、シズちゃんがちゃんと教えてくれたのだ。

シズちゃんは不思議な子だ。私の話を疑うことなく信じてくれただけではなく、私が知らないであろうことは先回りして教えてくれる。特に私がノエルと付き合った結果起こった出来事やできた人間関係は、私には全く分からないから本当に助かる。

シズちゃんと仲良くなれたことは、ここから続く私の人生の中で大

きな財産になるだろう。

私は心の中でシズちゃんに感謝しながら電車から降りた。参考書を読みながらホームを突っ切り、階段を上る。

ここ数日必死に勉強してきたけど、昔受けた大学よりレベルの高い大学を28歳の脳で目指すのは難しい。本当にもう勉強しまくるしか仕方がない。こうやって歩いている時間ですら無駄にできない。

ところが。それが裏目に出てしまった。

「うわっ」

「きゃっ」

私は突然目の前に現れた「壁」に激突し、見事に尻餅をついた。

一瞬、何が起こったのかわからなかったけど、どうやら反対側の階段から登ってきた人と正面衝突してしまったらしい。

慌ててスカートの裾を合わし、鞆を拾い上げる。そして少し遠くに飛んでいってしまった参考書に手を伸ばそうとすると、大きな手が私の横からすつと伸びてきて参考書を持ち上げた。

「大丈夫ですか？はい、これ」

「あ・・・どうも」

顔を上げると、遥か高くに男の人の顔が見えた。私が地面に座っているから高く感じるという訳ではないだろう。

慌てて立ち上がり、男の人の手から参考書を受け取る。180センチはありそうだ。

「すみません。私、余所見していて」

「いえ、俺も本読んで、ちゃんと前見てなかったから。すみませんでした」

180センチさんが軽く頭を下げる。そして頭を上げた時、私はようやくその顔を近くでまともに見た。

切れ長の目に筋の通った高い鼻。それがバランスよく配置されている小さな輪郭。

高校生くらいだろうけど、たいしたイケメンだ。

ノエルや聖を見慣れている私でもそう思うのだから、間違いないだろう。

「あ、それ俺の参考書」

「え？」

「君が持つてるやつ」

私はさっき180センチさん自身が私に渡してくれてた参考書を見た。

間違いなく私が読んでいた参考書だと思うけど。

「俺も同じの読んでたんです」

180センチさんはそう言って、私の後ろに落ちている全く同じ参考書を取り上げた。

なるほど。同じ参考書を読みながらぶつかったのね、私たち。ということとは。

「C大模試受けるんですか？」

「うん。君も？」

「はい」

180センチさんが微笑む。これは本当にイケメンだ、思わず見とれてしまう。

ガラにもなくドギマギしていると、180センチさんはスマートに参考書を取り替えた。

「お互い頑張ろうね。じゃあ、失礼します」
「は、はい」

もう少し鑑賞させて頂きたいお顔だったけど、残念なことに180センチさんは私に参考書を渡すとさっさと改札の向こうに姿を消してしまった。

ま、今はそれどころじゃない。一つでも多く数学の公式を覚えなくちゃ。

私は懲りずにまた参考書を読みながら改札に向かって歩き始めた。まさか、これから幾度となく「鑑賞」できることになるとは思いもせず。

第2部 第5話

終わったことは取り合えず水に流して、私は電車に乗り込んだ。
大丈夫、大丈夫。まだ7月だ。ただの模試だ。まだ間に合う。

だけど今日だけは許して、神様。

少し込み合っている電車の隅っこで私は小さくなって英単語集を開いた。

誰から隠れているわけじゃない。でも、敢えて言うなら受験とノエルからだろう。

模試は散々だった。

受験勉強を始めて数日じゃ仕方ないし一応一度大学受験を経験しているのだから大丈夫、と自分を励ましながらなんとか最後まで解答用紙を埋めたような状態だ。

朝会った180センチさんも私と同じ部屋にいた。医学部志望者用の試験が行われる部屋だ。

医者のお卵（それに勝手な想像だけど多分頭もいい）の超イケメンということ、みんなの大注目を浴びてちよつと居心地が悪そうだったのがおかしくって、お昼休みに1人でこっそりニヤニヤしてたら「笑うな」と言わんばかりに180センチさんに軽く睨まれてしまった。

でも、そんな顔もかっこいいからイケメンは得だ。

ノエルも・・・。

ノエルとは、夏休み前に生徒会で一度会ったきりだ。その時ノエルはみんなの前でわざと私を「本竜先輩」と呼んだ。誰の前でも平気

で「桜子」と言っていたノエルのその発言は、私たちが別れたことを一瞬で周囲に示した。ノエルらしいやり方だし不満はない。それなのに目が潤んだ。ノエルは私を泣かす天才だ。「泣くな」というノエルの辛そうな視線がなければ、本当に泣いてしまっていただろう。

私と別れたノエルは数日でぐっと大人びて、それは私以外の生徒の目にも一目瞭然らしく、シズちゃんさえ「なんか一段とカッコよくなりましたね」なんて、わざとおどけて言っていた。ほんと、イケメンは何をしても得でム力つくんだから。

電車が、さつき模試の前に私が乗っていた電車と同じ方向へ動き出した。

つまり、寮とは反対方向ということだ。

私は視線を車窓から外へ向け、無理矢理頭の中からノエルを払拭した。

5つ目の駅で降りて、あまり使ったことのない路線に乗り換え、更に3駅。辿り着いたのは一度も降りたことのない、ちょっと騒がしい駅だった。

右も左も分からないけど、もし私がこの1年3ヶ月の間に何度か足を運んでいるのなら、身体が覚えているはずだ。私は本能に任せて歩き出した。

でもさすがに途中何度か道に迷いそうになってコンビニで目的地の場所を尋ねたけど、そこを知っている人はほとんどいなかった。レジに並んでいた女子大生が奇跡的にも「私たちも今からそこに行くの」と言ってくれなければ、辿り着けなかったかもしれない。神様は私が隠れていてもちゃんと見てくれてるらしい。

ただ地下への階段を下りて「そこ」にいる沢山の人を目にした時、この広い東京でここに来ようとしていた女子大生たちと出会ったのは、余り低い確率でもないように思えた。それほどに「そこ」は熱気に溢れている。

自分の手の中にあるチケットの半券を見ると、選んだように一番後ろの端っこの席の番号が書かれていた。どうやら私は受験とノエルだけでなく、「彼」からも隠れてこのチケットを買ったようだ。

私はチケットの半券を茶封筒の中にしまうと、席についた。

しばらくすると照明が落ち、さっきまでとは違った騒がしさが辺りを包んだ。

静かなざわめき。

そして20メートル程先にある舞台がパツと明るくなり大きな音で音楽がなり始めた瞬間、全てのざわめきが消えた。いや、消えたように感じた。

舞台上に数人の男女が現れる。

その一番右端にいるのは学ラン姿の男の子。

聖だ。

変なの。聖って中学の時からブレザーで学ランなんか着たことないはずなのに、劇の中では着るんだ。

それが私の最初の感想だった。

本棚で見つけた茶封筒の中に入っていたもの。それは、1枚のチケ

ツトと5枚の半券だった。

正確にはたった今、1枚のチケットも半券になったから合計6枚の半券が茶封筒の中に入っていることになる。

日付はだいたい3ヶ月ごとになっていて、多分これがシズちゃんの言っていた、私が1人で出掛けていた原因だろう。

見つけた時は、一体これがなんのチケットなのか分からなかった。題名が書かれているので映画のチケットかと思ったけど、それにしではどれも聞いたことのない題名だったし、チケット自体の作りも手作り感が溢れている。

それが何なのか分かったのはチケットの「主催 劇団こまわり」という文字を見た時だった。

劇団こまわり。

聖が所属している劇団だ。

つまり私はこの1年3ヶ月、シズちゃんにも多分ノエルにも内緒で聖が出る劇を見にきていたのだ。それも劇が新しくなる度に。

私はどういっつもりでここに通っていたのか。

その答えもチケットの半券が教えてくれた。チケットの半券の中で一番日付の古いものは約1年前の物で、それだけは他の5枚とは雰囲気が違う。

指定の席が真ん中の前の方のいい場所で、よく見ると「招待券」と書かれてある。

多分聖が私にくれたのだろう。

確かに以前私は聖に「いつか、聖が演じてるとこを見せてね」とは言っただけど、本当に見せてくれたんだ。意外と律儀な性格なんだな、

と今更ながら夫の本性を知った気分だった。

残りの5枚の半券は、全て席が一番後ろの端になっている。

この5枚は私が自分で購入して、きつと聖にも「見に行く」とは言わずにこっそり見に行っていたのだろう。

それはどうしてか？こればかりは分からない。単純に劇団こまわりの劇を気に入ったのかもしれない。それとも聖を応援するつもりで見に行っていたのだろうか。

どちらにしろ許婚が出ている劇を見に行くなんてノエルにもシズちゃんにも話せず、照れくさくて聖にも言えずにいたことは間違いないようだ。

だけどそれは私の目論見違いだったようで。

劇が終わってこそこそと帰ろうとしたところで、私は突然呼び止められたのだった。

第2部 第6話

声をかけられたのは、劇場になっっている建物の地下から地上1階へ上ったところであった。

嫌というほど聞きなれた声に身体が強張る。

「今日も黙ってこそ帰る気かよ」

「聖・・・つぶ」

「・・・」

カーテンコールが終わってよほど慌てて出て来たのか、聖はまだ学ランのままだ。

舞台は映画やドラマと違って年齢に関係なく色々な役を演じれる場だということは私も知っているけど、ただでさえ大人っぽい聖の学ラン姿はなんだか笑える。

「笑うな」

劇が終わった興奮を隠すかのように、聖はいつも以上に仏頂面になった。

「だって・・・あはは、似合わない」

「あのは・・・」

「あははは。・・・私がいるの、気づいてたんだ？」

「新しい劇の初日の度に同じ席に座ってりゃ気づく。いっつも黙って帰りやがって」

なんだ。私は気づかれてないつもりだったらしいけど、聖はずっと前からお見通しだったのね。

恥ずかしいけど、学ラン姿の聖も相当恥ずかしいだろうから、お相子ということにしておこう。

それに。

「劇、凄く面白かったよ。それに聖の演技も良かった」

「・・・とってつけたみたいに褒めるな」

「本当よ」

本当に本当だ。

聖は端役だったけど、本当に良い演技をしていたと思う。

登場場面も台詞も少ないのに、何故か目を惹く。

いつもの聖からは想像もできないくらい声も大きく伸びやかで、聖が舞台上で動けば、自然とそっちに目がいく。

それは単に、私が聖を個人的に知っているからだけではないだろう。

きつとこういうのを「花がある」というんだ。

「聖が主役を演じれる日を楽しみにしてる」

私がそう言つと、とたんに聖の顔から不機嫌な表情が消えた。

その代わりに現れたのは、いかにも自信がなくて頼りなさそうな表情だった。

「俺なんかが主役をできる日なんて、来るのかな」

聖らしくない。でも、きつとこれが今の聖の本音なんだ。

私は、28歳の聖が演劇をやめているのを知っているだけに、なんとも言いようがなかった。

「・・・」

「なんだよ。良い演技だったとか言っつて、桜子も俺には主役なんて務まんねーと思ってるんだろ」

「違う。聖ならできると思う。・・・頑張り続けられ」

「・・・本当に？」

「うん、本当に」

そう。だから続けて。

このままだと聖は嫌々私と結婚して無職になる。

だったら思い切りやりたいことをやればいい。そうすれば、未来はよくなるかもしれないし、私と結婚しなくても済むかもしれない。

そうなれば私もノエルと・・・。

ノエルと？

私はノエルを待つつもりだ。

5年後にもう一度ノエルとやり直すんだ。

5年なんてたいしたことない。すぐだ。

でも、ノエルはどう思ってるんだろう。

本当に5年後、私と再会するつもりがあるんだろうか。

再会してやり直すつもりがあるんだろうか。

もしノエルとやり直すことができなかったら・・・私はどうなるんだろう。

ノエルも聖もいなかったら、私はいつまでも結婚できずに一人であるんだろうか。

それでもあんな結婚生活を送るよりはましだと思う。

私と聖はやっぱり結婚すべきじゃなかった。

聖は自由な人間だ。

何にもとらわれずに自分の進みたい道を進むことが、聖には一番の幸せに違いない。

そして私もまたわがままな人間だ。

ノエルのことを好きなのに、なんだかんだ放っておけず聖の劇を見にきている。

きっとこれから見に来るだろう。

私と聖は一定の距離を保っていた方が、良い関係を築けるのかもしれない。

「聖は大学受験しないの？」

そう訊ねると、聖はあっさりと首を横に振った。

「興味ない。でも親父がうるさいから、適当にアホな私大を受ける」

「N大？」

「なんで分かるんだよ」

だって聖の出身大学だもん。

「だって聖にはお似合いだもん」

「五月蠅い。桜子は？」

「C大」

「医学部？」

「うん」

「へえ。さすがに頭いいな。医者になったら俺を食わしてくれよな」

私は思わず笑った。

この頃からそんなことを考えてたの？こういうところは変わらないな。

そして何故か口が滑った。

無意識の冗談つてやつだ。そくに決まってる。

「いいよ」

「おー。太っ腹じゃん」

「その代わり条件があるわ。演劇を続けること」

「余裕ー」

聖が「今の言葉、忘れんなよ！」と嬉しそうに笑った。

将来楽に暮らせるのが決まって笑っているという感じじゃない。

純粹に・・・演劇をできることを喜んでいる、そんな笑顔だ。

急に胸が苦しくなった。

聖は一体どこでこの笑顔を落としてきたんだろう。

何が聖からこの笑顔を奪ったんだろう。

一つ、思い当たることがある。

あれは確か、実家を出た聖がノコノコと戻ってきた大学4年の冬休み。

聖との婚約がなくなつたと喜んでいた私に、突然伴野のおじ様から「やっぱり婚約を復活させて、すぐに結婚してやってほしい」と聖をつれてうちにやってきた時のことだ。

私は心底がっかりしたけど、聖のそれは比ではなかった。聖に無関心な私でも「どうしたんだろう」と思うほど落ち込んでいて・・・

今の聖の目の輝きなんて微塵も感じられないほど、目が死んでいた。もし今聖がそんな目をしていたら私はきっと「どうしたの？」と訊ねるだろう。

もしかしたら「大丈夫？」と心配もするかもしれない。

ただあの時私は聖に声すらかけなかった。

淡々と進んでいく結婚話をぼんやりと聞きながら「どうして戻ってきたのよ」と心の中で聖を責めていた。

でも、聖はそんな私の非難の視線にも気づかず、ただ黙って座っているだけだった。

もしかしたらあの時、聖に何かあったのだろうか。

こんなに熱心に取り組んでいる演劇をやめてしまうほどの何かが。

「桜子が医者になるのって22歳？」

私が聖をじつと見ていると、聖は早速皮算用を始めた。

「・・・医学部は6年制だから24歳。そこから2年は研修医だから、ちゃんとしたお医者さんになるのは26歳くらいね」

「えー？んじゃそれまでは結婚できないのか？バイトでもして食い繋いどくかなー」

「就職しなさいよ」

「そんなことしたら演劇できなくなる」

変なところで真面目なんだから。

だけど私は、目の前のいきいきした聖を見てある決心をした。
聖と結婚はできない。

でも、できるかぎり聖を応援しよう。

聖がこの笑顔を失わなくてもいいように。

第2部 第7話

時間はゆっくりと流れた。

いつそまた「飛んで」5年後にならないかと何度願ったか知らない。けどそう都合よくはいかない。私はとにかく勉強に明け暮れた。

寮が閉鎖される夏休みは実家で机にかじりついた。

2学期が始まるとみんなと争うかのように勉強した。

1度目の高3よりも頑張れた。

勉強だけに集中できるというのは学生の特権だ。大人になってから勉強しようと思うと、勉強以外のことに時間も時間を取られて、結局あまり勉強できない。仕事とか家事とか育児とか。だから勉強はできるうちにしておいた方がいい。それが28歳まで生きてきた私が学んだことの一つだ。

だから頑張れる。

自分のために。ノエルのために。

そんな勉強漬けのある秋の夜、携帯が震えた。電話だ。

私に電話してくるなんて、ノエル？・・・な訳ないか。

高3である私は1学期いっぱい生徒会を「卒業」したからノエルとは全く会っていない。

寂しくはない。そんなことを感じる時間があれば勉強してきた。

じゃあ誰だろう？パパかママ？それともまさか聖とか？

私はシャーペンを置くと、ベッドの中のシズちゃんがつすり眠っているのを確認してディスプレイを見た。そこには「通知不能」という文字。

非通知じゃなくて通知不能？な、なんなんだろう、それ。

出ようかどうか迷ったけど、もしかしたら携帯会社からの連絡とかかもしれない。

（それなら尚のこと「通知不能」じゃない気もするけど）
私はおそろおそろ通話ボタンを押して携帯を耳にあてた。

ガーとかピーとか小さな雑音がする。そしてそのずっと奥の方から「もしもし？」という小さな声が聞こえた。

「・・・もしもし？」

「聞こえてる？」

「はい」

「良かったー」

段々声はつきり聞こえてくる。男の人の・・・いや、男の子の声だ。

それも聞き覚えがある。

「よお、久しぶり、本竜」

「・・・ませぎ 柵木君？」

「せいかーい」

「柵木君！」

思わず顔が綻んだ。

高1の春休みに交換留学制度でアメリカに行った柵木君だ！
唯一と言っていい私の男友達だ！

「久しぶり！懐かしいなあ」

「あはは、懐かしいってほどじゃないだろ」

そうね。でも28歳の私からすれば本当に懐かしい。何年ぶりだろう。

「まだアメリカだよね？」

「うん」

「そっか。国際電話だから携帯に『通知不能』って表示されたのね」
「へー。そんな風に表示されるんだ」

柵木君の笑い声は心地よい。今は電話だから見えないけど笑顔も人懐っこくて、みんなの人気者だ。

明るい茶髪にピアスという海光では異色のいでたちも、柵木君だと
なんだか違和感がない。

「どうしたの、急に？あれ、今そっち何時？」

「7時。朝の」

「ふーん？」

そんな朝早くに、どうして私に電話なんてしようと思ったんだろう。
確かに柵木君は私の友達だ。堂々と「友達だ」と言える。

ただどそれは定期的に連絡を取っているような「友達」ではなく、
久しぶりに会ってもすぐに昔に戻ったみたいに仲良く話せるような
「友達」で・・・

つまり、用もないのに朝早く海外から電話してくるなんてことはな

い、と思う。

だけど柵木君は本題に入るのを躊躇うかのように、「大学、どこ受けるの？」と訊ねてきた。

「C大」

「医学部志望だっけ？」

「うん」

「そっかー。頑張れよ」

聖はC大医学部と聞くと「頭いいな」と言っていたけど、柵木君だと「頑張れよ」になる。

柵木君にとってはC大医学部は大したレベルじゃない。それこそが柵木君が交換留学生に選ばれた理由だ。それでいてそんなことは全く鼻にかけないから、柵木君を妬む人もいない。人徳というやつだろう。

「柵木君は？日本の大学に進むんでしょ？」

「うん・・・どうしようか悩んでる」

私は知ってるよ。柵木君は帰ってくる。そしてT大の帰国子女枠であっさりと合格するんだから。

そう教えてあげたいけど、それは反則な気がするから黙っておこう。

柵木君がちよつと沈黙した。

こういう時、私はいつも相手が話し出すまでぼんやりと待っているタイプだけど、今はなんだか手を差し伸べてあげたくなった。年下の彼氏がいた者のお節介だろうか。

「何かあったの？」

「いや・・・別に」

「でも、何かあったから私に電話してきたんでしょ？」

「・・・」

「言つてよ。電話代、もつたいないよ？」

「っふ。そうだな」

柵木君は緊張が解けたのか少し笑った。

「本竜、月島と別れたんだって？」

「うん・・・。ノエルから聞いたの？」

「ちよつと前に月島からパソコンにメールが来たんだ。珍しくへこんでたぞ、あいつ」

「うん」

「いい気味だぜ」

そう言えば、柵木君とノエルは仲のいい先輩・後輩だった。

いつもはノエルが柵木君のことを「世話の焼ける先輩」扱いしてたけど、結局は頼りにしているらしい。

柵木君も「いい気味」とか言ってるけど、本音じゃないだろう。

「でも、月島と本竜が別れるなんてちよつと意外だな」

柵木君がわざと茶化す。

柵木君もね、と返したいところだけど、私はその言葉を飲み込んだ。

柵木君の声のトーンが少し落ちる。

「・・・でさ。本竜も落ち込んでるだろうところ悪いんだけど、ちよつと頼みがあつて」

「うん。何？」

どうやらこれが本題らしい。

私は携帯を耳にあてる力を強めた。

「様子を見てきて欲しいんだ」

「様子？」

「うん・・・先輩の。それと、」

「子供の？」

「・・・」

今度の沈黙は重かった。手の差し伸べようがないくらいに。

柵木君の言っている「先輩」というのは、柵木君が留学前に付き合っていた恋人のことだ。

海光の2つ上の先輩で、物凄く頭のいい人だった。

ある日、その先輩は妊娠した。

そして産む決意をした。

先輩は、相手は柵木君じゃないと言い張っていたけど、そんなのは柵木君をかばうための嘘だろう。

柵木君と先輩の間でどういうやりとりが行われたのかは分からないけど、柵木君は先輩と別れてアメリカへ留学し、先輩はなんとか恩情で高校は卒業できたものの大学進学は諦め、シングルマザーになった。

だけど柵木君はずっと先輩と子供のことを心配していたんだ。

「・・・いいよ。様子、見てきてあげる」

「本当に？ありがとう。悪いな、勉強で忙しいのに」

「うっん」

そうは言ったものの、正直気は進まなかった。

私は、柵木君がおそらく空で読み上げている住所をメモっている振りをしながら、指でペンをクルクルと回した。住所なんてものは必要ない。

「じゃあ、頼むな」

「うん」

「それと・・・俺のことは二人には言わないでくれな」

「分かった」

柵木君は何度もお礼を言って電話を切った。

いよいよ高校卒業が近づいてきて、帰国を考える時期になったから先輩と子供のことがいつも以上に気になったのかもしれない。

だけど・・・

私はため息をついてシャーペンを取り上げた。

第2部 第8話

柵木君から電話をもらった次の日曜、私は朝早く実家に帰った。ちやうどパパが家を出る時間を狙ってた。

「パパ、おはよう」

「桜子？」

パパは玄関の前に立っている私を見て、ちよつと嬉しそうに驚いた。

「どうしたんだ。普通の日曜に帰って来るなんて珍しいな」

「ちよつとね。パパ、今から病院でしょ？私も一緒に行つていい？」

「もちろんいいが・・・どういふ風の吹き回しだ？今までそんなことしたことないだろ」

「将来の私の職場だもん。たまには見学しとかないとね」

パパは更に顔を綻ばせて歩き始めた。

「病院」というのは、うちから徒歩5分ほどのところにある「マミ―ホスピタル」という産婦人科と小児科がある病院のことで、パパはその院長であり小児科の代表者でもある。

以前は産婦人科しかない「本竜産婦人科」だったのだけど、よそから産婦人科の先生を招いて、

私が中学1年の時に「マミ―ホスピタル」に建て替えた。

個人の病院で小児科と産婦人科の両方があるところは珍しいらしく、なかなかの人気だ。

そして私は24歳で産婦人科の医者になる。

ゆくゆくは産婦人科の代表者、そして院長になるだろう。

私とパパは並んで開院前の病院の裏口から院内に入った。
中では既に看護師や受付の人が忙しそうに動き回っていたけど、
パパを見るとみんな一瞬動きを止めてパパに大きな声で「おはよう
ございます」と言い、
また動き始めた。

病院スタッフの動きは、医者姿見だと思う。
マミーホスピタルのメンバーの機敏さを見れば、パパがどういう医
者が一目瞭然だ。

私は院長室へ行くパパと別れて、受付に向かった。
開院前の受付は戦場だ。昨日の申し送りの確認や今日の診察予約・
分娩予定、時には帝王切開のスケジュールを組んだり、人が何人
いても足りない。それをうちは2人でこなしている。
これもパパの指導の賜物ではあるけれど、本人たちの能力によると
ころも大きい。

特に。

「おはようございます」

私は黒い髪を後ろでくくった落ち着いた感じの女の人に声をかけた。
落ち着いているといっても私の2つ上だからまだ20歳くらいだけ
ど、その仕事ぶりと頭の良さは、うちの病院でもトップだ。

その人はファイルから目を上げ、にっこりと微笑んだ。

「あら、珍しい。おはよう、桜子ちゃん」

桜子・・・ちゃん？

私は思わず「へ？」と口を開いた。

確かに中・高の先輩・後輩ではあるけれど「桜子ちゃん」なんて呼ばれたのは初めてだ。

「本竜さん」か、私が医者になってからは「先生」だったのに。

もしかして、ここにも私がノエルと付き合っていたことが影響してるんだろうか。

でも、どこでどう影響しているのか想像もつかない。

とにかく、私が思っているよりも、私はこの人と仲が良いらしい。

じゃあ、いつもみたいに苗字で呼ぶより名前で呼んだ方がいいよね？

確かこの人の名前は・・・

「えっと、亜希子、さん？」

「何？」

「ちよつと聞きたいことがあるんですけど」

「うん、ちよつと待ってね」

「亜希子さん」は全く不審がる様子もなくファイルを閉じて受付から出てきてくれた。

よかった。どうやら正解のようだ。

「どうかした？」

「いえ、たいしたことじゃないんです。お忙しいのにすみません」

「ううん、いいよ。院長先生の娘さんの呼び出しなんだから最優先よ」

なんだ・・・もっとお堅い人かと思ってたのに、案外気さくじゃない。

私はホッとして、早速本題に入ることにした。

「亜希子さん。お子さん元気ですか？」

「え？あ、うん、」

「亜希子さんは？」

「元気、だけど？」

亜希子さんが、それがどうかしたの？という表情になる。

「何か変わったこととか、困ってることってありませんか？」
「特に・・・ないけど」

・・・うーん。なんだろう。なんかちょっとぎこちない。
確かに唐突な質問ではあるけど、何か隠している感じがする。

ここは直球勝負の方がいいかもしれない。

亜希子さんは取り繕うように笑顔で訊ねてきた。

「どうしてそんなこと急に聞くの？」

「柵木君から、亜希子さんと子供の様子を教えてくれって電話があったからです」

「え・・・柵木君って・・・」
「柵木湊君です」

亜希子さんが固まる。久しぶりの、そして予想外の名前に戸惑っているみたいだ。

「柵木君、私と一緒に来年高校卒業だから、日本に帰ってくるみたいなんです。

だからきつとその前に、亜希子さんと子供の状況を知りたいんだと思います」

「・・・そう・・・。桜子ちゃん、子供の父親が湊君だって気付いてたんだ」

「もちろんです」

亜希子さんは「そっか」と言って曖昧に頷いた。

本当に偶然なのだけど、亜希子さんはうちの病院で出産し、その後子育てをしながらうちの受付で働いてくれている。そこでバツリ会った時はお互い驚いたものだ。
ただどそれだけだった。

中・高時代、同じ寮で生活してはいたもののほとんど話した事のない私たちは、院長の娘と受付という関係になっても、先生と受付という関係になっても、特に親しくはならなかった。

それでも柵木君という存在を介して、私は亜希子さんのことを少しは知っていた。

柵木君は高校卒業後に帰国して、すぐに亜希子さんと結婚し3人で暮らし始めた。

でも2人の結婚生活は長くは続かなかった。

柵木君は本当はアメリカの大学に進んでアメリカで働きたかったのだ。それを我慢して亜希子さんと子供の為に帰国し、日本の大学に通った。一方亜希子さんも、生活の為にうちで働き続けた。

離婚はお互いの無理や我慢の末の当然の結果だったのかもしれない。

私は2人を見ていて思ったものだ。

どんなに好き合っているにしても、ちよつとのすれ違いでダメになる。結婚に恋愛感情なんて必要ない。そんなものがあると返って厄介だ。だったら私と聖はある意味「良い夫婦」になるかもしれない。

その後、柵木君はアメリカに戻り、

亜希子さんは子供と実家に帰って私が28歳になるまでずっとうちの受付にいる。

そんな結末を知っているだけに、柵木君からの「お願い」には気が進まない。

亜希子さんが唐突に話を変えた。

「桜子ちゃんて、今受験生よね？」

「はい」

「じゃあ忙しいとは思っただけど・・・ちよつとうちに遊びに来ない？」

「え？」

正直、そんな時間はない。特に今の私には。

ただどいつになく真剣な亜希子さんに、私は頷くしかなかった。

第2部 第9話

私は一旦実家に戻って、亜希子さんの仕事が終わる時間まで勉強した。

そして午後5時15分。再び病院へ行くと、亜希子さんはきちんと定時で上がって私を待っていた。

いつもは一番最後まで残って仕事しているのに珍しい。

私服姿の亜希子さんはいつもと違って見えた。

私の知っている亜希子さんと言えば、海光が受付の制服姿だけだ。こうやって私服姿を見るのは初めてかもしれない。お洒落とは言い難いけど、結構身なりには気を使っているらしく、スタンダードなだけ品の良い物を着ている。若干アンバランスなのはペタンコの靴。「お母さん」らしい。

私と亜希子さんは病院の前にある停留所に来たバスに乗り込んだ。窓から差し込む丸いオレンジの夕日が眩しい。ちよつと前まで午後5時なんてまだ明るくて暑かったのに、もうすっかり秋の空だ。

亜希子さんはそんな夕暮れを眺めながら呟いた。

「私、桜子ちゃんには感謝してるの」

「感謝？」

「うん。桜子ちゃんは覚えてないかもしれないけど、

私が海光を退寮する日、桜子ちゃん、私に『私、小倉先輩のこと応援しています。頑張って元気な赤ちゃんを産んでください』って声かけてくれたの」

「・・・」

覚えている。だって、凄く勇気がいったもの。

私はちよつと赤くなつて亜希子さんに頷いて見せた。

あれは「戻つた」時のことではなく、それよりも前の私が高1のクリスマスぐらいだったと思う。

3学期の授業がない高3は2学期が終わると退寮する。ちょうどその頃柵木君の留学が決まり、1人大きなお腹を抱えている亜希子さんに――当時は全く話したことなかったけど――どうしても一言「頑張ってください」と言いたくて、勇気を振り絞つて声をかけたのだ。

後から「なんて自分らしくないことをしたのだろう」と恥ずかしくなつたけど、今思えばこれから出産しようとしている人に「頑張つて」と言うなんて、すごく当たり前で自然なことだ。どうして私はそんなことにすら戸惑っていたのだろう。

そう思えるようになったのは、なんでも思ったことをサラッと口にするノエルの影響だろうか。

「桜子ちゃんのあの一言で私、凄く励まされたの。私のことを知らなくても、こつやつて応援してくれている人がいるんだって思えて・・ああ、1人じゃないんだなつて思つた」

「亜希子さん・・・」

「本当はね、1人で子供を産むのは凄く怖かつたの。だけど桜子ちゃんのお陰で気が楽になつた」

私は笑顔の亜希子さんを見て、胸が熱くなつた。

あんな一言で、亜希子さんは少し救われたんだ・・・。勇気を出してよかった。

ほんのちよつとの勇気が誰かの為になることがある。
ほんのちよつとの勇気でも、それが集まれば大きな力になる。

そんな当たり前のことを私は分かっていなかった。

私は今までどれだけの「ほんのちよつとの勇気」をサボってきたのだろう。

でも亜希子さん、どうして急にそんな昔の話を・・・？

なんだろう。昔、何かあった気がする。

亜希子さんの子供に関する何かが。

「実は私、子供を産んだ時にお見舞いに来てくれた月島君に、そのことを話したんだ」

「え・・・ノエルに？」

朝は私が急に柵木君の名前を出して亜希子さんをビックリさせたけど、今度は私がビックリさせられる番だ。

胸の熱さに痛みが少し加わる。

亜希子さんは、私とノエルが付き合ってたって知ってるんだ。だけどきつとまだ、別れたことは知らないだろう。

私はそのことを言うべきかどうか少し悩んだけど、今は話をそらさない事にした。

「ノエルなんて言っていました？」

「本竜先輩って冷たそうに見えるけど、そんなことするんですね、意外です。って」

あのね。

「これは私の勝手な想像だけど、月島君が桜子ちゃんを本格的に気にしだしたのってそれからだと思うの」

「じゃあノエルは、私が亜希子さんに『頑張れ』って言ったのを知って、私を好きになったってことですか？」

「多分ね」

「・・・案外単純なんですね、ノエルって」

「ふふ。そうね。男の子って単純よね」

亜希子さんはちよつと含みを持たせて「男の子」と言った。

ノエルも男の子。柵木君も男の子。確か亜希子さんの子供も男の子だ。

バスが止まる。

亜希子さんは「着いたよ」と言って立ち上がった。

バス停から徒歩5分くらいのところにある亜希子さんの実家は、ごく普通の一軒屋だった。

玄関先や庭に、柔らかそうなサッカーボールや三輪車が置いてあるのが微笑ましい。

「今いくつなんですか？」

「1歳半。やっとよちよち歩きができるようになったの。目が離せなくて困るわ」

そう言いながらも、亜希子さんは全然困った様子は無い。

病院で色んな親を見てるから分かるけど、親ってこういうもんだよ

ね。

でも実は私は子供が好きじゃない。だからうちの小児科ではなく産婦人科の医者になっただけなんだ。

だって子供って話も理論も通じないし、一緒に遊んでも楽しくない子供がおままごととかを楽しんでいるのは当然なのかもしれないけど、そんな子供と一緒に楽しそうにおままごとをしている大人は、私には理解できない。

だから、子供のいる家にこうやって来るのって少し緊張する……んだけど、

「うわ！」

私はリビングに一歩足を踏み入れて、思わず叫んだ。

「す、凄い！」

「散らかっててごめんね」

「い、いえ、そういう問題じゃ……」

お世辞じゃない。本当にそういう問題じゃない。これはどう片付けでも綺麗にはならないだろう。

それほど大量のおもちやがリビングに所狭しと並べられている。

「凄いですね……」

私のもう一度そう言うと、亜希子さんは苦笑いした。

「この前、月島君と桜子ちゃん一緒に遊びに来てくれたじゃない？その時私が月島君に、うちはあんまりおもちゃがなくてって言った

ら、1週間後に大量におもちゃを持ってきてくれたの」

「おもちゃ？」

「うん。月島君のお父さんがおもちゃのメーカーで働いてるらしくて、発売前のおもちゃなんかもあって、大喜びよ。・・・あれ？どこにいったのかな？」

亜希子さんが部屋の中を見渡す。

そうか。ノエルは柵木君の代わりに亜希子さんと子供の様子を時々見に来てるんだ。

私もそれに同行したことがあって、亜希子さんとも仲良くなった、ということらしい。

やっぱりノエルは私に色んな影響を及ぼしている。

でも、柵木君がわざわざ私に亜希子さんと子供の様子を教えて欲しいとお願いしてくるということは、ノエルは柵木君に亜希子さんたちのことを話してないということだ。

私と別れたことはメールするくせに、どうしてこんな肝心なことを教えてあげないんだろう。

と。

突然、布でできた絵本の山がもこつと動いた。

ギョツとして思わず一歩さがると、絵本の山はまるで噴火の如く飛び散り、

中からはマグマ、じゃない、小さな物体が飛び出してきた。

そしてそれはそのまま亜希子さんの足目掛けてすっ飛んでくる。

亜希子さんは「もう」と言ってそれを抱き上げた。

「ほら、奏、^{かなで}桜子ちゃんよ。前遊びに来てくれたでしょ？」

亜希子さんの腕の中から黒目勝ちな2つの瞳がじーっと私を見つめた。

誰このオバチャン、もとい、お姉ちゃん、とても思っているんだろ
うか。

私もじーっとその瞳を見つめ返す。

全体的な雰囲気は亜希子さん譲りだけど、この目は間違いなく柵木君だ。柵木君そのものだ。

私は更にその「奏君」を見つめた。

なんか・・・こうやって見ていると、子供って面白い形をしてるなって改めて思う。

身体に比べて頭がやたらと大きくて、更にその中の瞳も大きくて。ただその頭を支えている首は驚くほど細く、オムツ付きのぽこっとしたお尻と短い足は、ユーモアさえ感じる。

さっきの「話も理論も通じない」のに加えて「面白い形をしている」ことから、「子供」は人間ではない何か別の生物だ、というのが私の持論だ。

だけど、黙って私を見つめる「別生物」はなんだかとても興味深くて、なんだかとても・・・柔らかそうだ。

私と奏君はそれからしばらく無言のまま見つめ合っていた。

第2部 第10話

一目で奏君の虜になった、とまではいかないものの、普通の子供と違ってしずかに黙々と一つのおもちゃに集中して遊ぶ奏君は、私の目には好感度高く映った。

この子は間違いなく柵木君の子供だけど、なんだか将来ノエルみたいな大人になりそうな気がするからかもしれない。

「それにしてもほんと、凄い量のおもちゃですね」

「ね？おもちゃ屋さんが開けそう。月島君もさすがに手じゃ持ってこれないから、おうちの人に頼んで車で持ってきてくれたの」
「へー」

ノエルのお父さんがおもちゃメーカーで働いてるなんて知らなかった。

ううん、知っていたのかもしれないけど、今の私は知らない。

・・・この1年3ヶ月、きつとすごく楽しかったんだろうな。

どうして神様はそんな一番楽しい時期を私から取り上げたんだろう・・・。

亜希子さんが、かろうじてスペースが確保されているソファに座ったまま足元に転がる新品のゲーム機を取り上げた。

「まだ1歳半だからかもしれないけど、こういうおもちゃには見向きもしないの。ずっと同じパズルとか絵本とかばかりで遊んでる」
「子供って気に入ったおもちゃがあれば、ずっとそれで遊びますもんね」

「よく知ってるね、桜子ちゃん」

「うち、小児科もありますから。子供なら見慣れています」

「あ・・・ふふふ、そうよね」

亜希子さんは笑いながら、亜希子さんのお母さんが入れてくれたコーヒーを飲んだ。

だけど確かに、奏君の集中力は大したものだ。既に30分以上黙々と同じ絵本を繰り返し見ている。

時々「うー」とか「あー」とか言うのが、まるで大人が難しい本を読みながら「うーん」と唸っているみたいに見えて、なんだかおかしい。

私は深く考えずに、思ったことをそのまま口にした。
すると、とたんに亜希子さんの表情が凍りついた。

「・・・やつぱりそう思う?」

「え?そうって?」

「奏、極端に口数が少ないの。これくらいの月齢になると普通は『わんわん』くらいは言えるのに、奏は『うー、あー』ばかり。それもかなり少ないし」

「・・・」

「こないだ1歳半検診に行ってきたんだけど医者さん曰く、話そうという意志が全く感じられないんだって。普通は話したくて話したくて仕方がない時期だから、いろんな言葉や音が出てくるものなのに、って」

「それって、耳が・・・」

「ううん。耳は聞こえてる。奏!」

亜希子さんが奏君に呼びかけると、奏君は絵本から顔を上げて亜希子さんを見、一丁前に口の端でニツと笑った。どうやら聞こえてはいるらしい。

「もしかしたら、声帯に問題があるのかもしれない。もしくは……精神的なものか」

「失語症みたいなのですか？」

「うん。奏には父親がいらないから、それが私の思っている以上に奏にはストレスになってるのかもしれない」

失語症。耳は聞こえるし声帯にも問題がないけど、精神的ストレスから声を出せなくなる病気だ。

あんまり知られていないけど、結構子供にも多い。

でも、まだロクに話せない赤ちゃんにも発症するものなのだろうか。

「うちのパパに……」

「うん。一度見てもらおうと思ってる。でももしかしたら精神科とかに行った方がいいのかもね」

「……あつ」

「なに？」

「い、いえ」

私は亜希子さんから表情を隠すために、慌ててコーヒを飲んだ。

思い出した。

私、柵木君から「先輩と子供の様子を調べてくれ」と言われたことがある。

昨日ではなく、10年前に。

あの「お願い」は、この戻ってきた世界だけのことじゃなかったんだ。

28歳の私から見て10年前、私はアメリカの柵木君からの「お願い」にその場で応えた。

「だって先輩、うちの病院で受付やってるもの」

「ええ！？そうなのか？」

「うん。私はまともに話したことないけど、元気そうだよ」

「・・・子供は？」

「見たことないなあ。あ、だけどこの前看護師たちが噂してるのは聞いた」

「なんて？」

「なんだったかなあ。確か何かの病気かもしれない、みたいなこと言ってたけどよくわかんない。

ただの風邪とかかもしれないし」

そんな会話をした気がする。

そうだ。私は亜希子さんの子供が病気かもしれないというのを知っていたんだ。どうして今まで忘れてたんだろう・・・それに、どうして奏君の様態を全く気に留めなかったんだろう。

その後柵木君が帰国して亜希子さんと結婚し、日本にいたのは1年くらいだけど、その間に1回くらいは私も柵木君と会ったと思う。だけど柵木君から子供の話は出なかったし、私も聞こうとしなかった。

柵木君は家庭が上手くいってなかったから家族の話をしなくなかったのかもしれないけど、私はただ単に「子供」という存在に興味がなかったし、病気の噂も忘れていた。

だから・・・奏君が話せるのか話せないのか、28歳の私は知らない。

亜希子さんはうちで10年以上も働いてるのに・・・なんて無関心なんだろう、私。

つくづく自分に呆れてしまう。

「ごめんね、亜希子さん」

教えてあげられなくて。

「え？何が？」

「ううん、何でもありません。．．．もしかして、このことを柵木君に伝えて欲しくて、私を家につれてきたんですか？」

亜希子さんは立ち上がり、絵本を読みふけっている奏君の隣にいて頭をなでた。

「逆よ。黙っていて欲しいの。桜子ちゃんにはちゃんと事実を伝えたくて黙っててっってお願ひした方がいいと思つて」

「え？話しちゃいけないんですか？どうして？」

「だってこんなこと知ったら、湊君、飛んで帰ってきそつたもの」
「．．．」

「湊君ね、アメリカに行く前私に『死ぬほど頑張ってくる』って言つてたの。だから中途半端に帰ってきて欲しくない。自分がやりたいことをとことんやって欲しいの」

確かに柵木君は帰ってきた。

だけでもしかしてそれは、私が軽い考えで奏君の病氣のことを話したからなのだろうか。

もしかして私が余計なことを言わなければ、柵木君は高校卒業後もアメリカにいたのだろうか。

でも、もしそうだとしたら、亜希子さんと奏君はずっと柵木君とは会えないことになる。

「柵木君に会いたくないんですか？」

思い切って訊ねてみると、亜希子さんはまるで自分に言い聞かせるかのようにこう言った。

「どうかな・・・会いたくないと言えば嘘になる。でも湊君に自分の意志を曲げてまで会いにきて欲しいとは思わない。自分のやりたいことを我慢している湊君なんて湊君らしくないもの。それならいっそ会えなくても『湊君はやりたいことを思い切りやってるんだ』って思ってる方が私は幸せ。奏の言葉のことも、私がもつとしつかりした母親になればなんとかなると思うの」

・・・本当は亜希子さんは柵木君に会いたいんだ。でも、今はそうしない方が柵木君のためになると思ってる。そして柵木君のためになることこそが、亜希子さんの望みなんだ。

ノエルはそれを分かっているから、柵木君に亜希子さんのことを話してない。

きっと亜希子さんにも柵木君のことを話してない。

その代わりに自分が2人のことを心配して見ている。

昔の私は知らず知らのうちに、そんなノエルの想いを台無しにしたんだ。

「分かりました」

私もソファから立ち上がり、奏君の傍に行った。

奏君は母親の心配など露知らずといった感じで相変わらず絵本に集中している。

これは医者として思うのだけど、奏君はストレスを抱えているよう

には見えない。ストレス下にある人間は、子供に限らず集中力を発揮できないものだ。

奏君は亜希子さんと亜希子さんのご両親から、十分な愛情を受けているのだろう。もし本当に話せないのなら、それは精神的な問題ではなく肉体的な問題に違いない。

それを亜希子さんに伝えてあげられない代わりに、私は言った。

「柵木君には奏君の言葉のことは言わずに、2人とも元気だとだけ伝えておきます。・・・奏君、何ともないといいですね」

「うん、ありがとう。ついでに『パパなんていなくても全然平気みたい』って言つたいて。

シングルマザー友達もいて、結構楽しいのよ、ほんとに」

悪戯っ子っぽくそう言って笑う亜希子さんは、とても遅しく、そして優しかった。

第2部 第11話

「じゃあ、2人とも元気なんだな」

電話の向こうでほっとした声がする。

「うん」

「無理言って悪かったな。ありがと。直接話した？」

「ううん、先輩は私のことなんて知らないから、遠くから様子を見ただけ」

嘘ついてごめんね、柵木君。でも、亜希子さんがうちの病院で働いてるなんて知ったら、柵木君はきつともっと色々聞きたくなるだろうから。

「父親なんていなくても全然平気、って感じだった」

「・・・そっか」

「そうだよ。だから柵木君は2人のことなんて気にせず、自分のやりたいことすればいいのよ。やりたいことを我慢している柵木君なんて柵木君らしくない」

「・・・」

柵木君は何も言わない。でもその沈黙から、少しの落胆と大きな期待を感じ取れる。

少ししてから柵木君がボソツと言った。

「・・・本当に・・・俺がいなくても大丈夫かな」

「うん、きつと大丈夫」

「実はさ、俺、アメリカの企業からうちに来ないかって言われてるんだ」

柵木君が控えめな声で言う。

「正直やってみたいけど、そうなるという先輩と子供と一緒にさせるようになるか分からない。

だからそれよりも、早く日本に戻る方がいいかどうか悩んでた」

「そうなんだ」

「でも・・・そうだな。中途半端に日本に戻ったら、何のために先輩と別れてアメリカに来たか分かんないもんな」

「そうだよ。死ぬほど頑張るんでしょ？」

「え？」

あ。

「そ、それくらいの覚悟でアメリカに行ったんでしょ？」

「ああ」

「だったら！とことんやりなよ！今日本に帰ってきてても、我慢が募るだけでいいことないよ！」

結局離婚することになっちゃうんだから！

「うん・・・あのさ、先輩って誰かと結婚したりしないよな？」

「ええ？それはないよ！」

「なんで分かるんだよ？」

「それは・・・」

分かるよ。亜希子さんは今も柵木君のことを好きで応援している。だから柵木君に会えなくても、奏君と2人で頑張ってる。

柵木君にもそれを伝えたい。伝えられないのがもどかしい。

「お、女の勘ってやつよ！大丈夫、絶対先輩は他の人と結婚したりしないから。ずっと柵木君を待っていてくれるよ。だから、柵木君はアメリカで頑張って」

「・・・分かった。なんでか今日の本竜には説得力があるから、本竜を信じてアメリカでやれるだけやってみるよ」

「私じゃなくて先輩を信じて」

「はは、それもそうだな」

ようやく柵木君の声にいつもの明るさと元気良さが戻ってきた。

一方で私はそんな柵木君の声を聞いているうちに不思議な気分になった。

さっき私が柵木君に言った「やりたいことを我慢している柵木君なんて柵木君らしくない」という言葉は亜希子さんが言っていた言葉そのままだ。

だけどそれは亜希子さんの想いであり、私の想いでもある。ただしその対象は柵木君ではなく・・・

夏休みに入ってすぐ聖の劇を見に行った時、私は同じことを聖に対して思った。

聖に頑張ってほしいと、応援したいと、思った。

亜希子さんから柵木君への想い、
私から聖への想い、
どちらも同じだ。

同じだけど決定的に違うのは、そこに愛情があるかどうかだ。

私は聖のことを好きじゃない。

ただ応援しているだけ。

ただ聖に演劇を続けて欲しいだけ。

ただ聖にやりたいことをやっていて欲しいだけ。

その方が私にも都合がいいから。

・・・まあ、仮面夫婦とは言え6年も連れ添ってきたのだから、愛情ではないけど少しの情くらいはある。聖には不幸になるより幸せになって欲しい。それだけだ。

私が黙っていると、悩みを吹っ切れたからか柵木君がわざと上から目線で言う。

「本竜も受験、頑張れよ」

「うん」

「んで、22歳の誕生日にニューヨークに来いよ。月島との涙の再会をこっそり見てやる」

「悪趣味ね。って、ノエル、そんなことまで柵木君に言っただよ？」

「おー。あいつ、サラッとのろけてくれるんだよな。こっちは1人で頑張ってるってのに。」

本竜と別れることになったのも天罰だったの。・・・そーいや、本竜はどうして月島を振ったんだよ？月島に聞いても『人の傷口をえぐるなんて、湊さんって人でなしですよね』とか言っってはぐらかすし。人のこと言えんのかって感じだけど」

「それは・・・内緒」

だって私にも分からないんだもの。

ノエルは「1年以上も付き合ってきて、今更そんなこと言うんだな」と言った。

私はどんな「今更」なことを言ったんだろう。

シズちゃんに聞いてみたけど心当たりがないと言うし、ノエルに直接聞くなんてことはさすがにできない。

ほんのちよつと「柵木君が知ってたりして」なんて淡い期待もしてたけど、どうやらそう上手くはいかないようだ。

それからしばらく柵木君と世間話をしていると、タイミング良くアルバイトからシズちゃんが帰ってきた。楽しそうに電話している私を見て「もしかして月島君ですか？」と聞いてくるので「柵木君だよ」と答えると・・・

「柵木君？あぁ、彼女を妊娠させたくせに1人で勝手に海外行っちゃった人ですよ」

「こ、声が大きいよ、シズちゃん！柵木君に聞こえちゃう！」

私は慌てて電話口を手で押さえた。

が、シズちゃんのはわざとかわざとじゃないのか、「あれー？そうですかあ？」とか言ってますとぼけてるし。

電話越しからは「おい、今しゃべってたの誰だ」とか言う柵木君の怒った声が聞こえてくるし。

私はなんだか良く分からないけど携帯を耳にあてたままお腹を抱えて笑った。

今の受験勉強は10年前の受験勉強より過酷だ。

ノエルとも理不尽な別れ方をした。

それなのにどうして私はこんなに笑っているんだろう。

こんなこと、10年前には一度もなかったのに。

桜子。あなた、もったいない人生を歩んできたのね。

だけど今私がたくさん笑って、少しだけそれを取り返してあげるから。

私は柵木君とシズちゃんが呆れるほど、笑い続けた。

第3部 第1話

「きゃっ」

足が絡まり、転びそうになる。当たり前だ。自分は寝てると思っていたのに——実際「自分は寝てる」と思いながら寝てた訳じゃないけど——いきなり歩いてたのだから。ただ転ばずにすんだのは、大きな手が私の腕をグイッと引っ張ってくれたお陰だ。

「おい、何やってるんだよ？大丈夫か？」

「あ……ごめ……」

誰？

私の腕を掴んでいるのは、背の高い男の子だった。見覚えがあるような気もする。

そして、今度はすぐに分かった。

私、また「飛んだ」んだ。

ただど3回目ともなると慣れたもので、私は落ち着いて情報収集することができた。

広い敷地に行き交う若者と自転車。車は通っていない。それに5階建てくらいの建物が点在している。

ここは、雰囲気からして多分大学だ。どこの大学か分からないけど、見たことがないから以前私が通っていた私立大学ではない。C大だろうか。

季節は春か秋……いや、春。みんな薄手の長袖やコートを着てい

て、その色が薄いピンクや青、それに白が多いから。

私は自分の服を見た。

私も例に漏れず、白のブラウスにプリーツの多い青のスカート、パンプスという格好だ。

目の前の建物に時計がついている。長針はてっぺんで短針は「3」。午後3時か。

「おいってば。何キヨロキヨロしてるんだよ、桜子」

右上からさつきと同じ声がした。

背の高い男の子が呆れたように私を見下ろしている。改めてよく見ると、かなりかつこいい男の子だ。やっぱり見覚えがある。誰だっけ？

それに、「桜子」って・・・。

もしかしてこの男の子、私の恋人？

じゃあノエルは？

・・・ノエル！

私は青ざめた。

まだ肝心なことが分かってない。

私、今何歳なんだろう？

私とノエルの再会の約束は22歳の誕生日だ。

もし、それが過ぎていたら・・・！

「ねえ！私の歳って知ってる！？」

「はあ？」

腕を振り払い、逆にいきなり両手で掴みかかった私に男の子が驚いて一歩退く。

「何、訳のわからないことを、」

「いいから！教えて！」

「・・・たくつ、なんなんだよ・・・。俺と同年だから21歳に決まってるだろ」

「今、何月！？」

「・・・5月」

5月。21歳の5月。

17歳の秋からだから3年7ヶ月ほど飛んだことになる。

ノエルとの約束は私の22歳の誕生日だから・・・

「~~~~よかった~~~~、後10ヶ月ある・・・」

「は？何が？」

「私、今、大学4年生？」

「・・・そうだけど」

「C大？」

「・・・桜子、お前、頭大丈夫か？」

「C大？」

「・・・」

男の子はため息をついて自分が着ている白衣の胸元を指差した。
名刺大のカードがついている。

『C大学医学部学生用 附属病院立ち入り許可書』

「大学医学部！やっぱりここ、Ｃ大なんだ！」

「じゃあ私、Ｃ大医学部に受かったの！？」

「すごい、私！！！」

「勉強しまくった甲斐があつたわ！」

「・・・って、ん？白衣？じゃあ、この男の子も・・・」

「桜子の胸にも、同じのが付いてるだろ」

「え？」

よく見ると私も白衣を着ていた。前を開いていたからさつきは白衣の下で私服しか目に入らなかつたらしい。

白衣の左胸の上には、確かに男の子と同じ許可書が付いている。

その時、ようやく私の頭の中の点と点が線で結ばれた。

「あ！あなた、もしかして１８０センチさん？」

「はい？」

思い出した！高３の夏休みにＣ大模試を受けた時、駅でぶつかった１８０センチさんだ！

あの時より大人っぽくなってたから全然気付かなかった！

それにあの時はもっと爽やかなイメージだったような気がするけど・

・まあ、いいか。

「うわー、あなたも受かったんだ！おめでとう！」

「・・・」

「あ、ごめんね。３年も前の話だもんね。意味分かんないよね」

「桜子。病院戻って精神科の先生に見てもらうか？」

「気にしないで。あ、ねえ、『戻って』ってことは、今病院での実地授業が終わったところ？」

180センチさんがため息をつく。

初めて「飛んだ」時のノエルを思い出すなあ。

・・・ノエル。

今何をしてるんだろう。

私が21歳ということは、ノエルは18歳、大学1年だ。

どこの大学に行ってるんだろう・・・私がC大にいることは知っているんだろうか？

私がぼんやりと立ち尽くしていると、180センチさんは自分の腕から私の手を取った。

「桜子のこと心配だけど、悪い、俺今から約束があるから」

「あ、うん」

デート？と聞きたかったけど、万一私が180センチさんの彼女だとしたら嫌味以外の何物でもなくなるので、控える。

「じゃあな。明日、4時に校門のところで待ってるから」

「え、あ、う、うん」

180センチさんはそれだけ言うと、長い足で颯爽と歩いていった。

えっと。

え？ちよつと待って。「明日、4時に校門」って何？

私、あなたの何なの？

これからどうしたらいいのよ？
こんな状態で放置しないでよ！

私は、どう考えても180センチさんに罪はないのに、心の中で180センチさんに文句を言いながらその高い後姿を追いかけた。

180センチさんは大学構内をつつきりどん大学奥（と思われる方向）へと進んでいく。私は180センチさんを見失わないように、だけど見つからない距離を保ちつつ小走りする。だって一歩一歩の歩幅が違うから普通に歩いていたらどんどん離れていつてしまう。

それでも私は目の端で大学の様子を観察した。

みんな何の時間に追われることもなく、
何に縛られることもなく、
ゆったりとしたペースで歩いている。

だけどその歩調の中には、自由と希望に混じって少しの不安が時折見え隠れする。

懐かしいな、この感じ。

大学生という時間は特別だ。

大学生は小学生みたいに親に縛られることはない。
中学生や高校生みたいに学校や勉強に縛られることもない。
社会人みたいに仕事に縛られることもない。

好きな勉強をして、好きな遊びをできる。

バイトをしてお金をためれば、旅行だってできる。

いつだってどこにだっていける。

ただし、自分の将来への責任という重いリュックを背負って。

どうして子供というのはあんなに無邪気に「将来の夢」を語り、それに対して何の努力もしていないことに不安を覚えることなく、毎日楽しく過ごせるのだろう。

私は医者になって家を継ぐということが決まっていたから他の大学生より自分の将来への不安はだいぶ小さかったと思う。そんな私でさえ、日本の将来への漠然とした不安や、老後にちゃんと年金をもらせるんだろつかという小さな不安——歳を取るにつれてこれは次第に大きくなっていくんだろうけど——を常に抱えていた。

就職が決まらない学生の不安は半端ではないだろう。

そんな不安を一生懸命隠すかのように明るく笑っているように見える学生達が、足早に構内を駆け抜ける180センチさんとすれ違うと、誰もがみんな素の表情になって振り返る。そこにあるのは、類まれなる容姿を持ち、医者という将来を保証された男の子に対する羨望と嫉妬。

だけど180センチさんはそんな視線などどこ吹く風ですんずん歩いている。

そして私はそこに、ある種の「諦め」があるように感じた。

第3部 第2話

180センチさんは、構内の中でも他とは雰囲気の違いの一角へと入っていった。

そこはまるで、そこだけ時間の流れが止まっているかのように穏やかな空間で、樹木や芝の手入れも行き届いており、寝そべって本を読んでいる生徒もいる。

その芝の端に立てられている矢印型の白い看板を見ると「文学部」とあった。

なるほど。文学部ってちょっと独特の雰囲気があるもんね（医学部も人のことは言えないけど）。

だけど医学部の180センチさんが文学部に一体なんの用だろう。

重厚感漂うレンガ造りの建物の入り口の前で輪になっている女の子数人が、180センチさんを見つけて「あ、来た」という感じで笑顔になる。中には明らかにうっとりしている子もいる。

私は「文学部」の看板の所で足を止め、その様子を伺った。

女の子の一人が、別の小さな女の子の腕をつつく。

つつかれた女の子は、ポツと頬を染めてはにかんだような笑顔になり、他の女の子たちに小さく手を振って輪から出た。

そして180センチさんの方へ向かう。

すると180センチさんは・・・なんだかムスツとした表情になって足を止め、女の子が近づいてくるとクルッと踵を返し、元来た方向へと戻り始めた。ただどさっきより明らかに歩幅が小さくなって

いる。

女の子は小さな歩幅でチヨコチヨコと一生懸命180センチさんを追いかけて、やがて二人の歩幅はぴったりと重なった。

私はそれを見て、デジャブにとらわれた。

似てる。私とノエルに。

私たちもあやって同じ歩幅で並んで歩いたことがある。

また少し胸苦しさが戻ってきた。

180センチさんは相変わらず少し不機嫌そうな表情で、それとは対照的に女の子の方はニコニコしている。しかも言っちゃ悪いけど、女の子は小さくてぱちゃっとしていて、愛嬌はあるけどお世辞にも美人だとは言えない。

普通に考えれば180センチさんの隣にいるようなタイプの女の子じゃない。

それなのになんなのだろう、このお似合いな雰囲気は。

二人が恋人同士なのは一目瞭然だ。

いや、恋人同士なんて表現じゃ二人の雰囲気は言い表せない。

お互い相手のことを分かりつくして、無駄なラブラブ感や甘い言葉は必要なく、相手が本当に欲しい言葉・物を「欲しい」と言われる前にさっと差し出すことができる・・・そんな関係。

まるで夫婦のように。

・・・ああ、そうか。

さっき私が１８０センチさんに見た「諦め」はこれだったんだ。

自分にはこの人しかないない、

この人以外は有り得ない、

いずれこの人と結婚するんだ、

そんな幸せな「諦め」。

私もずっと諦めていた。

だけどそれは決して幸せなものではなく、親の後を継いで医者になり、親の言う通り聖と結婚しなくてはいけないという単なる「諦め」だった。

でも時間を遡りノエルと出会って、諦めたくなかった。

別の人生を歩めるかもしれない、私だって幸せになれるかもしれない、そう思えた。

だから諦めたくない。

私もいつか、あの１８０センチさん達のようにになりたい。

私は無性にノエルに会いたくなり、ノエルがいるはずもないのに何故か夢中で辺りを見回した。

そしてこの時ようやく、自分が肩に青いトートバックをかけていることに気が付いた。

・・・そうだ、携帯！

もはや１８０センチさんが彼女と一緒に大学を出ようとしていることなど目にも入らず、その場で鞆を漁る。

あつた！

高校の頃から考えると進化しているけど、28歳の私からすると随分古めかしい携帯を開き、「月島」とか「ノエル」で検索してみる。だけどノエルと思われるアドレスは見つからない。

もしかしたらまだ携帯を持ってないのかな。

それとも・・・全く連絡を取り合っていないのだろうか。

そうだとしても、おかしくはないけど・・・。

がっかりして携帯を鞆に戻すと、今度はそこに手帳が入ってることに気が付いた。

B5サイズくらいの黒い皮の手帳だ。スケジュール帳だろうか。

そう思っただけで何気なくパラパラめくってみると、案の定それは何の変哲もないスケジュール帳ではあったけど、最後の方のメモページに面白いものを見つけた。

住所録・・・というか、人物紹介だ。

最初は「本竜桜子」。

実家の住所、電話番号、携帯の番号。備考欄には「現在C大医学部4年生。実家で暮らしてる」とある。どうやら今日の寢床は確保できたらしい。ありがとう、私。

次は「小島静江」、括弧して（シズちゃん）とある。

さっきと同じく住所と携帯。備考によると県外にある大学に進学しているらしい。

2番目にシズちゃんの名前が登場するということは、今も親交が続いているのかなと思い、ちょっと嬉しくなった。後で連絡してみよう。

3番目には見慣れない名前が書いてあった。

「三浦翔」。

大学でできた友達だろうか。だけど男の子なんて・・・あ。慌てて備考欄を見る。

「180センチさん。呼び方は『三浦君』。C大医学部の同級生で、入学式の時に再会した。一見爽やかなタイプだけど、よくよく付き合ってみると私と一緒に猫を被っていることが発覚。本性は天邪鬼な『俺様』。気が合うので大学では一番の友達。文学部に高校時代から付き合っている彼女がいるけど、恥ずかしいのか紹介はしてくれず、面識なし」

ぷぷぷ。「私と一緒に猫を被っている」って。

なるほど、なるほど。それで初対面の時とイメージが違ってた訳ね。

私は一人でニヤニヤしながらメモページを読み進めていった。

残念ながらそこにノエルの名前はなかった。やっぱり連絡を取っていないようだ。

でも、あまり寂しくはない。

だってそこにはたくさんのお名前が載っている。大学でできた友達なのか私の知らない名前もあれば、海光の同級生のお名前もある。以前は話したこともないような生徒ばかりだ。しかもそのほとんどの人と今でも連絡を取り合っているらしい。

私、友達が増えたなあ。

前は友達と呼べる友達なんて、柵木君くらいしかいなかったのに。

その柵木君の名前は、一番下に一行空けて書いてあった。備考は何もないけれど、住所を見れば柵木君がまだアメリカにいたことが分かる。

良かった。

だけど、亜希子さんとはどうなったんだろう。

それに・・・

あ！そうだ！アレだ！

アレがあるはずだ！

私は「あの女、さっきまでニヤニヤしてたのに急に血相変えて走り出したぞ」という周囲の目を気にもせずに、大学の門を目指して全力疾走した。

そしてその途中、180センチさんこと三浦君カップルを追い越した時に目を丸くされるといっておまけがついてきた。

第3部 第3話

「ただいま」も言わずに実家に飛び込み、階段を駆け上がる。その真ん中あたりで下から聞こえてきた「桜子？帰ったの？」というママの声に、「うん」とおざなりな返事をして自分の部屋に入ると、勉強机の上に見覚えのある分厚い本が2冊置かれているのが見えた。

日記帳だ。

高校3年の夏に飛んだ時、自分がどんな1年3ヶ月を過ごし、どうしてノエルと別れる決心をしたのか分からず、私は悩んだ。だからあれから毎日日記帳をつけることにしたのだ。

高3の秋の時点では日記帳はまだ1冊目だったから、2冊あるということはその習慣は今も続いている・・・と、思いたい。

ページが擦り切れている古い日記帳の方を手にとると、ところどころにポストイットが挟んであった。全部を読むには時間がかかるから、まずココロを読め、ということなのだろう。

さっきの「人物紹介」に加え、これまたご親切にありがとう、私。助かるわ。

私は立つたまま日記帳を開いた。

最初のポストイットは比較的初めの方にあった。そしてそれこそが、私が全力疾走してきた目的だった。

日付は高3の11月2日。

「今日、亜希子さんが奏君をつれてパパのところに行くというので、私も実家に帰った。ところが亜希子さんが奏君の言葉のことをパパに相談する前に、なんと奏君が急に話し出した！しかも『わんわん』とか『にゃんにゃん』とかの所謂幼児語ではなく、『犬』『猫』というある意味かわいげのない言葉を。更に驚いたことに、亜希子さんが絵本を読み聞かせている時に覚えたのか『あ』という文字を指差してをちゃんと『あ』と言い、『い』を『い』と言う。50音のうち10音くらいだけど、こんなに賢い子供は初めて見た、とパパも驚いていた」

足の力が抜け、床にしゃがみ込む。

なんだ・・・良かった！奏君、話せないわけじゃなかったんだ！もう。心配して損した！きつと自分の中で言葉をストックして、話す機会をうかがっていたのね？

こういう子供は確かにたまにいる。全く話さないと思ったら、ある日突然ペラペラと話し出す子供が。

でも、たった1歳で、しかも文字まで認識してるなんて、本当にIQが高い。さすが海光の中でも特に頭の良い二人の間に生まれた子供、と言うべきか。

とにかく良かった。

私は椅子に座り、今度は落ち着いて次のポストイットのページに飛んだ。

翌年の3月。実にあっさりと「C大に合格した」と一言だけ書いてある。

そこからも数ヶ月に一度くらいのペースでポストイットが挟んであ

ったけど、私が「ええ!？」と思う内容の箇所は最初の奏君の話と
もう1つくらいで、あつという間に2冊目の最後のポストイットの
ページ——「今」から2ヶ月ほど前だ——に辿り着いた。なんて
波風のない人生なんだろう。

でも、考え方によつてはそれはそれで幸せな人生なのかもしれない。
波乱万丈な人生もいいけれど、私は穏やかな日々を送れる人生の方
がいい。

ところでその最後のポストイットのページというのが・・・

「今日は聖の劇を見てきた。初めての準主役だ。なかなか良かった」
・・・あ、そう。別にポストイット付けるような内容じゃなくない?
それともよっぽど劇が良かったんだろうか?それならもつとちゃんと
内容を書いてそうなものだけだ。

私は2冊目の日記帳を開けると1冊目の最初に戻った。

最初の方は「今」に飛ぶ前に私が書いたばかりなのに、ペンのイン
クが黄ばみがかっていてなんだか変な感じだ。

書いた記憶のある部分は飛ばして、柵木君に亜希子さんと奏君のこ
とを電話で話した翌日の日記から読み始める。今度は1ページずつ
じっくりと・・・、「ノエル」という文字を探すかのように。

ポストイットの箇所にはノエルことは何も書いていなかった。

ノエルのことなら、連絡を取ったというだけでもポストイット10
枚分の価値はあるだろう。それなのに、ノエルのポストイットは一
箇所もなかった。

それはつまり、この日記帳にはノエルのことが全く書かれていない

ということを意味する。

ううん、そんなことない、きつと一箇所くらいはノエルのことを書いているはずだ。

海光の卒業式の日にもエルと話した、とか、大学に受かった後に「おめでとう」って言うてくれたとか。ポストイットが剥がれてしまっているだけよ。

私はそう願いながら日記を読み進めた。

「桜子ちゃん、おはよう」

「・・・」

翌朝。寝不足の私の前に颯爽と現れたのは、とっても爽やかな――朝見るには目障りなほど眩しすぎる――笑顔の男の子だった。はつきりと「見覚えはない」と言い切れるけど、スケジュール帳にあった「人物紹介」から察するに、こいつは「千葉秀夫：医学部の2年先輩。何故か私につきまとうてくるうざいくらいに爽やかな男」だろう。

綺麗に撫で付けられテカテカしている髪や、パリッと糊の効いた白いズボンがいかにもどっかのお坊ちゃまって感じた。雰囲気は80年代のアイドル。生まれてくる時代を間違えたらしい。

私は直視するに耐えられないその「うざいくらいの爽やかさ」に目

を細めてわざと視界をぼやかしながら「おはようございます、千葉先輩」とかろうじて返した。

「今日は病院？」

「えっと」

昨日頭に叩き込んだスケジュール帳を必死に思い出す。今日は確か大学での講義だけだ。

「いえ。一日中授業です」

「そうか、残念だな。一緒に実習した後、昼ご飯を食べに行きたかったのに」

「千葉先輩。もうすぐ国家試験ですよ。頑張ってください」

私なんかには構ってくれなくていいですから。医師の国家試験は司法試験や公認会計士試験みたいに難しいけど、最近は合格率が下がってるんですよ？

「じゃあさ、夕ご飯はどう？この前オープンしたフレンチのお店が」
「~~~~~」

「~~~~~」からは千葉先輩は話しているのだけど私の脳に届かないから割愛しておこう。

手帳や日記に教えられるまでも無く、これは私の苦手なタイプだ。もちろん一緒に食事なんて行かない。特に今日の私は機嫌が悪い。

原因は昨日徹夜で読んだ日記帳。

その1冊目にはところどころ「ノエル」が登場した。ただしそれは

「ノエルに会った」「ノエルと話した」という内容ではなく、「ノエルに会いたい」「ノエルと話したい」といったものばかりだった。私はノエルと別れて以来、全くノエルと接触していないようだ。そしてついに2冊目には、「ノエル」という言葉さえ出てこなくなった。

つまり、私はノエルを懐かしむことすらなくなってしまったのだ。

その原因も、日記の中にあった。

いや、直接的に書かれていたわけじゃないけど、その行間から私は「私」のある想いを感じ取った。

それは決して認めたくないものだった。

だけどきつとこれこそが、私がノエルに別れを告げた理由なのだろう。

それなのに高3の夏に飛んできた私は、「やっぱりノエルと一緒にいたい」「別れたくない」なんて言ったりして・・・ノエル、どう思ったのかな・・・

私はお経のような千葉先輩の声をバックに、過去の自分の失態と認めたくない想いに押し潰されそうになった。

第3部 第4話

午後4時5分前。私が校門の前に行くと、三浦君は既にそこにいた。相変わらず人目を惹くかつこよさだけど、その表情は昨日よりも心なしか引き締まって見える。

「お待たせ」

「あ、ああ」

「行こうか」

「ああ」

私たちは並んで歩き出した。が、三浦君が歩幅の調整に苦労しているのが分かる。好き勝手に歩くとどんどん私より前に行ってしまうし、いつも彼女と歩いている歩幅だと逆に私が前に行ってしまうからだろう。そしてその付帯効果とでも言おうか、手と足が一緒に出てしまっている。

「ふふ。ガラにもなく緊張してるね」

ちよつとやそつとのことであがるようなタマじゃない、という三浦君のキャラクターは日記帳で把握済みだ。

「そんなこと・・・いや、うん、緊張するな。彼女の父親に会った時より遥かに緊張する」

「会ったことあるんだ？」

「家に送っていった時にちよつと挨拶しただけだけだな」

「父親の感触は？」

「上々。俺、外面の受けいいから」

「あはは」

私はふと、高1の春休みに聖がうちに来たことを思い出した。偶然なのか何なのか、私の誕生日だった日のことだ。あの時のパパに対する聖の態度は最悪だった。いくら恋人ではないとは言え、将来自分の義父になる人にあれはないだろう。怒るところかニコニコして聖を見ていたパパもパパだけだ。

男の人って、どうしようもない。

だけど三浦君を見ると、なんだかわいくて笑えてしまう。

「そう言えば朝、千葉先輩に絡まれてたな」

「・・・やなこと思い出させないで」

忘れてた。もう一人のどうしようもない男。

あれは本当にどうしようもない。本気で私を好きで口説いているならまだしも・・・

「あんなの、うちの病院狙いじゃん」

「だな」

私は三浦君に肯定されたことで更にむくれた。

そうなのだ。

こともあろうにあの千葉先輩、私と結婚してうちの「マミーホスピタル」を乗っ取ろうとしているのだ！

「乗っ取る、はいくらなんでも人聞き悪いんじゃないか？桜子んちの病院を継ぎたいだけだろ」

「それに乗っ取るって言うのよ。うちを継ぐのは私なんだから」

私はさすがに怒りを隠しきれず、思わず拳を握り締めた。

日記によると、千葉先輩は元々心臓外科を目指していた。大方テレビドラマか何かで見たバチスタ手術にでも憧れたのだろう。でも、外科医になるのは医者の中でも難しい。ましてやバチスタ手術をできる人なんてほんの一握りだ。

あっさり心臓外科を諦めた千葉先輩が次に目をつけたのが産婦人科だった。千葉先輩を馬鹿にしてはいけない。外科を諦めて産婦人科という医学生は結構多い。その理由は手術ができるから。頻繁に手術を行う科は通常では外科と産婦人科に限られるのだ。

「C大附属の産婦人科に進めばいいのに」

「大学病院より開業医の方が断然給料がいいだろ」

「まあね。そういう意味じゃうちは既に大きな個人病院を持つてるから、確かにオイシイよね」

「うん・・・」

三浦君が少し躊躇うように同意する。

なぜなら三浦君もうちを「狙ってる」一人だからだ。

「狙ってない」

「でもうちの病院に興味あるんでしょ？だから今日、見学に来るんじゃない」

「そうだけど・・・千葉先輩みたいな下心はない」

「そうね。私と結婚しようとしてる訳じゃないし。でも、もしうちの病院で働くことになったら、院長を目指したいでしょ？」

「そうだな。そうなったら桜子と競争だな」

「パパは仕事にはシビアだから、私より良い医者がいたら平気で後継者に指名しそうで怖いなー」

笑って言ってるけど笑い事じゃない。事実だ。病院を建て替えた時に病院名から「本竜」を外したのも、誰でも院長になれるようにとの考えからだ。

そして三浦君が外科から産婦人科へのドロップ組であることもまた事実。成績は優秀らしいから、本気で目指せばそれこそバチスタも夢じゃないだろうに、どうして産婦人科に進路を変えたのかまでは私も知らないようだ。

私と三浦君は恋人同士ではないもののやはり気は合うらしく、すぐに歩調を合わせて歩き続けた。

「はじめまして。君が三浦君だね？桜子から聞いているよ」

「はい。三浦です。はじめまして」

午後の診察直前に時間を作ってくれたパパに、ここぞとばかりに外面の良さを発揮する三浦君。
だけどパパの表情は何故か冴えない。

「うーん、君が産婦人科希望か・・・それはちょっとどうか？」

三浦君もいきなりパパにそう言われてさすがにうろたえる。

「あの・・・僕、産婦人科に向いてませんか」

「向いてないね」

「・・・」

きっぱり言い切るパパに私もフォローのしようがない。まだ三浦君の外面しか見ていないのに、パパはどうして「向いてない」と思うんだろう？

ところがどうやらその外面こそが向いていないと思う原因らしい。

「産婦人科には未婚の母になろうとしている若い女性も多いんだよ。けどみんながきちんと一人で母親になる覚悟ができている訳じゃない。そういう女性にしてみれば、かつこ良くて優しい産婦人科のお医者さんというのは随分魅力的らしい。三浦君、患者とトラブルにならない自信はあるかい？」

「あります！絶対にそんなことになりません！」

三浦君が力強くきっぱりとそう言い放つと、パパはようやく「それなら問題は無いね」と微笑んだ。

「病院内を案内してあげよう。少しチェックしたいカルテがあるから、産婦人科の方の待合室で待っててくれるかな」

「はい、ありがとうございます」

「桜子もせっかくだから三浦君と一緒に見学しなさい。産婦人科には興味ないだろうけど、たまには病院内を見て回るのもいいだろう」
「・・・うん、そうね」

昨日の日記帳が頭をよぎる。

本当の私は産婦人科医だ。子供を好きじゃないからだけど・・・。

クラシックのBGMが流れるまだ誰もいない産婦人科用の待合室のソファに三浦君と並んで座る。

産婦人科に来るのは妊婦さんばかりではないけど、やっぱりお腹の大きな人が多いから、立ち上がりやすいようにソファはあまりクッションの効いていない硬い物だ。

「俺の彼女も桜子のお父さんと同じような心配してたよ。たく、患者とそんなことになる訳ないのにさ」

「そう？でも若くてかわいい女の子が一人で子供を産もうとしてたら、情にほだされない？」

「ほだされない。患者としてその女の膣内や子宮を見るんだぞ、どうやったら恋愛対象になるっていうんだ」

身も蓋もあつたもんじゃないけどその通りだ。

三浦君がげんなりしたように言う。

「なんか、性欲落ちそう・・・逆にそっちの方が心配だ」

「変なこと言わないでよ。そんな心配するくらいなら、産婦人科を選ばなきゃいいじゃない」

「他にやりたい科がないんだよ」

「外科は？」

「外科は・・・パス」

「どうして？三浦君の成績なら問題ないでしょ？」

「成績の問題じゃない」

「え？」

ちようどその時、カルテのチェックを終えたパパが私たちのところへやってきて会話が途切れる。

三浦君がさつとソファから立ち上がった。

「待たせたね、行こうか」

「はい、お願いします」

さつきまで性欲云々言ってたの同一人物とは思えないほどハキハキした態度で答える三浦君。

本当に外面の良さは天下一品だ。

この分なら、結構人気の医者になるかもしれない。

私は苦笑しながら2人の後についていった。

第3部 第5話

パパは小児科の診察を他の医者任せ、三浦君に診察室、入院室、陣痛室、分娩室、新生児室を順番に紹介していった。中でも三浦君の反応が良かったのは2階の新生児室だ。新生児なんて附属病院で嫌ってほど見てるだろうに、それでもズラッと並んだ生まれたての赤ちゃんというのは魅力的らしい。

三浦君は中腰になり、移動式の小さなベッドではなく2つの保育器の中をジッと見つめた。

「この子達は双子でね、昨日帝王切開で生まれたんだよ。元氣だけど体重が2500グラム未満だから保育器に入れている」

「帝王切開ですか」

「母親は37歳、初産。不妊治療の結果できた双子。帝王切開の方が安全だ」

「本竜さんが執刀されたんですか？」

「そうだよ」

三浦君は保育器から視線を外さないまま、パパに訊ねた。

「・・・怖くなかったですか？」

「え？」

「帝王切開。もし失敗したら、母親も2人の子供も死ぬことになる。それって産婦人科独特ですよ。外科なら死ぬのは患者1人です」

「・・・」

パパと私は、三浦君の後ろで顔を見合わせた。パパが何を考えているのかは分からないけど、私は驚いていた。私

も一応産婦人科医として数年働き、帝王切開も何度もしたことがある。もちろん失敗など一度もない。

外科の手術は悪い箇所を切除したり傷を縫い合わせたりする手術だけど、帝王切開は子宮から子供を取り出すだけだから、難しくはない。子供の状態によっては難しい手術になることもあるけれど、そういう場合はたいいてい大きな病院に回す。それは仕方のない事だ。個人病院には限界というものがある。

だから、もちろん多少緊張はするけれど、うちでやる程度の帝王切開の手術で「怖い」と感じたことは私はない。

パパが私から三浦君に視線を移した。三浦君も中腰をやめて立ち上がり、パパの方を見る。

パパは穏やかに言った。

「三浦君は桜子と同じで4年生だったね？」

「はい」

「こつそりとなら、まあいいだろう」

「え？何がですか？」

「ついてきなさい」

パパは新生児室から出ると、そのまま階段を下り始めた。私と三浦君も続く。

三浦君はパパがどこへ向かっているのか分からないようだけど、私にはなんとなく分かる。そしてパパはやはり私が予想した場所へと入って行った。

三浦君が驚く。

「え・・・いいんですか？」

「まだ研修医でもない医学生を入れる場所じゃないけどね。声は出

さないように」

「はい」

私たちはさつきパパが案内してくれた診察室の更に奥へ・・・内診室へ入った。

緑のカーテンで部屋が分断されている。そのカーテンの向こうに人影が見えた。

産婦人科医の男の先生がパパと私たちに目で挨拶し、カーテンの向こうに話しかける。

「準備ができたら台の上に座ってください」

「あ、はいっ」

少し焦ったような女の人の声が聞こえてきた。それに続いてガサゴソという音と「ほら、先生が待ってるだろ、早くしろよ」という男の人の小声も。旦那さんだろう。

「座りました」

「椅子が上がりますから背もたれにもたれてください」

「はい」

ウィーンという音と共にカーテンが下からゆっくりと持ち上がってきた。持ち上げているのは白い足だ。内診台がゆっくり倒れながら上昇しているので、自然とそうなる。

機械音が止まると、先生が内診しやすいようにカーテンを整えた。

露になった陰部に三浦君が一瞬たじろぐ。

ただ先生が診察を始めると、三浦君の目は学生のそれに変わり、食い入るようにして先生の手元を見つめた。

器具が体に当たり、女の人の足がピクツと動く。

「モニターが見えますか？」

先生が訊ねると、女の人の身体が右に少し傾いた。室内に設置されている、子宮内部を白黒の画像で映し出すモニターを見ているのだろう。カーテンのこちら側にも同じものがあるので、私と三浦君もそれを見た。私は見慣れているから一目で赤ちゃんの状態が分かるけど、三浦君には何がなんだか分からないはずだ。

先生が女の人に丁寧に画像の説明を始めた。この先生はいつも丁寧だけど、パパから三浦君のことを聞いているのか、いつも以上に丁寧に、時折三浦君の反応を見るかのように説明している。

「順調ですね。次回からはエコーでの診察になります」

「エコーってお腹の上から見るやつですか？」

「そうですよ」

わあ、妊婦さんって感じね、と女の人のはいだ声がする。旦那さんも嬉しそうだ。

内診台が下がり、女の人の方が服を着終わると、先生は隣の診察室で今の夫婦に赤ちゃんの状態の説明を始めた。プライバシーの問題があるので、さすがにまだ学生の私たちは立ち会えないし夫婦の顔も見れない。

だけど三浦君はまるでその時間を狙っていたかのように、さつき撮影された子宮内の映像を何度も見返していた。

「どうだい？」

夫婦が帰った後、まだ映像を見ている三浦君にパパが話しかけた。すると三浦君は首を振り、「さっぱり分かりません」となんと正直な感想を述べた。

「どの部分が胎児の頭でどこが手でどこが心臓なのか・・・説明を聞いても、一度瞬きをしたらすぐにどこがどこだか分からなくなります。臍の緒もどれなのかよく分からないし。そもそも、この小さな塊りが赤ちゃんになるって気がしません」

「あはは、そうだろうね。もう少し勉強して研修をしないと、医者目で見えることはできないよ」

「はい」

「でも、一つだけ勘違いしないでほしい。人間は動物だから、犬や猫の赤ちゃんのように人間の赤ちゃんも放っておいても勝手に生まれてくる。我々はその手伝いをしているだけだ。もし、赤ちゃんや母親に何かあるとしたら、それは元々そという運命だったんだ。我々のせいじゃない」

「・・・」

「そう言い切れるくらいの腕と自信がないなら、医者になるべきじゃない。医者のせいで赤ちゃんや母親が死ぬなんてことは言語道断だ。医者にミスは許されない」

「・・・はい」

三浦君がもう一度モニターを見る。そこにはさっきまでと同じ、三浦君の言葉を借りるなら「赤ちゃんになるとは思えない小さな塊り」が映っている。けど心なしか、それを見る三浦君の目はさっきとは違って思うように思えた。

第3部 第6話

「三浦君、本当は外科に進みたいんでしょう？それなのにどうして産婦人科を目指してるの？」

病院から駅までの道を歩きながら、私は三浦君に訊ねた。

三浦君がいつまでも胎児の映像を見ていて、しかも病院の本まで引っ張り出して勉強を始めたもんだから、すっかり日は暮れてしまっている。だけどそんな三浦君を見ると、なんだか私まで勉強しなくなってきた。ただそれは産婦人科の勉強ではなく……

「忙しいだろ、外科って」

三浦君がぶっきらぼうに答える。

確かに緊急手術が頻発する外科は忙しい。それに外科があるような病院——大学病院や日赤、市民病院——は夜勤もあるから激務と言える。どうやら三浦君はそれが嫌らしい。

「産婦人科だって忙しいよ」

「分かってる。でも個人病院ならそれほどじゃないだろ？」

「まあね」

産婦人科も妊婦さんがしょっちゅう夜中に駆け込んでくるという意味では他の科より忙しいけど、うちは個人病院だし産婦人科医も数人いる。大きな病院の外科より勤務は遥かに楽だ。

「だけど忙しいのが嫌なら、わざわざ産婦人科じゃなくても他の科でいいじゃない」

「それも考えたけど……俺、腕や知識が伴わないのならともかく、

忙しいからって外科を諦めるのは医者としてあるべき姿じゃないと思っんだ」

「うん・・・そうだね」

「だけど俺はそれをした。だから、第2希望の産婦人科くらいはそんな理由で諦めたくないんだ」

「ん？言ってることがよく分からないよ、三浦君？」

「だよな・・・」

三浦君が頭を掻き毟る。伝えたいことを上手く伝えられなくてもどかしいらしい。

しばらく悩んだあと、三浦君は少し恥ずかしそうに、そしてそれを頑張って吹き飛ばすかのように大きな声で言った。

「彼女がさ！心配性で寂しがり屋なんだよ！そのくせ、俺が外科に進みたいって言ったら、会う時間が減るのが嫌なくせに『頑張って』とか言うんだよ」

「そ、そう」

あの小さい彼女ね？いい子じゃない。

「でも、俺も嫌なんだよ」

「会う時間が減るのが？」

「う、うん・・・」

「へー」

ほー。

「だ、だから！外科はやめようと思ったんだ。でも・・・第2希望の産婦人科も忙しいけど、第2希望までそんな理由で諦めるのって、なんか情けないっていうか、なんの為に医者目指してんのか分から

ないっていうか。医者なんて特種な職業に就く以上は、普通の会社員よりプライベートを犠牲にしないといけないのは分かってる。だけどそれをどこまで彼女に我慢してもらうか、自分が我慢できるかって考えたら、外科は無理だけど産婦人科なら少し無理すればなんとかなるかな、と思って」

「ふうん・・・」

「でも、さっき桜子のお父さんの話聞いて、考え直すことにした」「え？」

遠くからかすかに音楽が流れてきた。見ると、50メートルほど先にある駅のホームに電車が入って行く。三浦君が顔を上げ、「あ。あれ乗らなきゃ」と言って突然駆け出した。

「三浦君！」

思わず呼び止めると、三浦君は走りながら顔だけ私の方に振り向いた。

「桜子、今日はありがとな！」

「う、うん」

「また明日」

「うん！」

私は足を止め、三浦君が乗った電車を見えなくなるまで見送った。

机の上の分厚い2冊の本。昨日徹夜で読んだから、その内容は大体把握できている。

ただどうしても納得できないことが2つある。

私は1冊目の前から5分の1くらいのページを開いた。

高3の1月22日。既に退寮して実家でC大前期試験に向けて勉強していたこの日の夜中、突然家の電話が鳴った。パパが出ると、亜希子さんからだ。奏君が高熱を出し、ひきつけを起こしているのだという。1歳になってからのひきつけは危ない。パパはすぐに病院に連れてくるように言った。でも幸い大したことはなく、奏君は一日入院するだけで事なきを得た。

ただこの夜の出来事は、私に大きな衝撃を与えたようだ。

いつもは冷静でしっかり者の亜希子さんが取り乱してオロオロし、奏君はそんな亜希子さんの腕の中でぐったりとして動かない。私は、病人というものは無力なものだけど、それが子供の場合は周りの人間まで無力になってしまうものだと感じた。

だけどパパはそんな2人に全く動揺することなくきばきと治療をこなし、そして私にこう言った。

「亜希子。病人は無力じゃない。病人は時として信じられないような奇跡を起こす力を持っている。特に子供は強い。子供の病人は周りの人間に元気を与えるほど強い」

そのパパの言葉を証明する出来事が、それ以降の日記の中にたくさん書き記されていた。そしていつしか私は小児科医を目指すようになった。この目で子供が作る「元気」を見てみたい、そう思うようになった。

だから三浦君がうちの産婦人科に興味を示した時、私はとても喜んだようだ。「私がうちの小児科医になるから、三浦君は産婦人科医になってよ。そして一緒に頑張ろうよ」と。

だけどこれは全て今の私の記憶にはないことだ。

ただ日記に書かれていることで、過去の私を感じたことだ。

過去の私は小児科医を目指す決めた。だけどそれは私じゃない。

なんだか追い越されているような気がした。

「私」は一日一日を重ね、その中で小児科医を目指す決意をした。私は知らないところで「私」に追い越されている。いや、せっかく積み上げてきた「今まで」を、過去から飛んできた私が潰そうとしている、という感じが。

私はどうしたらいいんだろう？

今の私を信じて一から始めるべきなのか、過去の私を信じてこのまま歩き続けるべきなのか。

だけど問題は小児科を目指すか産婦人科を目指すかだけじゃない。もう1つ大きな問題が、場合によってはどちらの科を目指すかよりも大きな問題がある。

それを解決する方法は一つ。

私は日記帳を閉じると、鞆の中にスケジュール帳が入っていることを確認し、家を出た。

第3部 第7話

電車を降りて歩くこと約5分、私は目の前の建物を見上げた。落ち着いた照明で夜の暗闇の中照らし出されているそれは、一目で高級な高層マンションだと分かる。

こんなところに住んでるのね、あのお坊ちゃまは。

私はスケジュール帳のメモページを開き、上から10行目の真ん中辺りに書かれた――まるでわざと目立たないように最初でも最後でもなく真ん中に書かれているように思える――住所を見て、それが今自分のいる場所と同じであることを確認した。

もう夜の11時を回っているけど、どうせ起きてるだろうから遠慮はいらない。メモに書かれているのと同じ部屋番号を、入り口にあるパネルで間違えないように注意深く押す。指先が震えた。もしも日記に書かれていることが本当なら・・・直接は書かれていないけど、そこから感じ取れることが本当なら・・・

くぐもった呼び出し音のすぐ後に、ピツと通話ボタンを押す音が聞こえた。

「なんだよ、こんな時間に」

パネルの横にある小型カメラで、訪問者が私だという事は分かっているらしい。

「今いい？」

「ああ」

カチャツとロックが解除される音。自動ドアをくぐると中にもう一枚自動ドアがあり、その手前にまたパネルがある。もう一度部屋番号を押し、自動ドアを開けてもらう。二重のセキュリティは安全だけどこういう時はなんだか気まずい。

2種類あるエレベーターのうち高層階用の方を選んで乗り込むと、ほとんどGを感じないままエレベーターは目的の階に到着した。絨毯の敷き詰められた建物内の廊下を奥に向かって10メートルほど進み、ようやく辿り着いた部屋のインターホンを押す。

が、せつかくの「高級マンション感」も中から出てきたチャライ男と、ぐちゃぐちゃの室内で一氣に台無しだ。

「・・・何よ、その髪」

「似合うだろ、ギンパツ」

「総白髪みたい」

「うつさい。役柄なんだから仕方ないだろ。って、初日に見てるから知ってるか」

今の私には初日を見た記憶はないけどね。

聖は顎をしゃくって「入れば？」と言った。だけど玄関にも物が溢れていて、入るのも一苦労だ。何の連絡もなしに来と言って言うことじゃないかもしれないけど、もう少し掃除すれば？

「してたんだよ、掃除」

「は？これで？散らかしてるだけじゃない」

ジャングル探検並みの覚悟で足を踏み入れたリビングは想像を裏切らない状態だ。デンと置かれたソファの上だけ不自然に綺麗なのは、

ここが聖の寢床だからだろう。

「正解。泊まってく？」

「帰るに決まってるでしょ」

「もうすぐ終電なくなるぞ」

「タクシーで帰るわよ」

「元婚約者同士なんだから、遠慮することねーだろ」

そう言うや否や、信じられない節操のなさで聖は私を押し倒してきた。けど一応6年一緒に暮らしてきたし、何度かだけだけ寝たこともある。大して驚きはしない。

冷めた目で聖を見上げると、聖の方が怯んだ。

「なんで驚かねーんだよ」

「あなたの行動パターンなんかお見通しよ。重いじゃない、さっさとどいて」

「・・・」

聖が不服そうに私の上から退散した。大方私が驚いて悲鳴の一つでも上げるのを期待していたのだろう。おあいにくさま。28歳の女（しかも既婚者）を舐めるんじゃないわよ。

「それより、元婚約者同士ってどういうこと？」

私は髪を整えながら訊ねた。

日記には、聖と婚約解消したなんて話は書いてなかった。書いてあれば見落とさないだろう。

「近々めでたく婚約解消になるってことだよ」

「近々？」

「ああ。さつき親父と大喧嘩してきた。勘当だとさ」

喧嘩・・・勘当・・・。

ああ。聖との婚約が破棄になりそうになったあの時のことだ、きつと。

親子喧嘩の原因は、聖が勝手に大学を辞めたこと。

「大学を辞めたつつたら、ブチ切れた」

やっぱりね。

「当たり前でしょ。これからどうするのよ」

「1人でなんとかやってくさ」

無理よ。数ヶ月で親に泣きつくことになるわ。

そして私との婚約も復活して、私は伴野のおじ様に押し付けられるようにして聖と結婚したんだから。

「このマンションも親父の会社の持ち物だから、出てけつてさ」

「もしかして、このジャンル状態は引っ越し準備のため？」

「そう。欲しいもんがあったら、持ってっていいぞ。次のアパートにはほとんど入らないから」

「いないわよ」

私は改めて部屋の中を見回した。確かに物で溢れ返っていてぐちゃぐちゃだけど、部屋自体はさすがに高級だし広い。伴野のおじ様が社長を務める伴野建設の中でも、特に良い物件だろう。こんなところで親のお金を使って好き勝手に暮らしていた聖が、狭いアパートで1人で生計を立てるなんて・・・そりゃ無理な話だ。数ヶ月でも持ったのが奇跡に思える。

「なんで大学辞めたの？どうせ元々ロクに通ってなかったんでしょ？」

「・・・お前もあいつと同じこと言っただな？」

「あいつ？」

「うるさい雌猫めすねこ」

「雌猫？」

聖が部屋の隅に山積みにしてある段ボールを組み立て始めた。さすがに見えているだけという訳にもいかず、仕方なく私も手伝う。まるこめ味噌？どつかのスーパーの段ボールかな。引越し業者に頼むお金もないんだ。

何故か胸が痛んだ。子供の頃も結婚してからも、人のお金で遊びまくってる聖しか見たことがないからかもしれない。自業自得じゃない。憐れんでやる必要なんてないわ。

床に転がっているヤカンが目についた。誰かに貰ったのか、この高級マンションには似つかわしくない随分と古いヤカンだ。

これからは聖の周りにこういう物が増えていくのかな・・・

すると突然、聖がガムテープを切る手を止め、スウツと息を吸ってちよつと甲高い声でペラペラと話し出した。

「親元離れて一人暮らしするって言っても結局は親のマンションに住んでるし、生活費だって親から貰ってるんでしょ？そんなの独立したとは言えないわよね。単に家の『離れ』に住んで好き勝手やってるだけじゃない」

はい？

「大学だって、どうせ行つてないんでしょ？学費だけ親に払わせて卒業するつもりなんだろう？劇団の人って普通、もつと苦労してるもんなんじゃないの？あんたみたいな甘々な坊ちゃんがいるような世界じゃないわよ。いたところで、どうせ一人前にはなれないわさつさと家に戻つて、大人しく伴野建設で働いたら？」

「……ぷっ」

私は堪えきれず大爆笑した。

「それ、その雌猫つて子が言ったの？」

「そう。あんまりム力ついたから、一字一句忘れらんねーよ」

「あははは」

「でも、ム力つくけど雌猫の言う通りだ。俺は甘いと思う。だから、一人でやってみようって思ったんだ」

「……そう」

聖は床のヤカンを持ち上げると、組みあがった段ボールにそつと入れた。なんだかそれは絵になる光景だった。

ヤカンはこのマンションには似合わない。そして聖も似合わない。聖はこんな整備された小綺麗な場所で飼い慣らされてるのなんて、似合わない。

「その雌猫さん、聖のこと好きなんじゃない？」

「お。やっぱり？桜子もそう思うか？」

「うん。聖のこと、よく分かっているみたいじゃない」

「だよなー。だったら素直に好きって言えばいいのに。ひん曲がった奴だぜ」

「なによ。聖もまんざらじゃなさそうね」

「まさか」

ビツとガムテープを延ばし、段ボールに蓋をする聖。

実家も地位もお金も婚約者も全てを失ったはずなのに、その後姿はとも楽しげだ。まるでこれから始まる何にも縛られない生活を夢見るかのように。

その生活には一体何が聖を待っているんだろう？

演劇はもちろんだ。お金を作らなくてはいけないからアルバイトもしないといけないだろう。

他には？

チリンチリン・・・

頭の中で小さな鈴の音がする。

ちよっとツンとした黒い雌猫が、首につけた金の鈴を鳴らしながら私の目の前をサッとよぎったように思えた。

第3部 第8話

スケジュール帳のメモページに書かれてある聖の住所を2重線で消し、新しい住所を書き足す。

「どうせ婚約解消になるんだから、俺の住所なんか知っててどうするんだよ」という聖の問いに、「また劇を見に行くかもしれないから」という答えになっていない答えを返して教えてもらった住所だ。

これでいい？

私は過去の私に訊ねた。

日記帳の中で私は毎回聖の劇を公演初日に見に行っていた。最初の数回は「飛んだ1年3ヶ月の間も見に行ってたみたいだから」と半分情性で見に行っていたようだけど、次第にそれは積極性を帯びたものにならなくなっていった。そうと書かれている訳ではないけど、なんとなく分かる。だって書いているのは他の誰でもない私なのだから。

その積極性と反比例するかのように、劇の感想はシンプルになっていった。だけどそれは無関心故のシンプルさではなく、関心を隠すためのシンプルさだ。私も雌猫さんに負けなくらい素直じゃないらしい。

そしてもう一つ、劇の感想と同じく反比例してシンプルになっている物がある。「ノエル」だ。だけどこっちは明らかに単なる「シンプル」。何の含蓄もない。

スケジュール帳を閉じ、今度は日記帳を開いた。2冊目の終わりの方のまだ白いページに今日の日付を書き加え、そのままペンを走ら

せる。

昨日高3の秋から「飛んで」来たこと、三浦君と会い一緒に病院見学したこと、自分が小児科を目指しているのに驚いたこと。そして

「聖に会った。いい男になったと思う」

一度ペンを止めた。さっきの三浦君じゃないけど、自分の想いを上手く書き表せられない。

私は少し考えてから、何度も消しゴムを使いながら書き進めた。

「一昨日までの私は・・・きつと高校時代の私も、聖に惹かれていたのだと思う。だからノエルと別れ、日記の中からもノエルがいなくなっていた。多分。だけど今の私にはその気持ちが分からない。小児科を目指しているという気持ちも、聖に惹かれているという気持ちも。私はどうしたらいいんだろう？」

これが今の正直な気持ちだ。どうしたらいいのかわからない。私はペンを投げ出し、机に肘をついて両手で頭を抱えた。

高校1年生の私はノエルと付き合いながらも段々と聖に惹かれていき、ノエルと別れることを決意した。だけどその想いは高3の夏に、高1の春から飛んできた私によって一度リセットされている。それにも関わらず私はまた聖に惹かれた。

今の私はまだ間違いなくノエルを好きだ。だけど怖い。今リセットしたところで、私はまた聖に惹かれるんじゃないだろうか？そしてまた過去から飛んできた私にリセットされる。

ずっとこんなことを繰り返すの？ノエルとの再会の約束はどうなるの？

私は誰と結婚するの？

だけど・・・

頭を抱えていた手を外し顔を上げると、目の前の窓のガラスに私の顔が映った。

・・・違う！私じゃない！

そこにいたのは21歳の私ではなく、28歳の私だった。
28歳の私が話かけてくる。

「桜子、あなたが本当に怖いのはそんなことじゃないでしょ？」

「・・・」

「さっき日記に書いた一言が全てよ」

「違う」

「違うない。あなたは聖に会って、いい男になったと思ったのよ」

「思っていない」

「だってそう書いたじゃない」

「見た目だけの話よ」

「聖の見た目なんて、今まで嫌って程見てきたでしょ。それでも改めて聖をいい男と思ったんだから、見た目じゃなくて、人間としてそう思ったのよ。だけどそれを認めるのが怖いんでしょ？」

「違う！私が好きなのはノエルよ！」

「どうして認めないの？自分の心変わりが許せない？ノエルと別れてもう4年近く経つなの？ノエルだってあなたのことなんて覚えてないかもしれない」

「そんなことない！」

「もう一度しっかり日記を読んでみなさい」

「え？」

瞬きを見ると、ガラスには私が映っていた。28歳の私ではなく、呆然と自分を見つめている21歳の私だ。私はガラスから逃げるように目を逸らして、手元の日記帳を見た。もう昨日散々読んだから内容は分かっているし、聖に惹かれていたのも分かっている。これ以上何を読めと言っただろう。まだ読んでいない場所と言えば・・・

たった今書き加えたページの先をめぐっていく。白い。当たり前だ、ここはこれから私が埋めていくべき場所なのだから。ところが一箇所だけ、真っ白ではないページがあった。一番最後のページだ。日付はない。そこには大きく強い文字でこう書かれていた。

「自分を信じて。過去の私も今の私も、私は私。未来を作るのも私。それを忘れないで」

「桜子、おはよう。ここ座っていいか？」

「あ、うん。おはよう、三浦君」

朝一番の授業が始まる前の教室で、三浦君が私の隣に座り話しかけてきた。

相変わらずのイケメンっぷりに周囲の女の子たちがひそひそと囁きあうのが聞こえてくる。

「昨日はありがとう。勉強になったよ」

「そう。よかった」

「内診室は凄かったなー」

そう言う三浦君がなんだか昨日よりもいきいきしているように見えるのは、私の目の錯覚じゃないだろう。

「もしかして三浦君、進路決めたの？」

「お、分かる？」

「うん、なんかさっぱりした顔してるもん」

「へへ、そうか」と照れ臭そうに笑うその笑顔は本当に眩しい。特に今の私には。

私は結局日記の最後に書かれていた言葉の意味を理解できなかった。だって過去の私と今の私は違う。過去の私が何を考え、感じていたのか私には分からない。そんな過去の自分と今の自分が同じ「私」だとは思えない。

そして、過去の自分が目指していた小児科を目指すべきなのか、28歳の私と同じ産婦人科を目指すべきなのかを考えているうちに、何がなんだか分からなくなってしまった。

そんな私には、自分の進むべき道を決めたばかりの三浦君が眩しくて仕様がなない。

軽い嫉妬と焦燥感そして喪失感が私の心をジワジワと侵食していく。三浦君は昨日のパパの話を聞いて、きつと外科を選んだ。私はまだ何も決めていないというのに……。それに、仮に決めたとしても、私が三浦君と一緒に働くことはない。なんだかそれがとても寂しい。せっかく手に入れた戦友を自ら手放してしまったような気分だ。いいじゃない。本来、うちの病院には三浦君なんて医者はいないん

だから。私がC大に進んだからたまたま三浦君と出会えただけの話よ。

だけど、と私は心の中で付け加えた。

それじゃあ、私が本来の私大ではなくC大に進んだ意味って何だろう、と。C大を選んだのは多分、密かにノエルと同じ大学に通いたいと思っていたからだ。だけどノエルがC大に来るという保証はないし、そもそも私たちは別れてしまつて連絡も取っていない。だったら、私が一生懸命勉強してまでC大に進んだ意味が何もない。

それならせめて、三浦君が欲しい。これから一緒に戦う戦友として。もつと早くこのことに気付くべきだった・・・三浦君が決意をする前に。

私はとてつもなく大切な物を失ってしまったのかもしれない。それはある意味、ノエルよりも大切な物を。

第3部 第9話

「昨日、もう一度考えてみたんだ。どうして俺は外科や産婦人科を目指してたのかって」

本鈴が鳴り始めた。教授はまだ姿を見せないけど、教室の中が慌しくなり、思い思いの場所でおしゃべりしていた生徒たちが席につく。私は元々三浦君と並んで席に座っているけど、今はなんだか宙にぽっかりと浮かんでいるような気分だ。

三浦君はさっぱりした、そしてどこか拍子抜けしたような笑顔で私を見た。

「そしたら、特に理由なんてないんだよな」

「え？」

「俺は医者って存在になりたいだけであって、どの科の医者になるかなんて深く考えずに医学部に来た。来たら来たで、『医者って言ったら手術だろ』ぐらいな感じでお決まりのパターンに乗って取り合えず外科を目指して、っていうか、憧れて。で、外科を諦めたら次は『手術できる産婦人科かな』ってこれもお決まりのパターン」

私はちよつと笑った。私に付き纏ってる千葉先輩と全く同じだ。だけど三浦君が千葉先輩と違うのは、自分のそういう安易さと正面から向きあっているところだ。

ただの憧れから外科医になる医者も少なくない。だけど自分が単なる憧れで外科医になったことを認めたくなくて適当な理由を自分の中で作ったりすると、壁にぶつかった時に「こんなはずじゃ」と挫折してしまう。私はそういう医者を何人も見てきた。

だけどそういう時、高い志を持って外科医になった人はもちろん、

自分は単なる憧れで外科医になっただと割り切れてる人は強い。過去の自分が抱いた憧れをなんとか実現しようと頑張るからだ。「子供に無様な姿は見せられない」と仕事を頑張る父親の心境と似ているかもしれない。

そして私はと言うと、幸い「高い志」組だ。ただしそれは医者としての高い志ではなく、「家を継がなきゃ」という独りよがりな使命感からくる志だ。だから辛いことがあっても「家のため」という大義名分の為に頑張ってこれた。

三浦君は自分の安易さに気付き、その上で憧れを実現しようとしている。

やっぱり三浦君と一緒に仕事をしたかった。

「桜子のお父さんだけどさ、」

「うん？」

「俺のこと、どう思ったかな？」

「え？」

三浦君の顔から笑みが消え、目が真剣になる。

私は三浦君の言っている意味が分からず、動揺した。

「パパがどう思ったかって、どういうこと？」

「俺のこと、いい医者になれると思ったかな？自分の病院で雇ってもらって思ったかな？」

「・・・それって、うちの病院で働きたいってこと？」

「うん」

「え、なんで？外科に進むんじゃないの？」

三浦君が軽蔑した視線を私によこす。

「お前、俺の話聞いてたか？」

「聞いてたわよ、だから・・・」

「外科に進みたいっていう確固たる理由はない。あるのは漠然とした憧れだけだ。でも、産婦人科には漠然とした憧れ以外にもあるんだ」

「何が？」

「面白そうだなって興味」

どうも三浦君の言っていることって分かりにくい。それとも私に理解力がないんだろうか。

困った顔をしている私を見て三浦君は補足した。

「産婦人科って面白そうだなって思うんだよ、単純に。産婦人科は唯一患者が笑顔で来る科だろ？昨日、桜子の病院に来てた夫婦だつてそうだ。なんてったって新しい命が生まれてくる場所なんだもんな。病院に来ることを楽しみにしてもらえるのって産婦人科だけだと思う」

「三浦君の口からそんな言葉を聞くなんて、ちょっと意外ね」

正直にそう言っていると、三浦君は特に気を悪くする様子もなく「やっぱり？」と笑った。

確かに三浦君の言う通りだ。そこが産婦人科の魅力だと思う。

だけでもう1つ、産婦人科には他の科にない特徴がある。それは、唯一医者が命を奪うことを許されている科だということだ。

産婦人科の医者は生まれてくる命を見ることができると同時に、患者が望めば命の誕生を阻まなくてはならない。そしてその数は驚くほど多い。

三浦君だつて分かっているはずだ。ただ今はそれを真剣に考えるほど「医者」になれていない。でもそれでいいのだと思う。学生時代というのはそういうものだ、そしてその分、無限大の可能性を秘めている。

「ただの憧れしかない外科に進むより、ちょっとは面白そうだなって思う産婦人科に進むほうがいい気がするんだ」

教室の扉が開き教授が入ってきて、教室のあちこちからノートとペンケースを開く音が聞こえ始める。三浦君は視線を教壇の上の教授に向け、声を落として言葉を続けた。

「それに俺、桜子と働いてみたい」

「え？」

「桜子、前言つてただろ？『パパの受け売りだけど、子供の命が持つ奇跡を起こす力を見てみたい』って。随分暑苦しい奴だなーって思ったけど、真面目に仕事するならパートナーは暑苦しいくらいの奴な方がいい。桜子とだったら、いい病院を作れると思うんだ。・

・自惚れかな？」

「そんなこと、ないよ」

自然とそんな言葉が口から出てきた。本当に、ごく自然に。

三浦君は教授の方を見たまま少し目を大きくして、満足そうに微笑んだ。

「だよな。俺達今はまだ口でデカイこと言うくらいしかできないけど、可能性だけは無限大だからな」

授業が始まった。4年生ともなるとみんな将来がかかっているだけに授業一つでも真剣に聞く。三浦君も意識を完全に授業に集中させ

ている。だけど教授の声は私の頭上をただ流れていった。

身体が熱い。身体の中がしびれるほど熱い。

そうだ、今ここでは私も三浦君と同じ学生だ。可能性は無限大に広がっている。自分の好きな道を歩める。昔の私は「家を継がなきゃ」「子供は好きじゃないから産婦人科しかないな」と勝手に道を絞り、可能性を潰していた。だけど、私にはもう一度やり直せるチャンスが与えられたんだ。

そしてたった今、私は決めた。無限の可能性を集中させるべき一つの道を。

家を継ごう。

三浦君と一緒に新しいマミーホスピタルを作るんだ。

「俺、桜子と働いてみたい」。

なんて嬉しい言葉なんだろう。

この言葉には愛情も友情も飛び越えた何かがあるような気がする。そして私もそう思う。

小児科医になるか産婦人科医になるか、そんなことはどうでもいい。三浦君が産婦人科医になるというのなら、私は小児科医になればいい。大事なのは三浦君というパートナーと一緒に仕事することだ。

そのためなら、頑張れる。

私は目を閉じて一度小さく深呼吸をし、黒板を見つめた。

第3部 第10話

時間が必要だった。

一つ目の問題である自分の進路を決めた日から2ヶ月以上も。それほどに二つ目の問題は厄介だった。

だけど、このままじゃいけない気がする。またいつ「飛ぶ」かもしれないけど、私は「今」を生きている。今ある問題は今解決しなくてはならない。そう思う。

それでも電車が駅に近づくにつれ緊張は否応無しに高まっていった。私は行つてどうしようというのだろっ、なんて往生際の悪い考えが頭に浮かぶ。

ダメだ。うじうじ考えてたら本当に帰りたくなってしまう。悩んでたつて何も前に進まないってこの2ヶ月で嫌というほどわかったのに。

伴野のおじ様からうちに「聖が家を出たから婚約は解消して欲しい」と連絡がきたのは1ヶ月ほど前のことだった。すぐに連絡してこなかったのは、聖が帰ってくるかもしれないからと思っていたからなのか単に連絡しづらかったからなのか・・・多分前者だろう。ただしそれは期待ではなく「どうせあいつは長続きしない」という見くびりからくるものだと思う。

聖・轟のパパは残念そうだったけど、話を聞いた私は、来たかと思いながら昔の通り「そう」とだけ返事をした。昔は嬉しさを隠すのに必死だったのに、今回はなんだか複雑な気分だった。聖は好きな演劇をしていて、私は聖から解放される。良いこと尽くめなはずなのに、今までの私が聖を好きだったらしいという想いが邪魔をする。

だけど、それだけなんだろうか。この複雑な気持ちの原因は。

私は電車から降りると何も考えずに走り出した。ホームを駆け抜け改札をくぐり、まだ遅い時間でもないのに暗く一雨降りそうな気配の空の下を、まるで止まったら雨が降り出すぞと自分にプレッシャーをかけるかのように走り続けた。

そして私の足が止まったのは、メモに書いてある目的の建物が見えた時だった。

・・・あれ？あれがそうなの？

それは「建物」というのも申し訳ないくらい「かろうじて建っている物」という感じの古ぼけたアパートで、前のマンションとは雲泥どころの差ではない。住んでるご褒美に家賃を貰いたいくらいだ。

あのお坊ちゃまな聖が本当にこんなところに2ヶ月も住んでいるんだろうか？

メモに書かれた部屋番号の部屋のベルを押してみる。前のマンションのようなインターホンではなく、外からでも中で響く単調なベルの音が聞こえてくるような単純な作りだ。でも私には、その感触が前以上に重厚に感じられる。

しとしとと降りだした雨の中しばらく待ってみたけど、反応はない。携帯にも電話したけど無駄だった。少し出掛けているだけかもしれないし、もしかしたらもう嫌気が差してここから出たのかもしれない。

私は雨が降り続く空を睨んだ。聖を待とう。雨になんて負けるか。

なんとしても答えが欲しい。そうでなきゃ、ノエルと再会なんてできない。きちんとした気持ちでノエルと会いたい。

私は辺りを見回し、目に付いたコンビニに駆け込んだ。取り合えず傘を買わないと、ずぶ濡れになってしまう。アパートには軒があつたけどあつてないようなもので、雨漏りのオンパレードだ。

適当なビニール傘を手にとってレジへ向かう。4時半なんて中途半端な時間だからなのか店内はガラガラで、レジにいる高校生くらいのバイトの女の子が傘のバーコードを読み取ってくれたところだ。

「あれ？」

何度バーコードにバーコードリーダーをかざしてもレジは反応しない。女の子は焦って直接金額を打ち込もうとしたけど、それもあえなく失敗。どうやら新人のアルバイトらしい。急いでいたらイライラするところだけど、あのアパートに聖がまだ住んでいるのかどうかも分からないし、住んでいたとしてもまだ帰ってはこないだろう。他にお客さんもいない。

「いいですよ、焦らなくて。急ぎませんし」

「は、はい、すみません！」

よく見るとスラッとしていてなかなかかわいい女の子だ。お嬢様なのか、化粧品も上品な感じだし、どこことなく「世間知らずです」的な雰囲気漂っている。

お嬢様はそれからしばらく青くなりながら尚もレジと格闘していたけど、どうやらレジの方が一枚上手らしい。しかも私のように傘を求めて別のお客さんもコンビニに入ってきてしまい、お嬢様はつい

にギブアップした。

「あの・・・この傘のお金、私が後で払っておきますから結構です」
「え。」

そういうギブアップの仕方ってありなの？レジを通さず私からお金だけもらえばいいでしょ？もしくは。

「もう一人くらい店員がいるでしょ？その人に聞けば？」
「あ。そうですね！」

・・・大丈夫かな、この子。
女の子は在庫置き場らしいところに向かって「ひろこー！」と呼びかけた。すると中から、これまた可愛い女の子が出てきた。ただしこちらは「お嬢様」と違ってキリッとした感じで、いかにも頼りになりそうな子だ。

「どうしたの？」
「レジが動かないの」
「そんな訳ないでしょ」

そうよね。
「ひろこ」という女の子は私に「申し訳ありません、少々お待ちください」と言ってレジの中に入った。

「ほら、まずお客様の年齢を打ち込まなきゃ」
「あ、そっか」

ああ。そう言えばテレビの特集か何かで見たことがある。コンビニでは客の年齢層を把握するために、会計時に「10代」「20代」

「30代」「それ以上」みたいなボタンを押してから会計するのだと。

「えっと」

お嬢様はじーっと私の顔を見つめてはつきりところ言った。

「10代、と」

「ちょ、ちよっと！お客様に失礼でしょ！声に出しちゃダメよ！」
「あ」

お嬢様が真っ赤になる。面白い子だ。それにどうでもいいけど私、20代だし。

私はさっきまでの緊張を忘れて、一生懸命笑いを噛み殺した。

「すみません！」

はいはい。でもそろそろ終わらないと、次のお客様がレジに来ちゃうわよ？

お嬢様はたどたどしくレジのボタンを押し、ついに！「290円になります」と言った。

「ありがとうございました！」

「あの、お釣りは？」

「！……！」

生涯、これほどコンビニでお辞儀をされることはないだろう。

それから私は近くのカフェで本を読みながら時間を潰した。やたらと人がジロジロ見てくるからなんだろうと思っただけがよくなかったらしい。確かに人体解剖の本は公共の場には相応しくない。仕方なく店を出ようとしたとき、レジの横にあるショーケースに目がとまった。ケーキなんかが入っているショーケースだ。

そう言えば聖、ちゃんとご飯とか食べてるのかな？1人暮らしの男の人なんて、どうせいつもコンビニ弁当だね。

さっきのお嬢様が頭をよぎる。聖もあのコンビニを利用して、お嬢様の手際の悪さにイライラしてたりするのだろうか。

私はそんな場面を想像しながら1人で少し笑ってレジに並んだ。

ところが、いざ自分の番になって注文を聞かれる段階になり、私は困ってしまった。聖の好みが分からない。6年も一緒に暮らしてたのに、聖が甘い物を好んで食べていたかどうかさえ分からないのだ。

なんて情けない・・・

無難にサンドイッチでいいかな。でも、この前三浦君と一緒に大学でお昼ご飯を食べた時「俺、サンドイッチに挟んであるぐちゃぐちゃの卵って嫌い」って言ってたっけ。男の人ってああいうの、嫌いなのかな。

「お決まりでしょうか？」

「あ、えっと・・・卵サンド、じゃなくてハムと野菜のサンドイッチとツナサンド、サラダスパと・・・」

スコーン、じゃなくて、チーズケーキとチョコチップのクッキーをテイクアウトで」

「お飲み物はどうされますか？」

「結構です」

「ありがとうございます」

お嬢様とは比べ物にならない手際の良さで会計が済み、注文した物が入った紙袋が私の前に出てくる。これでこそ「店員さん」だけど、あのお嬢様はお嬢様でいい味を出してた。

私はカフェを出て傘をさすと、紙袋が濡れないように胸に抱えて雨の中を歩き始めた。

第3部 第11話

聖はまだ帰ってなかった。まさか本当にもう引越したのだろうか。記憶では、聖が実家に戻ってきたのは私が大学4年の冬だったと思うんだけど・・・。

私は聖の部屋のまん前で待っているのも気がひけて、さっきのコンビニへ向かった。堂々と雨宿りをするのは申し訳ないけど、外の屋根が出っ張ってる部分の下に立つくらいは許してもらおう。それにここからはちょうど聖の部屋の入り口が見えるから、聖が帰ってきたらすぐに分かる。

ちらつとコンビニの中を覗くと、レジのところにさっきの「ひろこ」という子がいるのは見えた。でもお嬢様の姿はない。もうシフトを終えて帰ったのだろうか。

お嬢様の仕事振りを見るの、ちょっと楽しみにしてたんだけどな。

私は鞆からハンカチを出し、サンドイッチが入った紙袋をかばっていたせいで濡れてしまった肩を拭いた。いつの間にかもう9時を回り、夏とは言え寒くなってきた。夕ご飯も食べてないからお腹もすいた。

私、何をしてるんだろう。何をこんなに頑張って聖を待ってるんだろう・・・。

いい加減虚しくなり始めたその時、聖のアパートの廊下を人が歩いているのが見えた。思わず身を乗り出して見てみたけど、違う。聖じゃない。質の良さそうな制服を着た女子高生だ。

なんだ・・・。

私は心底がっかりして、コンビニの窓ガラスにもたれた。が、すぐに再び身を乗り出した。その女子高生が立ち止まったのが聖の部屋の前だったからだ。

女子高生が鞆の中を探り、財布を出す。そしてその中から鍵を取り出し、ドアノブにあてがった。

鍵はすんなりと鍵穴に入り、滑らかに回転する。

私は息を飲んだ。

あの子、まさか……。いや、やっぱりあそこにはもう聖は住んでなくて、今はあの子が住んでいるんだ。そうに決まってる。

私は何故か自分に一生懸命言い訳した。でもそうじゃないことくらい頭では分かっている。どこだか知らないけど、きつとお金持ちの私立高校のであろう制服を着ている女子高生があんなところに住んでいるわけがない。あんな、お嬢様……

そこまで考えて、私の思考回路が再び止まった。

あの子！さっきコンビニのレジにいた「お嬢様」だ！

そう。ちょうど今、鍵を財布にしまってドアノブを握っているのは、間違いなくあのお嬢様だったのだ。

胸に鋭い痛みを感じた。今までに感じたことのない傷みだ。息苦しくさえある。

お嬢様がドアの内側に軽やかに消えていくのを呆然と見つめた後、私はふらふらとその部屋の前へと移動した。中から掃除機をかける音が聞こえてくる。

……。なんだ。そうだったんだ。

聖ってば、あんなお嬢様と付き合ってるんだ。
コンビ二で目をつけてナンしたに違いない。

それにしてもあの聖が彼女に合鍵を渡すなんて、ちよつと意外だ。
聖ってそういうの面倒くさがりそうだから。

気づくといつの間にか掃除機の音は鳴り止み、代わりに換気扇から
いい匂いが漂ってきた。お味噌汁の匂いだ。お嬢様が聖のために作
っているのだろう。

・・・なによ、夫婦みたいじゃない。それとも同棲してるのかな。

じつと換気扇を見上げていると、中からドアノブを回す気配がした
ので、私は慌ててアパートの裏側に走って逃げた。傘をさす余裕な
んでないから、びしょびしょだ。だけどそんなことは気にもならず、
私は部屋から出てきた女の子を陰から見つめた。やっぱり間違いな
い、あのお嬢様だ。

お嬢様は心配そうに空を見上げながら携帯で話していた。

「え？風邪？大丈夫？・・・うん、うん・・・雨、まだ降ってるね。
傘は？・・・そっか、分かった。じゃあ今日はもう帰ってくるんだ
？・・・分かった、待ってるね。気をつけて」

お嬢様が携帯を切って急いで部屋の中に引っ込むと、私はまたドア
の前に戻った。「風邪」という言葉も気になったけど、何より「も
う帰ってくるんだ？」というのが気になる。

それはつまり・・・もうすぐ聖が来るということなんだろうか。

私は少し身震いをした。

散々待っていたはずなのに、いざ聖の姿が見えると私はがっかりした。もしかしたらあの部屋でお嬢様が待っているのは聖じゃない誰かかもしれないという期待をしていたからだろう。

って、いいじゃない、別に。夫婦の時だって、聖に女がいてもなんとも思わなかったんだから。

聖は傘を肩に寄せ、のんびりとした足取りでやってくると私を見て目を見開いた。

「桜子？何やってんだ、こんなところで。びしょびしょじゃん」

「・・・聖にちよつと用事が・・・」

「ふーん？」

よく見ると聖の顔は少し赤かった。風邪をひいているというのは本当らしい。

聖は傘をたたんで私の前を通り過ぎ、部屋の前でポケットから鍵を取り出した。

「え、ちよつと待って」

「なんで？雨降ってるから中に入ろうぜ」

「だって中に・・・彼女でしょ？」

あ、と言って聖はドアを見た。だけどそれは「しまった、忘れてた」という意味ではなく・・・

「そうだけど？」

「ちよっ・・・待ってっ！」

放っておくと本当に鍵を開けてしまいそうな聖を私は必死に止めた。彼女が待っている部屋に平気で婚約者を入れるの？それってどうなの？聖は嫌じゃないの？彼女にはなんて言うの？

なんて・・・

そうか、聖はきつとこう言うんだ。「こいつ、俺の元婚約者なんだ」と。

そして彼女はやきもちを妬くでもなく「え？そうなの？さっきコンビニで会ったのよ。先ほどは失礼しました」なんて私に笑顔を向ける。

きつと2人はそういう関係なんだ。

その時、私はふと以前聖が言っていたことを思い出した。

「もしかして、彼女って雌猫さん？」

「雌猫？」

「聖に『親に頼るな』みたいな啖呵を切ったっていう・・・」

それを聞くと、聖は照れくさそうに鼻の頭をかいた。

「よく覚えてるな。そうだよ、あの時の雌猫。なんか住み着きやがった」

「・・・一緒に暮らしてるの？」

「半分な。学校とバイトが終わったら毎日うちに来て、俺が帰ってくるの待ってる。夜には自分んちに帰るけど」

夜にはと言っけど、もう9時を回ってる。充分夜だ。親への言い訳にかろうじて寝に帰っている程度だろう。私は無意識に拳を握り締めた。

「ここじゃダメ？」

「俺は別にいいけど。何の用？」

「・・・」

用なんて何もない。いや、あつたかもしれないけど、もう必要ない。終わった。

以前、高1から高3に飛んだ時、私は高1の時より自分がノエルを好きになっっていることに気がついた。それだけに、自分から別れを切り出した理由が全く分からなかった。記憶は継続されないけど、気持ちは継続されるらしい。

今回も同じだ。

私はどうして自分が聖に惹かれたのかは分からないけど、その気持ちとは間違はなく今の私にも受け継がれている。

だから苦しい。悔しい。

そして理不尽過ぎる。

聖のどこに惹かれたか分からないのに、なんでこんなに苦しい思いをしないといけないの？

「どうしたんだよ、桜子？気分悪そうだぞ？」

聖が心配そうに覗き込んでくる。

やめてよ。誰のせいだと思ってるの？

ずっと仮面夫婦で暮らしてきたのに、どうして今更こんなことで苦しまなきゃいけないのよ。

「さくら、」

「もういい！」

「え？」

私は聖の胸に乱暴に紙袋を押し付けた。

「近くまで来たから寄っただけ！これ、彼女と食べて！」

驚いた聖が紙袋を受け止め切れず、紙袋はぐしゃつと音を立てて地面に落下した。

だけど私はそんなことは気にもとめず、踵を返して走り出した。

雨はいつの間にか本降りになっていた。

第3部 第12話

雨の中、傘もささずに走れば風邪を引いて当然だ。私が次に大学に顔を出したのは、聖と会った3日後のことだった。

昼休みに、三浦君が構内のベンチに座っている私を見つけて早速やって来た。

「ここんどこ見なかったな。大学来てたか？」

「風邪引いて休んでたの」

「こんな真夏に？ふーん、大丈夫か？医者の不養生ってやつだな」

うまい。だけどそんなことを言う元氣も氣力もない私は、黙って栄養補助剤のゼリー状の飲み物をすすった。

「そんなもん食べてたら、ますます体力が戻らないぞ」

「うん・・・」

三浦君が私の隣に腰を下ろし、ビニール袋からおにぎりを取り出した。どこにでもあるコンビニの袋だ。そう、聖の家の近くにも。

不自然に三浦君から目を逸らした私を見て、三浦君は不満そうな声を出した。

「なんだよ。俺が隣で飯食ってたら嫌か？」

「そうじゃないよ・・・三浦君、彼女と食べないの？」

「今、教育実習に行ってるんだ」

「教育実習？」

思わず三浦君の方に振り返ると、いきなり目の前におにぎりを差し出された。

「食べよ」

「・・・食欲、ない」

「だから食うんだよ」

「・・・」

私は黙っておにぎりを受け取り、一口食べた。パリッとした海苔とツヤツヤしたお米の味が口に広がる。食欲がないと思ってたけど、食べ始めると食べれるものだ。おにぎりはあつという間になくなった。3日間、ろくに食べてなかったから食欲はなくても身体が食べ物欲しているらしい。

私が最後の一口を食べ終わると、三浦君は今度は袋から惣菜パンを取り出し私に渡した。「大学来てたか？」なんて聞いてきたくせに、私が風邪で休んでいることをちゃんと知っていたらしい。だからこうやって色々買ってきて私に食べさせてくれてるんだ。

「・・・ありがとう」

「幼稚園」

「え？」

「幼稚園の教育実習に行ってるんだ」

「ああ、彼女が？」

「うん」

「へえ・・・」

私は2ヶ月前に一度だけ見た、三浦君の彼女を思い出した。小さくてぽちゃっとしてて愛嬌のある感じの子だった。幼稚園の先生にはぴったりだ。

「三浦君が医者で、彼女が幼稚園の先生かあ。2人とも『先生』だね」

「そう言えばそうだな」

「彼女と結婚するの？」

三浦君が飲みかけたお茶のペットボトルを口から放す。

「しない。・・・まだ」

「まだってことは、いずれするつもりなんだ？」

「・・・いずれな。高校生の時から付き合ってるんだ、なんかもう今更別の女と一から付き合おうとは思わない。面倒臭い」

本当に面倒臭いから今の彼女と付き合い続けているのかどうかは、三浦君のちよつと赤くなっている顔を見れば一目瞭然だ。私は温かい気持ちになり、自然と微笑んだ。あれ以来笑ったのは初めてだ。

「結婚式には呼んでね」

「だから、まだしないって」

「いつするつもりなの？」

「さあ。分からない。彼女は来年大学を卒業して社会人になるけど、俺はまだ2年あるからな。せめて大学を卒業して医者になってからじゃないと結婚なんかできないよ」

それもそうだ。じゃあ三浦君の結婚は早くても2年以上先ということになる。

それなら私の方が先ね、私は大学4年の1月に結婚したから。思ったところで、もう恐らくそうはならないだろうという気がして、気分が沈んだ。

思わず三浦君に意地悪なことを言ってしまう。

「のんびりしてたら、誰かにとられちゃうかもよ」

「・・・」

「職場も全然違っただし気をつけないと、」

「桜子。俺、考えたんだけどさ」

三浦君が突然私の言葉を遮った。私の話を聞きたくないから遮ったのではなく、何かを急に思い出したらしい。

「桜子んちの病院に託児があつたら便利だと思わないか？」

「託児？」

「うん。見学させてもらった時に思ったんだけど、産婦人科も小児科も子連れの患者つて多いだろ？二人目を妊娠してる妊婦さんとか、下の子の診察の為に上の子も連れてきている母親とか。そんな時に託児があれば便利だと思うんだ」

「・・・」

驚いた。三浦君が2ヶ月もそんなことを考えていたなんて。そして言われてみれば確かにその通りで、私も子連れで診察に来ている妊婦さんや、兄弟の病気に付き合つて病院に来ている子供を見て「お母さんは大変だなあ」なんて思つてた。だけど、だからどうしよう、なんてことは考えなかった。それなのに三浦君はたった1回の見学だけでそれを見抜いたんだ。

頭の中から聖が消え、一気に仕事モードになる。

「素敵な考えね。幼稚園の先生を目指してる彼女の受け入り？」

「違つて。でも、影響はされたかな。いつか彼女が妊娠したら、診察は俺がするのかな」って思つたんだ。そしたらあいつ、きつと診察待ちの間に病院にいる子供と遊んでるだろうな、って」

「なるほどね」

何て言つたつて、幼稚園の先生だもんね。子供が退屈そうにしてた

ら遊び相手したくなっちゃうようね。

「・・・うん」

「え？」

「いいと思う。それ、私たちでやってみようよ」

「そんな簡単にできないだろ」

「もちろん準備が必要よ。改装しないといけないし、保母さんも雇わないといけない。お金を準備しなきゃね。2千万は必要かな」

三浦君が目を剥いた。

「そんなに!？」

「当たり前でしょ」

「俺、そんなに用意できないぞ」

「誰が三浦君に用意しろって言ったのよ。そんなのうちにローン組んで用意するに決まってるじゃない」

「でも・・・」

「小児科と産婦人科、それに託児のある病院。流行れば2千万なんてあつという間に取り戻せるわ。外面のいいイケメン産婦人科医もいることだし」

「そうだな」

否定しないのか。

三浦君はお茶を飲んで、楽しげに笑った。

「なんか、すげー面白そう!」

「うん」

「俺、医者には患者を診察するのと研究するのが仕事だと思ってたけど、こんな普通の仕事みたいなのもあるんだな」

「開業医は医者であり社長だからね」

「そつか」

「ねえ、いつか三浦君の彼女、紹介してよ。三浦君にそんな影響与える彼女って興味ある」

「ああ、いいよ」

いいんだ。半分冗談で言ったので、思わず拍子抜けする。

日記によると三浦君は恥ずかしいのか今まで彼女の話をろくにしてくれなかったし、ましてや紹介してもらうなんて考えられなかった。でもきつと、三浦君の中で私は「一生付き合っていく人間」になったんだ。だから、同じく一生一緒にいる彼女に紹介してもいいと思った。

私と彼女の立場は全然違うけど、とても嬉しいことだ。

一瞬、聖とお嬢様のことが頭に浮かんだけど私は必死にそれを掻き消した。

それから私と三浦君は色んな話をした。こんな病院にしたいね、とか、あんなサービスがあつたら便利だね、とか中には非現実的なこともあつたけど、言うだけなら自由だ。それに突拍子もない考えからしいアイデアが生まれたりもする。

私はただ医者をやってるだけの医者だった。だけど三浦君がいれば前以上の医者になれる気がする。

マミーホスピタルはパパが作った病院だから、私にとっては兄弟みたいなものだ。

たくさんかわいがってやろう。

そして、みんなが「あそこで診てもらいたいな」と思うような病院にするんだ。

第3部 第13話

三浦君が3限の授業に向かった後も、私はしばらくベンチに座ったままだった。この心地よい疲労感をもう少し味わっていたい。こんなに真剣にマミーホスピタルのことを考えたのは初めてだ。

ところがその幸せは、あの忌々しい声によっていともあっさり払拭された。

「桜子ちゃん、ちょっといい？」

よくない。

せつかくいい気分になってたのに、たった一言でよくぞここまで私の気分を落とせるものだ。私はお世辞の笑顔も作らずに、顔を上げた。

「なんですか、千葉先輩。私、3限があるんですけど」

ないからここに座ってるんだけどね。でもまだ体調が万全じゃないから、帰りたいんですヨ。

だけど今日の千葉先輩は何故かいつも以上にしつこくて、私に有無を言わせず、さっきまで三浦君が座っていた場所に座った。なんだからもったいない。

「さっきここにいたのって、桜子ちゃんの同級生の三浦って生徒かな？」

「知ってるんですか？」

「有名だからね」

明るい口調とは裏腹に、千葉先輩の目は笑っていない。三浦君は見た目も頭もいいから、三浦君のことを羨望や嫉妬の目で見る生徒が多いのは知ってるけど、どうやら千葉先輩もその口らしい。

だけど、千葉先輩が三浦君のことを面白くなく思っている原因はそれだけじゃないようだ。千葉先輩は器用にも口元にだけ笑みを湛えながら、少し目を吊り上げてこう言った。

「マミーホスピタルの医者になったらとかどうか、話してるのが聞こえたんだけど」

あ、そうか。千葉先輩って、マミーホスピタルの院長の座に就くために私を口説いてるんだった。その千葉先輩が私と三浦君のさっきの会話を聞いていたとなると・・・面倒臭いな。

私は「それが何か？」という感じを装って、努めて明るく返事をした。

「はい。三浦君は将来、うちの病院で働くことになると思います」

「それって、桜子ちゃんと三浦が結婚するってこと？」

なんでそうなる。あんたの頭の中には、マミーホスピタルの医者になりたがる人間はすべて院長の座を狙っていて、それはイコール私の旦那になることを意味するという公式しかないのか。

ダメだ、頭痛がしてきた。

「違います。三浦君は単にうちの病院を気に入って、うちで働きたいと思ってるだけです。父も三浦君を医者として気に入ってるから雇いたいと思ってる。それだけです」

「でも、三浦が将来桜子ちゃんちの病院の院長になる可能性だって

ある訳でしょう?」

「そうですけど、だからって私と結婚する必要はありません。逆に言えば、私と結婚したからって院長になれるとは限りません。父は院長の器のある人でないと、院長として認めないと思います」

だから千葉先輩はうちの院長にはなれないし、パパも雇わないと思いますよ。

私は心の中でそう付け加えて、ベンチから立ち上がった。が、私の腕を千葉先輩がグツと引っ張ってベンチに戻す。

「何するんですか、離してください。私、もう帰るんです」

「3限出るんじゃないの?」

「それは・・・ちよつと頭が痛いから、帰ることにしました」

「だったらもう少し付き合ってよ。三浦がどうやって桜子ちゃんに取り入ったのか知りたい」

「だから!取り入ったりしてません!」

「取り入ってるじゃない。だから桜子ちゃんの病院で働くことになったんでしょ?」

あー、もう!!!!イライラする!!!!なんなの、この人!話してる
と、蜘蛛の糸に絡め取られてるみたいで気持ち悪い!

強引に千葉先輩の手を振り払おうとしたけど、千葉先輩も必死だ。
その指の力はますます強くなって私の腕に食い込んでいく。

やだ・・・痛い。それになんか怖くなってきた。

私は思わず三浦君の姿を探したけど、どこを見てももう三浦君の姿はなかった。3限が始まっているので人の姿もほとんどない。
どうしよう。逃げられない!

と、その時。

「おい、何やってんだ？」

もう一つ伸びてきた手が千葉先輩の腕を掴んだ。声は穏やかだけど、指の力は千葉先輩のそれよりも遥かに強いのは、千葉先輩の表情で分かる。

「痛いじゃないか！」

千葉先輩が私の腕を離すと同時に、自分の腕を掴んでいる手を振りほどく。

「何をするんだ！？」

「そりゃこっちの台詞だ」

「大体、お前は誰なんだ！？何の権利があって僕にこんなことをする！？」

「権利？んー、桜子の婚約者だから？」

「・・・え？」

千葉先輩の表情が固まる。私の表情はさっきから固まりっぱなしだ。

聖。どうしてこんなところにいるの？

「さ、桜子ちゃんに、婚約者なんかいるわけないだろう！？」

「いるわけないつつわれても、いるんだからしょうがないだろ」

「お前も、医学部生か！？」

「は？」

千葉先輩の思考回路についていけない聖が、まるで突然掛け算の問題を出された幼稚園児のような表情になって、私の方を見る。

「桜子。こいつ何言ってるの？」

「えー、と・・・」

「桜子ちゃん！この男が言ってることは本当かい！？」

「えー、と」

両方とも難題だ。取り合えず、答えやすい方の問題から答えておう。

「千葉先輩。本当です。この人は私の許婚です」

「許婚・・・」

「な？言つたる？」

千葉先輩がキツと私を睨む。さっきとは違って、今度は口も笑っていない。当然か。

「三浦は！？桜子ちゃん、あいつと結婚するんじゃないのか！？」

だから。しないって。

もう答えるのも面倒で、私はただ首を小さく横にだけ振った。

千葉先輩が視線を聖に移す。銀髪の名残が、今はどちらかというと金髪に近い髪色になっているのに加え、カラーの入ったサングラス。そんなチャラチャラした格好が、余計に千葉先輩の逆鱗に触れるようだ。

「ぼ、僕は認めないからな！」

「別にお前に認めてもらわなくてもいいんだけど」

「うるさい！認めないぞ！絶対認めないぞ！」

「あそ」

「桜子ちゃん！このことは三浦に話させてもらうからね！」

「はあ」

どーぞ、どーぞ。

「お前なんかが、桜子ちゃんの婚約者な訳ない！！！」

「そう言われても婚約者だし」

「とにかく認めないからな！」

捨て台詞にもならない台詞を捨てて、千葉先輩はすたこらさつさと走って逃げていった。気のせいだとは思うけど、遠くからずっと「認めないからな！」という声が聞こえ続けている気がする。

そんな千葉先輩の小さくなっていく後姿を見ながら、聖は悪戯っ子のように小さく舌を出して「『元』だけどな」と付け足した。

そんな何気ない冗談が私を傷つけているとも知らずに。

第3部 第14話

聖がベンチに腰を下ろす。今日のこのベンチは大盛況だ。

「何しにきたのよ」

「助けてもらつといてその言い草はないだろ」

「頼んでないし」

何、この安っぽいやり取り。言つてて恥ずかしくなる。そしてこんな事しか言えない自分が情けない。素直に一言「ありがとう」って言えば済む話なのに。
自己嫌悪に陥つて口を噤んでいると、私の目の前に見覚えのある傘が差し出された。

「これ・・・私の？」

「そーだよ。前俺んちに來た時、忘れてつたろ。つーか、急に走つて歸つたから落としていつたつて感じだけど」

「・・・」

「わざとああいうことする女、たまにいるけどな。俺が後で届けにきてくれるとでも思つてんだろうけど、お生憎様、俺はそんなに優しくないつて」

「・・・じゃあ、どうして持つてきたのよ」

またもやお礼も言わず、私はひつたくるようにして聖から傘を奪い返した。せめて「持つてきてくれたのよ」って言えば良かったな、と後悔しつつ。

「桜子は本当に忘れていっただけだろ。俺、下心のない女には優しいから」

「誰に対しても優しくないと思うけど」

「わざわざ傘を持ってきてやったのに、そーゆーこと言つか、普通？」

言わないわよね、普通。分かってる。だけど私の憎まれ口は止まらない。

「電話くれば取りに行ったのに」

「先月から携帯止められてるんだよ。代金払ってなくてさ」
「嘘」

聖がチラリと睨むように私を見た。携帯の代金も払えないくらい貧乏なことに私が驚いていると思ってるんだろう。だけど違う。私が「嘘」と言ったのは・・・

「この前、彼女と電話してたじゃない」

「え？」

「私が聖の家に行った時。彼女が携帯で聖と電話してるの、見たわよ・・・偶然」

正確には偶然ではないけれど。

確か聖が風邪を引いたとかで、彼女が心配してた。私はそれを見て密かに電話の相手が聖じゃないことを願ってたのに、あの部屋に帰ってきたのはやっぱり聖だった。

・・・ああ、もう。過去の気持ちなんか受け継がれなきゃいいのに。どうして聖なんかのこと、好きになったのよ、私。

聖が私の理不尽な胸の痛みに追い討ちをかける。

「ああ、なんだ、そのことか。彼女の番号くらいは覚えてるからさ、友達に携帯借りてかけた」

「・・・そう」

やっぱり聖らしくない。何をそんなにあのお嬢様にはまってるんだろ。そして私は何をこんなにひがんでいるんだろ。本当に嫌になる。

私は堪えられず、話題を変えた。

「風邪はもういいの？」

「とつくに治った。桜子こそ、ずっと学校来てなかったろ？どうしたんだよ」

「・・・私も風邪ひいてた」

「あー、あんな雨ん中、傘無しで帰ったら風邪ひくよなあ」

私が学校休んだこと、知ってるんだ・・・婚約破棄してうちには来づらいから、毎日大学に傘を届けにきて、私を探してくれてたのかな？医学部はまじめな生徒が多いから、聖のいでたちじゃ目立つたろうな。

「・・・ありがとう」

「ん？何が？」

「傘。ありがとう」

「ああ、なんだ傘のことか。どーいたしまして」

遅ればせながら言えたお礼に私自身がホッとする。が。

「こつちこそ、サンドイッチとかケーキとかありがとな。彼女が喜んでたよ」

でた。なんてデリカシーのない奴だ。聖にはそんなもの端から期待してないけど、それでもやっぱりまた気分が落ちる。私は抑揚のない声で、どういたしまして、とだけ言った。

聖が構内にあるシンボルの大きな時計台を見上げ、ベンチから立ち上がった。

「やべ、バイト遅れるから行くわ」

「バイトしてるの？」

「当たり前だろ。早く携帯くらいは復活させなきゃな」

「携帯くらいは、って・・・他にも止められてるものがあるの？」

「水道がそろそろヤバイなー。あ、あいつにも風呂とか使っなくなって言っとかないと」

「・・・」

風呂、ね。ここまで気を使われないと、いい加減笑えてくる。

「どうせ別のところで、無駄遣いしてるんでしょ」

また皮肉っぽい言葉が口をつく。だけど聖はそれをまたサラッと流した。

「馬鹿、無駄遣いするような金ねーよ。劇団に入れる会費だけでいいじゃないだ」

「会費？」

「うちの劇団はチケット代と劇団員の会費でなんとかもってるようなもんだからさ、会費だけはケチれねーんだよ」

「・・・ふうん」

「お陰で携帯も水道も危機的状況。電気は死守したいな」

「彼女とデートしたりしないの？プレゼントをあげたりとか」

「無理無理。そんな金も時間もない」
「・・・」

じゃあ、あのお嬢様はただ毎日聖の部屋で聖の帰りを待つてるだけ？掃除や料理をして？そして聖と少しだけ一緒に過ごして、自分の家に帰るの？随分と献身的な彼女ね。それとも、単に世間知らずなだけなんだろうか。

私は、かつて聖と結婚生活を送っていた頃の自分を思い出してみた。

毎朝7時に1人で起きて、1人で朝ごはんを食べて家を出る。仕事を終えて家に帰ってくるのは夜の9時頃。夕食はスーパ一の惣菜かコンビニ。聖は一日中ゴロゴロしていて、夕食は適当に外で済ましている。私がベッドに入る時には、聖はもう眠っているかまだ外出しているかだ。会話なんて当然ほとんどない。

私がやる唯一の家事は、夜にお米を研ぐこと。これが翌日の朝ごはんになるのだけど、本当は私はパン派だ。でも炊飯器にお米が入っていると、聖が朝昼兼用でそれを食べるので少しは家計も助かるから、いつの頃からか私もご飯を食べるようになった。

そしてもちろん、聖は家事なんて何もしなかった。

そんな私たちに比べて、今の聖とお嬢様はどうだろう。2人ともバイトをし、聖は一生懸命演劇をやっている。お嬢様は家事をしながら聖の帰りを待っている。私たちなんかより遥かに夫婦だ。

どうして私たちはそうななかったんだろう。スタートが悪すぎたんだろうか。そして、私は今こうして人生をやり直しているというのに、今度はそのスタートラインにすら立てなくなってしまうっている。

私は一体なんの為に人生をやり直しているんだろう……。

ノエルと付き合っていた頃は、ノエルと一緒にいることこそがその理由だと思っていけど、今はもうノエルはいないし、聖も「いない」。

「だけどな、」

聖の声で私は我に返った。聖がちよつとはにかんだような笑顔で立っている。

「ほら、最近俺、劇に出てないじゃん？」

「……そう言えばそうね」

日記によると、私が最後に聖の劇を見たのは飛んでくる2ヶ月前。そして飛んでからの2ヶ月間、つまり合計4ヶ月間、私は聖の劇を見ていないことになる。というか、私が聖の劇を実際に見たのは、高3の時の1回だけだ。

「前は端役ばっかだったから裏方やリつつ劇にも出るって感じだったんだけど、最近は大きな役を貰えるようになったからさ、今回の劇は役者、次回の劇は裏方、って風に完全に役割が分かれるようになったんだ。今は裏方やってる」

「そうなんだ」

「で、今度、次回作の役を決める劇団内のオーディションを受けるんだ。多分、主役を貰えると思う」

「主役？」

私の記憶が正しければ、聖はまだ主役をやったことがない。もし聖の言葉が実現すれば、初めての主役ということになる。さすがに私

もそれは凄いことだと心の底から思い、感心した。

今度こそ素直にその気持ちを・・・

「まだ、多分だけだな。彼女、俺の演劇をすげー応援してくれてるから、それが少しはプレゼント代わりになるかなと思って」

そう笑顔で言った聖は、私が今まで見たどの聖よりも輝いていた。

第3部 第15話

この夏、聖はずっと裏方だったらしく、私はあれ以来聖と会うことはなかった。オーディションの結果もまだ出ないようで、連絡もない。

時間的にも気持ち的にも長い長い夏休みが終わって気候が秋めいてきた頃には、私は毎日のように聖のことを考えるようになっていた。聖と、そしてあのお嬢様のことを。

あの2人は今も半同棲のようなことをしてるんだろうか。例え一緒にいれる時間が短くても。

一緒にいる時間が短いとか長いとかは、2人にとって重要じゃないんだと思う。2人にとって重要なのは、聖が演劇を続けていること。聖はそれを分かっている。だから、彼女が1人で家で待っていても気にせず劇団に行くし、プレゼントも「演劇」なんだ。

聖に主役を演じてほしい、純粋にそう思う。だけどそうなれば聖とお嬢様の絆はますます深まるだろう。それが嫌だ。堪らなく嫌だ。

なんて卑しい人間なんだろう、私。

久々のまともな外出にも関わらず、そして久々の再会にも関わらず、私はため息ばかりついていた。

「元気ないですね、桜子さん」

シズちゃんが向かいの席でパスタをフォークに巻きつける。

シズちゃんは今他県の大学に通っているけど、3連休を利用して東

京の実家に帰省してきた。夏休みは海外に行っていて、実家に帰ってくるのはお正月以来らしい。その時も私はシズちゃんお気に入りこのレストランで会った。らしい。

「ごめん、せっかく久しぶりに会ったのに」

「いいえ、原因は分かってますから」

「え？」

シズちゃんがニツと笑顔になる。相変わらずの薄化粧だけど、高校生の頃より遥かにメイクテクニックが上達していて、なんだか大人っぽい。

「許婚のことで悩んでるんでしょう？」

「ええ？どうして分かるの？」

「高校の時もそうでしたから」

「高校時代？」

聖のことで悩んだ記憶なんかないけどな。

・・・あ。もしかして。

シズちゃんは、パスタを一口食べ終えてから言葉を続けた。

「桜子さんが高3の退寮する日、私に言ったんです。『私、許婚のことが好きかもしれない。だからノエルと別れたのかも』って」

「・・・」

「でも桜子さん、自分でそれを認めたくないみたいでした」

「うん・・・日記にも直接はそう書いてなかった」

「月島君のことを好きなままだったんでしょね。今はどうなんですか？高3の秋から飛んできたってことは、自分が許婚を好きになった頃のことって認識ないです？」

「全くない。でも気持ちは受け継がれるみたいで、どうしてか分からないけど許婚のことが好きなの。凄く変な感じ」

そして凄く苦しい。

だけどシズちゃんはそんな私の苦悩を笑顔で吹き飛ばした。

「別にいいじゃないですか、好きなら好きで」

「え？」

「人を好きになるのに理由なんていりませんよ。こういうことがあったからこの人を好きになった！ってあんまりないと思うんですけどね、それよりも、気付いたらなんか好きになってたっていう方が多い気がする」

シズちゃんは自分の過去を振り返るようにしてそう言った。

「だから今、桜子さんがその許婚のことを好きだと思えるなら、それでいいじゃないですか」

「・・・いい、のかな」

「多分いいんですよ。好きなんですよね、その人のこと」

「・・・うん」

「なら、やっぱりいいじゃないですか。人の気持ちは変わるものだから、今の気持ちを大切にした方がいいですよ。それで気持ちが変わらない人と出会えたら、その人と結婚したらいいんだと思います」

「・・・」

気持ちが変わらない人。
ノエルに対する気持ちは変わってしまった。高3の時はまだノエルのことを好きだったけど、今は思い出そうとしないと思いつけない。逆に聖のことは何度考えまいたも思いついたら考えている。何度飛んでも聖への想いがつきまとう。そしてこの気持ちはきつと一

生つきまよってくる、そんな予感がする。

その想いを無理に閉じ込めようとする必要ってあるのかな。

前に28歳の自分の幻覚に「心変わりを認める」と言われた時は反発した。だけどシズちゃんの言葉は私の中に浸み込むようになってきた。

深く考えず、今の自分の想いを受け止めるのが恋愛なのかもしれない。

ただ、それを何かの行動に移すかどうかは別問題だ。

「彼ね、彼女がいるの」

「彼女？」

「うん。本気で付き合ってるみたい」

「それがどうかしたんですか？」

「え、だって・・・」

「やり直すの前の人生でも、許婚の人はその彼女と付き合ってたんでしょ？そして別れて桜子さんと結婚したんだろうから、今許婚に彼女がいてもいいじゃないですか。ほっといたらそのうち別れますよ」

あ・・・！言われればその通りだ。聖はきつとやり直し前の人生でも、21歳の時にあのお嬢様と付き合っていたに違いない。だって2人は私とは関係ないところで付き合い始めたのだから、私が人生をやり直してもやり直さなくても、二人が付き合うという事実が変わらない。そして、いずれ別れるということも。

別れる？あの2人が？

なんか・・・ピンとこない。

2人が一緒にいるところを見たことはないけど、さぞかし仲睦まじいことだろうから。

もちろん2人ともまだ若いし、特にお嬢様は高校生だし、聖はあんなだし、これから何があるかは分からない。でも、何があってもあの2人は別れなさそうな感じがする。だからこんなに苦しい。

だけど実際に聖は演劇をやめ、実家に戻って私と結婚した。それからしばらくすると外に女を作ってはいたものの、のめり込んでいた様子はないし、少なくとも結婚当初は浮気はしていなかった。それは確実だ。だって結婚当初の聖ときたら、いつも以上に無気力で・

・
そう。大学4年の冬に久しぶりに再会した時の聖はひどかった。人生に絶望したような感じで、私は「こんな奴とこれから一生一緒に過ごさないとイケないのか」と改めてがっかりした。そういう意味では私も人生に絶望していたから、お似合いのカップルと言えなくはないかもしれない。

あの時、聖に何があったんだろう。私は当時、実家と縁を切つてみたもののやっぱり自分一人の力じゃ生きていけないことに気付いて落ち込んでるんだろう、くらいにしか思ってたけど、実はもっと他に何かあったのかもしれない。私はそれに気付かなかったし、気付こうともしなかった。そのことに触れようとしなかった。

聖が私に心を開いてくれなかったのも当然だ。

食事を終え、シズちゃんが化粧室に立ったのを見て、私は携帯を開いた。

聖をあんな風に落ち込ませた何かを回避できるなら回避させてあげ

たい。もしその結果、本当に私と聖の結婚がなくなるとしても。でも、今の私にできることなんて何もない。できるとすれば、あのお嬢様だけだろう。だから、今の私に唯一できることは……

メールを立ち上げ、聖のアドレスを選択する。また携帯を止められるかもしれない。でも、いつか見てくれるだろう。

いつもの半分くらいの速度で、誤字に気をつけながら一文字一文字打っていく。

「劇のオーディション、どうだった？主役になれたかな？主役でも主役じゃなくても見に行くから、劇の日程が決まったら連絡下さい」

ここで改行。そして心の中にも改行を入れる。

「彼女を大切にね」

最後の一行を消したくなる前に、思い切って送信する。

すると意外なことに返事がすぐに来た。それもメールではなく、電話で。

こんなに早く電話が来るってことは……きっと良い知らせだ。そうに決まってる。

私は自分にそう言い聞かせながら携帯片手に慌てて席を立ち、店の扉をくぐると同時に通話ボタンを押した。間髪入れず、聖の懐かしい声が耳に飛び込んでくる。

「受かったぞ！」

「え？」

・・・ほらね。驚くことないじゃない。予想通りじゃない。それなのに聖の弾む声を聞いた瞬間、ポロポロと涙がこぼれた。それを聖に気付かれないよう、必死に冷静な声を絞り出す。

「主役に選ばれたの？」

「ああ。はあー、やったー！初めての主役だ！」

「・・・おめでとう」

「うん、ありがとな」

落ち着きなさい。声を震わせちゃダメよ。

「本当におめでとう。見に行くね」

「ああ」

「彼女には言ったの？」

「いや、まだ。ついさっき、発表があったんだ。桜子、絶妙のタイミングでメール寄こしたな」

「虫の知らせがあったのよ。・・・元婚約者ですから」

「あはは、さすがだな」

私は聖の笑い声を感じながら、携帯をギュッと握り締めた。

偶然だけど私はこの朗報をお嬢様より先に聖の口から聞くことができた。それで充分じゃない。

「早く彼女にも知らせてあげて。きっと喜ぶよ」

「ああ、じゃあな。また連絡するよ」

「うん」

私は涙をぬぐって携帯を閉じた。

そう、充分だ。私と結婚して不幸になるより、お嬢様と一緒にいて幸せになる方が絶対いい。

負け惜しみではなく、心からそう思えた。

だから。

もしこの時、聖とお嬢様に訪れる悲劇を知っていたなら、私はそれを全力で阻止しただろう。

第4部 第1部

聖とお嬢様が一緒にいるところを見ても大丈夫。その自信がつくまで1ヶ月ほどかかったけど、季節が秋から冬に変わり始めた11月のある日、私は聖の家を訪れる事にした。

どうしても、聖が主役を演じる劇の公演前に会って直接「おめでとう」って言いたい。そしてできればお嬢様に「聖をよろしく」って言いたい。

私はデパートに入り、エスカレータで地下に下った。前行った時は近くのカフェで適当にサンドイッチとチーズケーキを買って行っただけだから、今度はちゃんとしたお土産を持っていこうと思ったのだ。だけどデパ地下をウロウロして気がついた。私、聖の好みを知らないんだった。

前も同じことで悩んだのに、成長しないなあ。

お嬢様と「今から聖にお土産持つて行くんだけど、何がいいかな？」なんて気軽に電話できるくらいの仲になれば、楽だろうな・・・そうだ、聖の家にはお嬢様もいるんだ。だったら、別に聖の好みじゃなくてもお嬢様好みのお土産でもいいよ・・・ね？

ちよつと落ち込みそうになる心を励まし、チーズケーキ専門店で奮発してホールのチーズケーキを買う。お世辞かもしれないけど前のチーズケーキを喜んでくれたのだから、嫌いじゃないのだろう。それからコーヒーマーのコーナーに行き、コーヒーマ豆を物色する。

あ、でも豆より粉がいいかな？あのアパートにミルがあるとは思えないし・・・というか、コーヒーマーカーもなさそうだな。

それに、あのお嬢様はイメージからしてコーヒーより紅茶が好き
て感じた。紅茶の葉を買っていった方がいいかもしれない。

「何をそんなにお嬢様に気を使ってるのよ」と自分につっこみつ、
無難にアールグレイの葉とついでにティーポットまで購入する。私
は別にお嬢様を喜ばせたい訳じゃない。お嬢様が喜べば聖も喜ぶと
思うからだ。

そして私がそういう風に考えられるのは、私が間違いなく聖が好き
だからだ。

ノエルのことは今も好きだとは思う。だけどそれはあくまで思い出
で、今私が好きなのは聖だ。だから聖を喜ばせたい。それだけだ。

デパートの紙袋を手にいそいそと外へ出て腕時計を見ると、午後
8時。

さて、これからどうしようか。

聖は毎晩劇団で稽古をして、10時くらいに家に帰るらしいからま
だだいぶ時間がある。それを見込んでチーズケーキにはたつぷりド
ライアイスを入れてもらったからこのままブラブラしてもいいん
だけど・・・

いや、ダメだ。一人で街をブラブラなんてしてたら、お嬢様に会う
勇気がなくなってしまう。

私は携帯を開いた。こういう時、友達がいるっていい。

「もしもし」

「今、忙しいんだけど」

「嘘ばかり。どうせ彼女と一緒に遊んでるでしょ」

「はずれ。勉強中」

「・・・」

同じ医学部生として、聞き捨てならない台詞だ。

「三浦君。そんな勉強ばかりしててもいい医者にはなれないよ」

「俺もそう思う。でも、勉強もできないようじゃいい医者にはなれないと思う」

「・・・」

いちいちムカつくこと言うんだから。

「ねえ、今、家？今から2時間くらい、私に付き合う気ない？」
「ない」

「お願い！私もうすぐ失恋しに行くの。ちょっと元気とご利益をちょうだい！」

「言ってる意味が全く分かんないんだけど」

「知りたいなら付き合って！」

三浦君は「別に知りたくないし」と言いながらも、私がいる駅まで来てくれることになった。ありがたい。三浦君と一緒に将来の話でもしていれば明るい気分になるだろうし、希望も持てる。

三浦君になら私のこの時間旅行のことを話してもいいかもしれない。三浦君の性格じゃ信じてくれないかもしれないけど、三浦君に秘密を作っておきたくない。だってこれからずっと一緒に仕事をするんだから。

三浦君は20分ほどで待ち合わせのお店にやってきた。

「居酒屋？」

三浦君がお店の看板を見て眉をひそめる。

「飲みたい気分なの！」

「そーゆーことは、失恋した後の方がいいんじゃない？ベロンベロンになって告白するってどうかと思うぞ」

告白しに行く訳じゃないけど。許婚に告白も何もないし。
ま、いいや。

「じゃあ一杯だけにしとく」

「割り勘な。よーし、飲むぞー」

「ちよつと！何よ、それ！」

とまあ、ワイワイやりながら私と三浦君は掘りごたつ式のテーブルに座り、ビールとウーロンハイで乾杯した。思えば私、こんな風に誰かと二人で居酒屋に来たことってない。大学では面倒だからとサークルに所属していなかったし（今もしてないけど）、病院のメンバ―で忘年会とかはやるけどそれだって仕事みたいなものだ。

ただ心を休めるためにだけに友達と飲む。

なんて無駄で、なんて有意義な時間だろう。

「で、誰に告白しに行くんだよ」

あつという間に2杯目のビールに進んだ三浦君が訊ねてくる。

「告白しに行くんじゃないんだって。失恋しに行くの」

「どーゆー意味？」

「好きな人が彼女とラブラブなところを見て、絶望してくるってこと」

「随分ストイックだな」

「うん。でもそれくらいしないとちゃんと諦めがつかないから。三浦君は失恋した時、どうやって立ち直る？参考に聞かせて」

「失恋したことがないから分からない」

「・・・どこまでも嫌味な男だな。もともと私も、前の人生では失恋なんかしたことない。恋愛したことがなかったから当然だけど。」

「桜子は今まではどうやって失恋から立ち直ってたんだよ？」

「私は・・・」

高3の夏の出来事が蘇る。あれは失恋と言っただろうか。

「いつかまたその人と付き合えるって信じてたから、立ち直るものもない、って感じかな」

「そいつとは復活できたのか？」

「ううん。その前に今の人を好きになっちゃったみたい」

「みたい？他人事だな」

「うん、他人事だもん。私ね、時々時間を飛んじゃうの。最初は28歳から16歳に飛んで、そこからまた17歳に飛んで、今また21歳に飛んできたの」

三浦君が口からグラスを外す。

「はあ？何言ってるの？」

「私の秘密を言ってるの。本当の私は28歳。三浦君よりずっと年上なんだから」

「桜子、頭大丈夫か？」

「三浦君は自分のパートナーの頭がおかしいと思う？」

「・・・思わない。思いたくない」

「だったら信じて」
「・・・」

三浦君は少し悩んでから再び口を開いた。

「じゃあ1つ質問。桜子が28歳の時、俺はどんな医者になってる？」

「知らない」

「知らない？」

「うん。前の私はC大に通ってなかったから、三浦君のことも知らなかった。マミーホスピタルに三浦なんて医者はいなかった」

「・・・」

「だけど、今はこうして三浦君と出会えて、一緒にマミーホスピタルで働ける。人生をやり直せて、本当にラッキーだと思ってるよ」
「・・・」

三浦君の切れ長の目がじっと私の目を見つめる。私もグラスをテーブルに置き、三浦君の目を見つめ返した。

そしてしばらくの沈黙の後、三浦君は小さく息をついてビールを飲み始めた。

「分かった、信じるよ。もしこれから大きな台風とか地震があるなら教えてくれ。そこには行かないから」

「ふふ、分かった。なかったと思うけどね」

「ならいいや。・・・じゃあ、代わりに俺の秘密も教えてやるよ」
「え？」

私のグラスの中で氷が溶け、カランと音がした。

第4部 第2話

「彼女のことなんだけどさ、」

「うん」

「俺と彼女が付き合い始めたきっかけは、彼女が俺に一目惚れしたからなんだ」

「・・・ふーん」

イケメンも楽じゃないネ。

私は「なんだ」と思いながら少し薄くなったウーロンハイを飲んだ。ところが、三浦君の話はそれで終わりじゃなかった。

「と、彼女は思ってる」

「え？思ってる？」

「だけど本当は違うんだ」

「へえ」

「桜子！このことは彼女にも言っていないんだ。絶対秘密だぞ」

三浦君が少し赤くなる。

何よ、それ。面白そうじゃない。私は本腰を入れて聞く体勢に入っ
た。

「高1の時に俺と彼女は同じクラスになって、彼女が俺に一目惚れした。それから色々あって・・・随分傷つけたりもしたけど、付き合う事になったんだ。でも、俺と彼女が初めて会ったのは、高校に入学した時じゃない」

「ってことは、入試の時？」

「違う。もっとずっと前」

「中学の時？」

「もつと」

「ええ？もつと前？」

三浦君が頷く。

「もつと前・・・って言ったら、小学生とか？」

「ああ。正確には俺が小学2年生の10月29日の午後5時18分過ぎ」

「・・・正確には、ってレベルじゃないね」

「当たり前だろ。自分の妹の生まれた日時なんだから」

「妹？」

三浦君に妹がいたなんて初耳だ。日記にも人物紹介にも書いてなかったから、以前の私も知らなかったのかもしれない。

「8つ離れてるんだ。この前14歳になったところ」

「あ、そっか。10月29日生まれだもんね」

「うん。妹が生まれる時、俺も親父と一緒に立ち会ったんだ。というか、立ち会わされた。『妹が生まれる瞬間が見れるんだぞ』ってな。だけど母親の出産シーンは俺にとってはかなりショッキングな光景だった。まだ8歳だったから、子供がどうやってできてどうやって生まれるのかも知らなかったのに、いきなり母親が痛い痛いって泣きながらイキンでるところ見せられたんだもんね」

そりゃそうだろう。大人の男でも気絶してしまうほどの光景だ。物心つく前ほど子供でもなく、自然の摂理を理解できるほど大人でもない小学2年生の男の子には確かにキツイ。

「それで、何時間も母親が苦しんだ拳句、尻から赤ん坊が何だかよく分からない血みどろの物体が出てきて・・・親父はすげー喜ん

でたけど、俺は……」
「俺は？」

三浦君はちよつと怒ったように私を睨んだ。なんで私が怒られないといけないのか。

「怖かったんだよ！仕方ないだろ！」

「うんうん、で、どうしたの、三浦少年は？」

「……逃げた」

「は？」

三浦君が更に赤くなる。

「だから、逃げたんだよ！出産シーンも出てきた赤ん坊も怖くつて、分娩室から走って逃げ出したんだ」

「そ、そう」

「それで……病院の裏手で、一人で泣いてた。お化けを見たような気分だった」

「……かわいいじゃない。」

当時の三浦君は小学2年生で、もちろん今の三浦君と全然違うんだけど、私は思わず今の三浦君が一人でうずくまって泣いているところを想像して笑ってしまった。

「笑うな！」

「ご、ごめん……そうだよ、仕方ないよね。あれは小2には怖いよ」

「だろ！？俺、絶対自分が父親になっても立会い出産はしないって心に誓ったんだ」

「産婦人科医を目指してるくせに？」

「だから、それは……。その時にさ、女の子が近づいてきたんだ。赤いランドセルに負けなくらい真つ赤なほっぺをしてて身体も丸っこくて、なんか全体的にりんごみたいな子だった」

りんごみたいな子？……。あ、それってもしかして！

「彼女！？」

「よくわかったな」

「今でもりんごみたいだもの」

「……悲しいかな、否定できないな。それに、だから俺も高校ですぐに『あ。あの時のりんごちゃんだ』って分かったんだ」

「すごい！運命的な再会ね」

「ああ。でも彼女はあの時泣いてたのが俺だって気づいてないから、俺も言つてない。恥ずかし過ぎる」

「そうなんだ。結婚式で暴露していい？」

「死んでも許さん」

「ふふふ、冗談よ。で、その時りんごちゃんとどんな話をしたの？」

私たちのテーブル横の通路を店員さんが忙しく行き交う。その時々
に投げられてくる視線に三浦君は居心地が悪そうだ。

三浦君は男の店員さんを捕まえてビールを追加し、私にはウーロンハイではなくウーロン茶を頼む。私ももう1杯飲みたいところだけど、この後控えてる大イベントと三浦君の面白い過去話に免じて許そう。

「くそ。個室にすりや良かったな」

「ねえ！それで、それで！？」

「え？ああ、あの時な……。病院は俺の家から離れた場所にあつたから、りんごちゃんは俺とは違う小学校の子で初対面だったのに、『大丈夫？』って聞いてきたんだ。思わず何の冗談だっと思ったん

だけど、りんご柄のハンカチを俺に差し出してさ。『犬に追いかけられたの?』って。多分、自分がそういう経験あるんだろうな」

「あはははは」

「俺は正直に『生まれたての妹が気持ち悪くて逃げてきた』って言ったんだ。そしたらりんごちゃんは『いいなあ。私、一人っ子なの私もかわいい妹が欲しいなあ』って。俺が『ちつともかわいくはない』って言ったらりんごちゃんはすげえ寂しそうに『そんなこと言ったら妹がかわいそうだよ』って言うんだ」

「うんうん」

「妹は君の妹になりたくて生まれてきたんだから『ありがとう』って言ってあげなきゃ、って」

優しい子だ。大人でも親にならなきゃそんなこと言えないのに。なつても言えない人もいるのに。

その優しさは三浦少年にも伝わったらしい。

「俺もそう言われればそうかもって思って、少し気分が落ち着いたらそれから俺とりんごちゃんは手を繋いで病室に戻って、一緒に妹を見たんだ。親父は『その子、誰だ?』って驚いてたけどな」

「ふふふ」

「りんごちゃんは、生まれたての赤ん坊にも感激してたけど、それ以上にその場所に感動してた」

「場所?病室ってこと?」

「病室っていうか、産婦人科。当時はなんて科かなんてことは俺達は知らなかったけど、りんごちゃんは『ここ、不思議なところだね。病院で普通はみんな悲しそうな顔してるのに、ここではみんな笑ってるんだね。赤ちゃんてみんなを笑顔にできるんだね、すごいね』ってほっぺをますます真っ赤にして目を輝かせながら言うんだ」

この辺は実に子供らしい感覚だ。だけどそれをきちんとした言葉に

するのは凄く難しい。普通は「かわいいね、かわいいね」とかで終わってしまうものだ。

三浦君の彼女が文学部だったことを思い出す。本を読んだり言葉を勉強したりするのが好きなのかもしれない。

「それ以来、俺の中で赤ん坊は『すごい物』になった。だから妹をかわいがることもできた。まさかそのりんごちゃんと高校で再会するとは夢にも思ってたけど」

「本当に運命の再会なのね」

「そう。しかも俺に医者になるよう勧めたのも彼女だった。高校時代に『三浦君は理系科目が得意だからお医者さんになったら？』みたいなこと言われて、最初に頭に浮かんできたのがあの時の産婦人科だったんだ。それから実際に医学部に入ってなんとなく外科に憧れたけど、結局産婦人科に戻ってきた。俺達って普段は俺がずんずん進んで行って彼女がそれを必死に追いかけてくるって感じなんだけど、いざって時はいつも彼女に助けられてる気がする」

「それ、将来尻に敷かれるパターンよ」

「嫌だな」

三浦君が本当に嫌そうにそう言うので、私は大爆笑してしまった。あのりんごちゃんが三浦君を尻に敷く。ふふ、なさそうで案外アリかも。

だってなんだかんだ言っで、尻に敷かれるのは惚れてる側だから。

聖とお嬢様だったら、どっちが尻に敷かれるんだろう。

聖かもしれないな。

もし私と聖だったら、間違いなく私だろうけど。

第4部 第3部

三浦君の運命的な再会の話と「潔く散って来い」という嬉しいのか嬉しくないのかよく分からない励ましの言葉に送られて私が聖の家に着いたのは、午後11時過ぎだった。

いくらなんでも、もう聖は家に帰っているだろう。そう思ってチャイムを鳴らしたけど、中からの返事はなかった。ノックしても反応なし。

まだ帰ってないのかな。でも少なくともお嬢様はいると思うんだけど。

もしかしたら、今日は聖が旅行か何かで家に帰らなくて、お嬢様も来てないのかも。

しまったな。驚かせようと思って連絡無しで来たのがまずかった。

そう思っただけで何気なくドアノブに手を伸ばすと、驚いたことにそれは何の抵抗もなくカチリと右に回った。

鍵の締め忘れ？それって中に2人ともいるってこと？

2人が「夢中」でチャイムにもノックにも気付かなかったのかも、なんて良からぬことが頭をよぎり、音を立てないように扉を閉めようとしたけど、中からは何の声も音もしない。

「・・・聖？」

電気がつけっぱなしの部屋に向かって、玄関から思い切って声をかけてみる。だけどやっぱり何も聞こえてこない。

ということとは、鍵を掛け忘れて少しどこかに出掛けただけなのだろう。

なんだ、びっくりした。でも、こんな夜中に鍵も掛けずに一体どこへ・・・

「あ」

思わず声が出た。

きっとあそこだ。それだったら電気がつけっぱなしなのも鍵が掛けられていないのも納得がいく。すぐ戻ってくるだろうから。

私は玄関から出て、アパートの廊下から少し身を乗り出すようにして20メートルほど先を見た。

明るいい外灯がその建物を夜の中で浮かび上がらせている。コンビニだ。

きつと聖とお嬢様は、お嬢様がバイトをしているあのコンビニに買い物にでも行っているのだろう。もしくは、今日はお嬢様のシフトが遅い時間で、聖が迎えに行ってるのか。

ここで待っていてもいいけど・・・家に帰ってきたら、元婚約者が待ち伏せしてるってのも怖いかな。

それならコンビニへ行って「聖に主役のお祝いを持ってきたけどいないから、帰ろうと思ってこのコンビニに立ち寄ったの。なんだ、ここにいたのね」って偶然を装う方がありかも。

良く考えればそれはそれで怖いかもしれない、という疑問にはそつと目を瞑り、私は数ヶ月前お嬢様と出会ったコンビニへ向かった。ここ数ヶ月、聖とお嬢様のことばかり考えていたからなんだかお嬢様のことをよく知っている気になってたけど、私がお嬢様が会った

のは、あの雨の日一度だけだ。お嬢様は私が誰かなんてももちろん知らないし、もしかしたら聖に許婚がいたことも知らないかもしれない。

だったら下手に自己紹介するよりも、聖の他己紹介に任せたほうがいいだろう。

そんなことを考えながらコンビニに入った瞬間、その異様な雰囲気思わず足が止まった。何が異様かと言われると説明しにくいんだけど、とにかく空気が異様だ。膨らましすぎた風船が破裂する一秒前。そんな張り詰めた空気。

見ると、レジの内側でコンビニの制服を着た女の子が一人、青ざめた顔で立ち尽くしていた。コンビニ強盗でもいるのかと焦ったけど、辺りを見回してみても店内にいるのはその女の店員さん一人だけだ。体調でも悪いのかもしれない。

「あの。大丈夫ですか？」

声をかけると、店員さんはビクツと怯えるように私を見た。

この子、前にお嬢様と一緒にいた女の子だ。確か「ひろこ」とか言ってた。あの時はかわいくてすっかりした子だと思っただけど、今はその面影は全くなく、完全に怯えきっている。

私はレジに近づいた。

「何かあったんですか？誰か呼んできませんか？」

「ひろこ」がフルフルと首を振る。近づいてきて欲しくないみたいだ。私は一旦足を止め、悩んだ。本人が来るなというのだから放っておいた方がいいのかもしれない。だけど明らかに様子がおかしいし……

その時、レジの内側の様子が目に飛び込んできた。そこにうずくまる、広い背中が。

「・・・聖？」

私の声が聞こえたのか、その背中がゆっくりと振り返る。やっぱり聖だ。

どうしたの？どうしてそんなに真つ青なの？

今度は聖の肩越しに、床に伸びる白い足が見えた。無意識に視線を足の上の方へ動かす。

紺のプリーツのスカート。こんな時でもその生地の上等さは一目で分かる。

その更に上・・・上半身は、床にかがみこんでいる聖の腕の中にあつた。

聖の瞳の揺らぎに呼応するように、聖の腕の中の長い髪が揺れた。その間から見えたのは・・・！

「あつ・・・ど、どうしたのよ!？」

そこに横たわっているのは間違いなくお嬢様だった。だけどその顔の右半分が見るも無残にただれている。

火傷？違う。何かもつとこう・・・溶けているような・・・。

店内放送の音楽が途切れ、間抜けたDJが場違いなK・POPの紹介を始めた。それに甲高い歌声が続く。だけどそんなうるさい音楽よりなにより、自分の息と心臓の音が一番うるさい。

更に視線を動かすと、お嬢様の足元に金属製のザルが落ちていた。おそらくコンビニ内で売っているポテトなんかのフライ物を揚げる時に使うザルだ。こんな物が床に転がっているということは。

「・・・それが顔に当たったの？」
「・・・」

聖は無言で頷いた。

「ひろこ」という女の子がよろけて、煙草が入っているケースにぶつかり、煙草が床に散らばる。

私だつてよろけたい。青ざめたい。そしてできることならここから逃げ出したい。

だけど私は医者だ。

今はまだ学生だけど、実際には4年も産婦人科医として働いた医者だ。

私は携帯を開いて119番を押した。

「聖。救急隊員の人にここの場所を説明して。聖の家の住所を言って、その前にあるコンビニだつて言えばいいから」

「あ、ああ・・・」

「さあ、立って。その子は私が診るから」
「でも、」

「任せて。聖より私の方が医学の知識があるわ」

「・・・分かった。頼む」

聖は生まれたての赤ちゃんでも扱うような慎重な手つきで、お嬢様

の頭を私に預けた。そして私の携帯を手にコンビニの外へ走って行った。救急車が来た時、場所が分かりやすいようにするためだろう。

「さあ、あなたもボーっとしてないで。水はある？」

「ひろこ」という子は、自分に言われているのだとしばらく気付いていない様子だったけど、やがてハツとしたように頷いた。

「水道水なら」

「ペットボトルの水は？」

「売り物ならあります」

「その方がいいわ。それと氷。袋に入った冷凍食品をできるだけ持つてきて」

「は、はい」

「ひろこ」は足を絡ませながら飲料水コーナーへ走って行き、2リットルの水を持ってきた。私は自分の鞆からハンカチを取り出してそれを濡らし、更に「ひろこ」が持ってきた冷凍食品の袋をそのハンカチで巻いてお嬢様の顔の右半分に押し当てた。煮えたぎった油のついたザルが直撃したのなら、とにかく冷さなくてはいけない。

それにしても、どうしてこんなものが顔に……。

いや、今はそれどころじゃない。とにかく応急手当だ。皮膚科は専門外だけど、幸い今は大学に通っていて色んな医学の勉強をしているから、皮膚科系のことも少しは分かる。

それからの十数分はまさに戦いだっただ。最初の処置で傷の残り度合いが随分変わってくる。顔の、それもまだ高校生の女の子の怪我だ。なんとか最小限に留めてあげたい。

本人のためにも、聖のためにも。

そう思えたから頑張れた。

遠くに救急車の音がかすかに聞こえる。

どうかあれが幻聴ではありませんように。

第4部 第4話

処置室の外の廊下にいる時間は途方もなく長かった。後から思えばそれは1時間くらいのことだったのだけど、聖と私にとっては永遠のような時間で、早く終わりが来て欲しいのかどうかも分からなかった。私でさえそう感じているのだから、聖は・・・

「俺のせいなんだ」

聖が独り言のようにポツリと呟いた。目は開いているけど何も見えない。

「俺のせいでこんなことに・・・」

「聖が怪我をさせたわけじゃないでしょ」

こんな月並みな言葉しか言えない自分が情けない。何かもつとこう、聖の不安を取り除けるような言葉を言えればいいのに。だけどそんな言葉はないのだと、次の聖の一言で思い知った。

「俺が怪我させたんだ」

「え、でも・・・わざとやったんじゃない、」

「わざとやったんだ」

聖の言い方は、わざと自分の罪を増幅させるような、それを自分に自覚させるような言い方だった。

聖が彼女をわざと怪我させるなんて、あるはずなのに。

「直接怪我をさせたのは、コンビニにいた店員の女だ。だけどあの女にそんなことをさせてしまったのは俺だ。俺は・・・俺がいなか

つたら、こんなことにはならなかった」

「聖……」

聖は何があつたのかは詳しく話さなかった。隠したいというより、話す気力がないようだ。だけど大方の想像はつく。あの「ひろこ」という子とお嬢様と聖で三角関係になつて揉めた拳句、あんなことになつてしまったのだらう。もしかしたら聖の悪い癖で、「ひろこ」にも手を出していたのかもしれない。それなら聖の言葉の意味も分かる。

不意に処置室の扉が開いた。私は緊張が緩んで正直少しホツとしたけど、聖は更に緊張が増したのか声も出ないようで、中から出てきた中年の医者をただじつと見ているだけだ。

医者の方から聖に話しかける。

「君はご家族かな？」

「……いえ」

「ご家族は？」

「電話したから……今、向かつてると思います」

「そうですか」

シヨックの余り混乱しているのか、一番大事なことを聞き忘れている聖に代わり私が医者に訊ねる。

「あの女の子は大丈夫ですか？傷は？」

聖が私の質問でハツとしたように我に返った。そしてそのとたんに医者に掴みかかる。

「そうだ、あいつは!？」

「聖! 落ち着いて」

「あいつ、大丈夫なのかよ!？」

なんとか聖を医者から離そうとしたけど、聖はさっきまでとは別人のように感情を露にして医者から離れようとしないう。まるでそうすれば彼女も離れていくとでもいうように。

こうやって医者に感情をぶつける人間は少なくない。特にベッドの上にいるのが自分の大切な人であればあるほど、普段冷静な人間でも医者には八つ当たりをする。

私は、激昂する聖と当惑する医者との間の温度差をなくす一番手っ取り早い方法を取ることにした。

パンツ!

乾いた音が廊下に響いた。

聖が左頬を押さえ、言葉を飲む。

「聖。ああいう怪我が命に関わることはないわ。応急処置もしたし、救急車もすぐに来てくれた。これ以上ない程スムーズに治療できてるはずよ。落ち着いてお医者さんの話を聞きましょう」

「・・・」

「すみません。お願いします」

医者に向き直り頭を下げると、医者は何事もなかったかのように無表情に襟元を正した。この手のタイプの医者を「鼻持ちならない」と嫌がる人も多いけど、私は嫌いじゃない。完全なる第3者になるというのも医者の一つの有り方だ。でも、小児科では通用しないだ

ろつ。

「ご家族でないのなら詳しくお話はできませんが、そちらのお嬢さんがおっしゃる通り、最善の状態です」

その言葉を聞き、聖が「なんだ、よかった」と胸をなでおろす。

聖、違うよ。ここはホツとするところじゃない。

「最善の状態」というのは「なんともない」という意味じゃない。

「あの怪我から想像しうる状態の中では一番いい状態」という意味だ。

あの怪我が跡形もなく完治するとは思えない。

少し落ち着きを取り戻した聖が「会えますか？」と訊ねると、医者には「会えますが、まだ意識がありません。今から個室に移しますので、そちらでどうぞ」と答えた。

処置室からストレッチャーに乗せられて出てきたお嬢様は顔のほとんどを包帯で覆われていて、さすがに痛々しかった。コンビ二のあのおつちよこちよい振りを思い出すと、胸が痛む。この子はその時のようにまた元気にバイトができるようになるのだろうか。

用意された個室に聖とお嬢様が入っていくのを見届けて、私は廊下の椅子に座った。今はお嬢様の意識がなくても二人きりにしておいた方がいい気がする。

もう真夜中で全ての病室の電気は消えているけど、お嬢様の病室だけからは光が漏れていて、そこに「早く目が覚めてほしい」という聖の想いが込められているように感じた。

「あなたが応急処置をしたんですか？」

見上げると、さっきの中年の医者が私の傍に立っていた。

「はい」

「処置の仕方やハンカチの巻き方が素人離れしてますね」

「医学部に通っているのだから」

「なるほど。何年生ですか？」

「4年生です」

「4年生ですか。それじゃやっぱり素人離れしてますね」

医学部の4年生など素人と変わりないということか。そして私が医学部の4年生以上の技量を持っていることもきちんと見抜いている。この医者がお嬢様の手当てをしたということは、本当に「最善の状態」なのかもしれない。

「患者との関係は？」

「ありません。男性の方とは知り合いますが、たまたま居合わせただけです」

「それならお話してもいいでしょう。患者のご家族が到着したようなので今から話しに行きますが、傷は残ります。一生」

「・・・」

「ただ、あなたの処置が非常に良かった。あなたがいなければ、傷は広範囲に残ることになったでしょう」

医者はそう言うのと、エレベーターの方へ向かって歩いて行った。

・・・よかった、のだろうか。

確かに「最悪の状態」ではない。医者としてはまさに最善を尽くしたということだ。

ただのお嬢様にとって「一生傷が残る」という事実は変わらない。それを「本当はもっと酷いはずだったんだよ。これぐらいで済んでよかったんだよ」と言われたところで何の慰めになるというのだろうか。

廊下にある窓から空を見上げると、細い三日月が見えた。

静かだ。どの病室からも何の音も聞こえてこない。目の前の病室からも。

この静寂は夜のせいだと思いたい。

それでも耳を澄ませると、色んな音がかすかに聞こえてくる。

エレベーターの動く音、医療機器のデジタル音、ストレッチャーやワゴンを転がす音。

そんな音に混じって、足音が聞こえた。次第にこっちに近づいてくる。

私は窓の外から廊下の奥へ視線を移した。

看護師の後を追いかけるようにして、3つの人影がやってくるのが見える。

廊下の光は薄暗くて顔ははっきり見えないけど、中年の男女と若い女の人だ。

看護師とその3人は、バタバタと唯一電気がついている病室へと駆け込んでいった。

――静寂、怒号、そして何かが落ちて壊れる音。

予想はしていたことだ。それでも私は耳を塞ぎたくなかった。

けどそんなことをしたら、聖が出てきた時にどんな顔をしたらいいか分らない。

私はぎゅっと目を閉じること意識をひたすら集中させた。

聖はそれから5分と経たないうちに病室から出てきた。

さっき私が打った左頬が、更に赤く膨れている。

そしてその顔色は、さっきとは比べ物にならないほど青くなっていた。

第4部 第5部

聖と一緒にタクシーでアパートに戻った時には、空はうつすらと明るくなり始めていた。その朝日の中でも聖の顔色は悪いままだった。ついて来いとも来るなとも言わずに無言で部屋に入っていく聖の背中を追いかける。

聖は部屋に入ると畳の上に座り、壁にもたれた。左足は伸ばし、立てた右膝の上に右腕を置いてそこに顔を乗せる。髪で顔が隠れ、表情が分からない。泣いているのか、眠っているのか・・・とにかく心身ともに疲れ切っているのは確かだ。痛々しくて見ていられない。それに、私にはやらなきゃいけないことがある。

私は聖が動かないことを確認してそっと部屋を出ると、小走りでアパートの前の道路を渡った。朝晩問わず白い電灯の光が灯されてるそこは、こんな時間なのに何故か客で賑わっていた。夜遊びから帰ってきた学生、夜勤明けのサラリーマン。そんな感じの客がパツと見ただけでも5、6人はいる。

だけど私の目当ての人物は、レジのこちら側ではなくいつも通り向こう側にいた。

「こんにちは」

時間的には「おはよう」が正解だけど、私は別に挨拶したかった訳じゃない、ただ呼びかけたかっただけだ。それなら「ねえ」とか「ちよつと」より「こんにちは」の方が相手の警戒心が解けるかもしれない、そう思ったのだけど、思い通りにはいかなかったようだ。

私の声を聞いた「ひろこ」はビクツとして顔を上げた。

あれから6時間近く経っている。それも夜中から朝にかけての6時間だ。普通なら女の子がぶっ通しでバイトするような時間帯じゃないだろう。

「ひろこ」は聖が来るのをここで待っていたのかもしれない。待つて、お嬢様の容態を聞きたかったのかもしれない。

ここで何があつたのか詳しく知らない私は、できるだけ事務的な口調で「ひろこ」に伝えた。

「傷は最小限に留まりそうだけど、一生残るわ」

「・・・」

「今はあの子のご家族がついてる」

「・・・伴野さんは？」

「家にいるわ。あの子のご両親に追い出されたみたい」

「・・・」

「ひろこ」は俯くようにしてレジをじつと睨んだまま、両手を握り締めた。その右手首に赤い点々がいくつか付いているのが見える。聖の話では、お嬢様にザルをぶつけたのはこの子らしい。その時に自分も油で怪我をしたのだろう。

「あなたも病院に行った方がいいわよ。じゃあね」

私がそれだけ言ってコンビニから出ようとすると、「ひろこ」が「あ、あの」と言って追いかけてきた。見覚えのある紙袋が私に差し出される。

「これ・・・さっき置いたまま救急車に乗っていかれたから・・・」

・・・私が聖へのお祝いに買ったチーズケーキと紅茶だ。聖とお嬢様に一緒に食べてもらおうと思ってたのに・・・こんなことになるなんて。

もはやお祝いなんてできる状態ではないけど、そんなことを「ひろこ」に言っても仕方がない。

抑揚のない声でお礼を言っつて紙袋を受け取ると、その持ち手の部分は驚くほど冷たかった。

「冷蔵庫に入れておいてくれたの？」

「はい。中の箱に要冷蔵つて書いてあつたから・・・」

「・・・そう。ありがとう」

私がもう一度お礼を言つと、「ひろこ」は深々とお辞儀をしてコンビニの中へ駆け戻つて行つた。悪い子ではないのだろう。ただ、何かが一つ狂つてしまった。その小さな狂いが凶器になった。

聖もお嬢様も「ひろこ」も、みんな傷ついている。

私は身体の傷はある程度癒すことができる。でも心の傷は専門外だ。医者としても、人間としても。傷ついた人を見て、かわいそうだと少し胸を痛めることくらいしかできない。本当に情けない人間だ。

自分につかりしながらアパートへ戻ると、カーテンから差し込む朝日がさつきより明るくなっていた。その中で聖は同じ姿勢のまま俯いている。寝ているのなら起こさない方がいい。今は眠れるだけ眠らせておいた方がいい。

ただ聖が起きた時、私はどうしたらいいだろう。傍にいれば聖は少しは癒されるのだろうか。それとも一人きりの方が、思う存分落ち込めていいのだろうか。

私は悩んだ挙句、後者を選ぶことにした。今の私じゃ聖を癒せない。それなら邪魔なだけだ、いない方がいい。せつかく「ひろこ」がコンビニの冷蔵庫に入れて置いてくれたけど、チーズケーキも持って帰ろう。

いつかまた、こうやって聖とお嬢様にケーキを買って来れる日が訪れればいいのに。心からそう思う。聖の傷を癒せるのはお嬢様だけだ。

物音を立てないよう足を滑らせるように部屋の廊下を歩く。と、チーズケーキの入った紙袋の中から「カチャカチャ」という音が聞こえてきた。何だろうと思い紙袋を床に置いて覗いてみると、その音はチーズケーキの箱の上にある、白いビニール製の包みで包装された丸っこい物体から聞こえてきているのが分かった。

・・・しまった。

包みのテープを注意深く外すと、中から茶色い陶器の欠片が現れた。ティーポットだ。コンビニでお嬢様の応急手当をしている時に、割ってしまったようだ。

仕方ない、家で処分しよう。

欠片に注意しながら包みを閉じ、もう一度テープで止める。ところが「これでよし」と思った瞬間。

「イタッ」

しまい忘れた欠片が右手の人差し指をかすめた。指の腹に1センチほど切れ目が入り、次の瞬間、そこからぷっくりと赤い血が流れ出

す。

痛い。でもお嬢様の負った傷を考えると、こんなの傷のうちにも入らない。

それでも血は止めておかないと、あちこちについてしまう。絆創膏、持ってたつけ。

肩に掛けている鞆の中に左手を入れようとした時、急に辺りが暗くなった。正確には、向こうの部屋の窓から差し込んできている朝日が、影で遮られた。

見上げると、いつの間にか聖がすぐ横に立って、私を見下ろしていた。

「俺もそこで怪我したことがある」

「・・・え？」

「ここに越してきた日、あいつ、包丁を変なところに片付けやがって、俺がそれに気付かず包丁の刃を触ったんだ」

「・・・」

「申し訳なさそうにしてたけど、あいつもここで料理してる時、何度も指切ってた。ここはよく血が流れる場所だな」

不意に聖が膝を付き、私の右手を引っ張った。そして何の躊躇いもなく、血が流れるままの人差し指をペロリと舐める。

その感覚と、聖の肩越しに差し込んでくる朝日の眩しさに眩暈がした。

聖はそのまま私の指を口に含んだ。私はなされるがままだ。

「あいつも俺がこうすると、すぐ赤くなった」

「・・・」

「一見お嬢様だけど気が強くて跳ねっ返りで・・・」赤くなんてなつてないもん！」とか意地張ってた。真っ赤だっつーの」

「・・・」

きつと私もお嬢様に負けず劣らず真っ赤になつてることだろう。男の人に指を舐められたのなんて、生まれて初めてだ。

私はキュツと目を閉じた。世界がグルンと反転するような感覚。その中で、自分の指が解放されるのを感じ、私は安堵すると同時に少し寂しく思った。

目を開くと、さっきと同じ場所に聖の顔があつた。だけど何かおかしい。さっきまで聖の肩越しに見えていた朝日が見えない。代わりに見えるのは・・・天井？

背中にゾクリと何かが走つた。床の冷たさじゃない。熱い・・・私の身体の中の、熱い何かだ。

また眩暈を感じ、もう一度目を閉じた。

背中はまだ熱い。

そしてそれよりも熱い吐息を首筋に感じた。

第4部 第6話

ぼやける視界の中、聖が動きを止めて一瞬苦しげな表情をした後、じつと私を見下ろしているのが分かった。

この光景、見たことがある。

あれは忘れもしない初夜のベッドの中。聖は「なんだ、こいつ処女かよ」と面倒臭そうな顔で私を見下ろしていた。あんなに屈辱的だったことはない。あんたの為に処女でいた訳じゃないわよ！たまたまこうなっただけよ！と言ってやりたかった。でも言えばますます自分が惨めになりそうだったし、それ以前に痛みで言葉が出なかった。

だけど今私の上にいる聖の表情は私の記憶とは違う。私を見て、不思議そうな顔をしている。

「なんで抵抗しなかった？」

分からない。聖は私の気持ちを知らないから疑問に思っるのは当然だけど、私自身もよく分からない。いくら聖を好きと言っても、聖が私を彼女に見立てて抱いたのは明らかなのに・・・。

この涙は何なのだろう。

聖がドサツと私の上に身体を落とした。暖房もついていない寒い部屋の中で、汗ばむ聖の皮膚が心地よい。

「前も抵抗しなかったよな」

私は記憶を辿った。前のマンションで、聖が悪ふざけで私を押し倒した時のことを言っているのだろう。あの時は聖が本気じゃないの

が分かってたから抵抗しなかった。でも今回は・・・抵抗しなければどうなるか分かっていた。それなのに私は抵抗しなかったんだ。

私が身体を反転させて聖の下から抜け出し背を向けると、聖は後ろから私を抱き締めた。こんなことされたのも初めてだ。

また眩暈が襲う。そしてその原因も次第に分かってきた。快感だ。

聖に触れると快感で気が遠くなりそうになる。

だけど私が聖の質問に答えられずにいるのは、眩暈のせいでも痛みのせいでもない。驚いていたからだ。

そもそも痛みなんて、ない。

聖も私に答えを期待している訳ではないらしく、思っていることを口にした。

「初めてじゃなかったんだな」

「・・・失礼ね」

ようやく声が出た。でも、気持ちとは裏腹だ。本当は私も「そうみたいね。私もビックリ！」と言いたところだけど、さすがに言えない。

そう、私は処女じゃなかったのだ。

これは・・・どうということなんだろう。時間は昔に戻っても、身体の中までは戻らないんだろうか。でも、それって不自然な気がする。見た目は若返っているのだから。

ということは・・・このやり直しの人生の中で私は誰かと寝た、っ

てこと？

誰と？ノエル？まさか・・・ノエルは中学生だった。

三浦君？ないない。

千葉先輩？私が錯乱したのなら有り得るかも。

とにかく心当たりが全くない。私の記憶がない高2の春、高3の夏、高3の秋、大学4年の春、のどこかの出来事なのだろう。そして日記にも書かれていなかったということは、前者の高2の春、高3の夏・・・？

じゃあやっぱり・・・。

・・・まさか、ね。

「どうした？」

聖が顔だけ上げて私を見る。穏やかで、ちょっと気の抜けたような表情だ。

よかった。さっきまでの茫然自失の状態からは脱したみたいだ。

「うつん、なんでもない・・・彼女のこと、これからどうするの？」

「どうしようもない」

再び聖が私の肩に顔を埋める。

「あいつの父親に、二度と会っなくなって言われた」

「だからって会わないの？聖らしくない」

聖の首が横に振れるのが分かった。

「なんで？俺らしいじゃん。相手の父親に反対されてまで会い続け

るなんて面倒臭い。・・・ロミオとジュリエットじゃあるまいし」

ロミオとジュリエットとはまた大袈裟な例えだ。だけど聖の中ではきつと、それくらいの覚悟はあるのだろう。彼女のためなら死ねるほどの覚悟が。

だから聖の言葉は嘘だ。誰に反対されようと聖は会いたければ会いに行く。

それなのに私を抱き、「どうしようもない」と言う。

「・・・我慢せずに会いに行けばいいじゃない」

「我慢なんて、」

「してる。どうして？自分が原因で、彼女が怪我をしたから？」

聖の鼓動が少し早くなる。凶星らしい。

分かりやすいんだから。

少しいじめ過ぎたかと思い、もう一度身体を反転させて聖の背中に手を伸ばし、そつと抱き締めた。まだ汗でしっとりしていて、それがなんだか嬉しい。

これで会話の内容が聖の彼女のことではなければもつと嬉しいのに。なら、彼女の話題なんか振らなきゃ良かったのに。

でも聞かずにはいらなかった。聖の正直な気持ちを。

「あいつ、ほんと馬鹿でさ。俺がどーゆー男か分かってるのに俺に付き纏うんだ」

「うん」

「あの怪我だって当然の結果だ。俺なんかと一緒にいたんだからな」
「うん」

「だから・・・俺なんかと一緒にいなけりや良かったんだ」
「・・・」

だんだん独り言のようになっていく聖の言葉を、私は聖を抱き締め
たまま聞いた。

「顔の傷、一生残るんだってさ。女なのに・・・男が寄ってこねー
ぞ」

だから自分が傍にいてやりたい。そんな想いが痛いほど伝わってきた。そして、そうすることが彼女をより不幸にするかもしれない
という恐怖も。

聖は怖いんだ。これ以上彼女を傷つけるのが。

私の肩を抱く聖の腕に力が入った。囁くような声がする。

「好きだつて・・・」

「え？」

「言つてやれなかった、一度も。そんなこと真面目に言うガラじゃないし、だからってあいつには適当に言いたくなかった」

知ってるよ。聖は本気で「好きだ」なんて言うタイプじゃないよね。
恋人にそういう台詞を求められたら、面倒臭くなって軽く「だから
好きだつて」とか言つて誤魔化しちゃうタイプだ。

だけど、本当に好きな人には本気でも冗談でも「好き」と言えない
だなんてこと、知らなかった。

代わりに聖は、主役を目指すなんて不器用なやり方で彼女に想いを
伝えようとした。

そして私はきつと、聖のそういうところを好きになったんだ。

それに気付く前にカラダを許すなんて、私、どうかしてる。

「聖」

「ん？」

胸の内を吐露した聖が、少し疲れたような声で返事をする。
ただ今頃はそんな声ですら愛おしい。

聖の背中を抱き締め直す。

ほんと、どうかしてる。

こんなことを言いたくなるなんて。

「結婚しよう」

「・・・え？なんて？」

聖が床に手をついて上体を起こし、私の顔をまじまじと見つめた。
私もその視線をしっかりと受け止める。

「結婚。元々私たち、結婚するはずだったじゃない」

「そうだけど・・・急に何言ってるんだよ。もう婚約解消したじゃないか」

「親が決めた婚約は解消したけど、私たちが自分で婚約するのは勝手ですよ」

いつも余裕たつぷりで飄々としている聖の、こんな素で驚いてる顔、初めて見た。

なんだかおかしくなって少し笑うと、聖が「なんだ冗談かよ」と安

堵とも落胆とも取れる表情を浮かべた。

でも、冗談じゃないんだよ、聖。

私は笑いを引つ込め、もう一度聖の目を見た。不思議だ。人の目を見るのって得意じゃないけど、本当に伝えたいことがある時は、目を見て話したくなる。

この想いを伝えたい。そして受け取って欲しい。

「本気よ。聖が彼女と一緒にいるって言うんなら、それでいい。でももしも彼女と会わないんだったら、私と結婚して」

「・・・なんで？」

「聖の傷を癒したいから。それを他の女の子がするのは嫌なの、私がかしたい」

「桜子・・・」

自分がこんな強引で我がままだとは思わなかった。

ごめんね、お嬢様。

でも、聖があなたとの人生を選ばないなら、私が聖との人生を選ぶ。いつかあなたが、聖の相手が私で良かったって思えるくらい、聖を幸せにしてみせる。

だから、許して。

私を。そして聖を。

第4部 第7話

「家に戻ってくる？」

伴野のおじ様は平坦な声でそう言った。だけど喜んでるのは一目瞭然だ。ただそれが、息子との争いが解消されたからなのか、息子が自分の手中に戻ってきたからなのかは分からない。

聖も聖で、「勘当を解消してください」と頭を下げた訳じゃない。

「家に戻る」と言っただけだ。

この親子はどこまで行ってもこんな感じなのだろう。聖の愛情表現下手も頷ける。

私は綺麗に敷かれた琉球畳の上で正座し、隣の聖を見上げた。聖は無表情に淡々と続ける。

「家に戻るって言っても、親父と息子って関係に戻るだけだ。実家には帰らない」

「またマンションで一人暮らしか？大学も勝手に辞めおつて、これからどうする気だ？親の金で豪遊生活か」

そんなことは許さん、と言わんばかりにおじ様の口調が強まる。が、聖の次の言葉でその相好が崩れた。

「一人暮らしじゃない。桜子と結婚して一緒に暮らす。金が必要だから親父の会社で働くよ」

「本気か？」

「ああ。演劇も辞める」

・・・言っちゃった。私は畳の目に視線を落とし、心の中でため息

をついた。

聖の家に向かう電車の中、聖は突然「演劇を辞める」と言い出した。もちろん私は止めた。私は聖と一緒にいたいだけだ。そんなことは望んでいない。でも。

「ケジメなんだ」

聖はきっぱりと言いつつ放った。

「ケジメ？私と結婚するための？」

「ていうか、あいつを忘れるための。あいつと付き合ってたのはこの半年くらいだけど、俺の中でいつの間にかあいつイコール演劇になってた。だからあいつを忘れるには、演劇を辞めなきゃ無理なんだ」

親と勘当してまで選んだ演劇という道。それは聖自身の為だったけど、今はもう自分の為だけじゃないんだ。聖にとってお嬢様はそれほどに大きな存在。私はそんなお嬢様の代わりになれるのだろうか。

・・・なれる、かもしれない。聖が演劇をやめるのならば。

聖が、お嬢様とイコールだという演劇を捨てるのならば。

「もう演劇はしないの？」

私は何も考えないようにしながら訊ねた。だって考え出すと頭が変になる。

聖に演劇はやって欲しい。でもお嬢様のことは思い出して欲しくない。

私と一緒にいて欲しい。でも聖が本当に一緒にいたいのはお嬢様だ。

ああ、もうぐちゃぐちゃだ。

そんなぐちゃぐちゃの私に、聖が単純明快な答えを示す。

「俺がもう一度演劇をするとしたら、あいつと寄りを戻した時が、完全にあいつに未練がなくなった時だ。だからもう演劇をすることはない」

「・・・そっか」

これがこれから親に結婚の報告に向かう男女のする会話だろうか、とは思う。だけど望むところだ。聖にとって「お嬢様イコール演劇」なら「私イコール演劇以外の物」になればいい。私は演劇をしていない聖を支えるんだ。そしていつか、演劇をしている聖も支えられるようになりたい。例え何年先でも。

「無理しなくていいからね」

「え？」

「演劇をしたいならすればいい、我慢するならすればいい。だけど無理はしないでね」

「演劇をするってことは、俺が浮気するってことだぞ。それに収入もなくなる」

「演劇をしても浮気はされないように、私が頑張る。それに大学を卒業したら私も働くから、お金の心配はいらないよ」

「太っ腹な女だな」

聖は呆れたように笑った。

でもね、聖。聖がそうしたんだよ。これくらい太っ腹じゃないと、聖は窮屈に思ってしまうだろうから。

それに今、私はとても幸せだ。聖が結婚を承諾してくれたからじゃない。

一度目に結婚した時、聖は死人のように気がなかった。今思えば、あの時聖はお嬢様の怪我と演劇を辞めたことで落ち込んでいたのだろう。そして私はそれに気付こうとしなかった。

だけど今回は違う。私は聖が落ち込んでいる理由を知っているし、慰めにはなっていないだろうけどこうやって聖も少しは笑ってくれている。

今ここに私がいる。聖と一緒にいる。

そのことに意味がある。

それがとても幸せだ。

私はこの小さくて大きな幸せと出会ったために時間を遡ってきたのかもしれない。

伴野のおじ様は、聖の気が変わらないうちに、とばかりに私たちに早く入籍するように言った。更に「約束どおり必ず劇団を辞めること。一週間以内に一緒に暮らし始めること」を聖の伴野建設入社条件にした。やり直し前の人生ではここに、より聖を縛り付けるために「本竜桜子と予定通り結婚すること」も条件に入っていたのだろう。

それから私たちは伴野家を出たその足で私の実家へ行った。突然の外泊に、男との朝帰り。しかも相手は元婚約者。さすがに私の両親も呆れ気味だったけど、結婚する旨を伝えると2人とも喜んでくれ

た。

そして驚いたことに、今まで誰に対しても謝罪の言葉を口にしなかった聖が、初めて私のパパに対して頭を下げた。

「わがママを言って申し訳ありません」

私は慌てて割り込んだ。

「パパ、違うの。私から言い出したことなのよ」

「ああ、知ってるよ」

「え？」

パパの言葉に私は面食らった。

知ってる？何を？

聖も少し驚いていたけど、すぐにパパの言葉の意味を理解したらしい。

「そうか、そうですね。本竜さんもあの場にいましたもんね」

「懐かしいな。この日が来るのを楽しみにしてたよ。聖君、桜子を頼むよ」

「はい。でも頼まれなきゃいけないのは僕の方だと思います」

2人のにやかな会話についていけず、私は助けを求めて聖を見たけど、話はこれからの事や伴野建設に入る事の方へ移ってしまい、私の視線は宙に浮いた。

「じゃあすぐに引越すんだね」

「はい、父の命令で・・・突然すみません」

「それは構わないが、どこに住むんだい？そんなすぐに手頃なアパートやマンションなんてないぞ。取り合えずどちらかの実家に住む

とか、」

「住む所なら決めてるわ」

今度は置いてけぼりを食らわないように、頑張っについていく。

「病院を挟んでうちとは反対側にある薄い茶色のマンション。その501号室が空いてるはずよ。ここから10分くらいだし、駅も近いから聖も会社に行くのに便利だね。いいでしょ、聖？」

私の情報網に、聖もパパもママも驚いたというより、完全に呆れている。

「桜子、お前、根回しいいな」

「た、たまたま知ってるだけよ！」

たまたま何も、聖と私は実際に6年間、そこに住んでいた。前は本当に「たまたま」そこが空いてたから「どこでもいいや」とばかりにその部屋に決めたのだけど、今はどうしてもそこがいい。聖との6年間を同じ場所でもう一度やり直したい。そして6年先も続けて行きたい。

聖は以前と同じように「どこでもいいよ」と言った。だけどそこには笑顔のオマケ付きだ。

子供のお菓子と一緒にだな、と思った。

どの箱を選んでもお菓子自体は同じだけどオマケの種類は様々で、子供にとってはお菓子そのものよりもオマケの方が楽しみだったりする。

聖と私の人生も根本的には前と変わらない。だけどそこにどんなオ

マケが付くかによって、人生自体の輝きが変わってくる。

前の人生には何のオマケもなかった。

これからの人生にはたくさんのおマケを付けよう。

笑顔だけじゃないだろう。時には涙や怒りもあるだろう。

でも、後から人生を振り返った時に笑顔というオマケが一番多ければそれでいい。

第4部 第8話

親に結婚の報告をした翌日、私たちは早速賃貸マンションの契約を行った。契約を急いだのは、あの部屋に住みたいというこだわりがあった私ではなく、聖の方だった。

聖が私の突然の求婚に応える気になったのは、お嬢様のことで自暴自棄になっているからなのか、とにかく彼女のことを忘れてしまいたいからなのか。どちらにしろ、聖はこのまま私と結婚してもいいと思っ**て**いるようだ。

多分、その方が聖にとって楽だから。

これから一人で貧乏生活と演劇を続けるのは、聖には辛すぎる。しかも「彼女を傷つけた」という重荷を背負っているから尚更だ。

それならいつそ誰かと新しい生活を始めて、過去を流してしまう方が楽、そう思ってるんだと思う。それでも私に不満はない。というより、元々聖の傷を少しでも癒す為の結婚だ。不満なんてあるはずがない。

「『職業』は・・・会社員？『勤め先』は伴野建設、と。まだ勤めてないけどいいかな？」

不動産屋の机で聖が契約書をちよつと右肩上がりの文字で埋めていく。前は私一人で来たっけ。

「いいんじゃない」

「『同居人』は本竜桜子。『同居人との関係』？入籍してないけど妻か？」

妻。

私は6年間の結婚生活の中で、自分が聖の妻だと思ったことがない。思いたくなかった。だけど今は・・・なんだかくすぐつたい。私、聖と結婚するんだ。

不動産屋の人に「婚約者で結構です」と言われ、聖は「なるほど」と言って契約書を書き進める。

「ちょうど昨日、部屋のクリーニングが終わったところなんですよ。よく空き部屋だとか存知でしたね」

「はあ、まあ」

「中をご覧になりますか？」

聖と顔を見合わせる。

「俺は別に見なくていいけど」

「私も。寸法の書いた間取り図だけ下さい」

「あ、はい。かしこまりました」

不動産屋の人がちよつと肩透かしを食らったような顔で、間取り図を取り出す。普通、結婚を控えたカップルは、いや、普通の人なら自分がこれから住む部屋を一目でも見たがるものだ。でも聖にとつてこの引越は彼女と過ごした部屋を出るためだけのものだし、私は目を瞑っていても歩けるくらい部屋の中を良く知っている。改めて見る必要はない。

間取り図を手に聖と私は不動産屋を出た。まだ11月だというのに、街にはクリスマスのイルミネーションが溢れている。あんな事故がなければ、聖はお嬢様とクリスマスを楽しく過ごしていただろうに・・・

「あ」

「どうした？」

お店のクリスマスディスプレイをぼんやりと眺めていた聖が私に振り返る。

「う、ううん。ねえ、これからどうする？」

「桜子、大学は？」

「今日は自主休講」

「そんなに医者になれるのかよ」

苦笑い。だけど笑顔に変わりはない。

私もつられて笑顔になる。

「今から買い物に行くわ。家具とか家電とか。伴野のおじ様にお金貰ったし」

私は鞆をポンポンと叩いた。正確にはお金ではなくカードだ、20万くらいは使つていいと言われている。以前はこのカードが足枷のように重かったけど、今日は新生活の為にありがたく使わせてもらおう。

「一緒に行く？」

「ああ。・・・あ、やっぱりダメだ。ちょっと用事がある」

「そう」

「アパートの荷物もまとめないといけないからな。引っ越し、明後日だろ？」

「うん」

お嬢様のお見舞いに行くのかな、なんて考えが浮かぶ。いや、それはないだろう。聖は敢えて自分をお嬢様から遠ざけようとしているのだから。

心なしが重い足取りで雑踏の中に消えていく聖の後姿を見送った後、私はまず家具屋でも電気屋でもなく、デパートに向かった。

すっかり忘れてた。12月25日のクリスマスは聖の誕生日だ。まだ1ヶ月くらいあるけど一緒に暮らし始めたらこっそりプレゼントを準備するなんてできないかもしれない。「かもしれない」というのは、聖に誕生日プレゼントを用意するなんて初めてのことから、できるのかできないのかも分からないのだ。

聖へ初めての誕生日プレゼントを贈る。その考えが浮かんだ時から、何を贈るかは自然と決まっていた。

前の私たちにはなかった物。愛情、笑顔、幸せ・・・たくさんある。このプレゼントもその一つだ。だから物そのものよりも、私が聖に贈るという行為自体に意味がある。

ある程度決めていたとは言え、どれにするか散々悩んだ挙句、2時間ほどして支払いを済ませ、デパートを出た。今度こそ家具・家電だ。でもこちらは悩むまでもない。住むところと同じで、以前の結婚生活で使っていた物と同じ物を揃えるつもりだ。

面倒臭くて全て大型ショッピングモールで揃えたのが幸いして、6年前と全く同じ物を迷うことなくピックアップし（実際には商品カードを取って行ったただけけど）、レジへ。

「お支払いは」

「カード。一括で」

「一括、ですか？」

レジのお兄ちゃんが目を丸くする。

「カードには支払い限度額がございまして・・・」

知ってますとも。

シルバーでもゴールドでもない、黒々としたカードを差し出すと、お兄ちゃんは口を噤んでカードを受け取った。さすが伴野建設の社長だな。

伴野建設の社長・・・そうだ。おじ様は伴野建設の社長だ。

その時私は、初めて、本当に初めて、「聖は伴野建設の御曹司なんだった」と唐突に認識した。

聖にはお兄さんが2人いる。2人とも聖とは違って一流大学出で、しかも一級建築士の資格まで持っているという超エリートだ。おじ様の跡を継ぐのは長男か次男のどちらかだろう。それでも聖も伴野一族に違いはない。伴野建設に勤め続ければ将来は副社長か専務か・・・そういう上の人間になるのだろう。

あの聖が会社重役？

「こちらにサインを・・・どうされましたか？」

一人でニヤニヤしている私をお兄ちゃんが訝しげに覗き込む。

「いえ、なんでも・・・はい、これでいいですか」

「ありがとうございます。お買い上げの商品は明後日の11時に指定の住所にお届けいたします」

「お願いします」

私は早足で店を出た後、ついに堪えきれなくなり道行く人の目も気にせずゲラゲラと笑った。

仕事もせず、家でゴロゴロしている聖は嫌いだった。

じゃあ私は聖にどうなつて欲しかったというのだろう。

会社の重役？違う。私は「偉い人」が嫌いという訳じゃないけど、聖は「偉い人」なんて器じゃない。器とか以前に、そこは聖のフィールドではない。

ゴロゴロしてて欲しくない。でも会社勤めして欲しいわけでもない。

つまり、私は聖に何も求めていなかった。

愛情の反対は憎悪ではない、無関心だ。そう言ったの誰だったか。

私は聖を愛していなかった。

聖と過ごした6年間は、本当に無意味なものだった。

それに気が付いて、笑わずにはいられなくなった。6年間、約2100日、私は何をしていたんだろう。

今、はつきりと分かった。

神の怒りか憐れみか、私はあの無意味な6年間をやり直すために過去へ戻ってきたんだ。

神様。

これから聖は本来の自分のフィールドではない所へ歩みだそうとしています、そして私はそんな聖を支え続ける決めました。私たちの結婚生活には意味があります。

だからどうか、私からこれ以上時間を取り上げないで下さい。

私はこれから聖との一瞬一瞬を、この目で見ながら聖と一緒に生きて行きたい。
だからお願い。もう私を未来へ飛ばさないで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9783u/>

re-LIFE

2011年11月15日09時26分発行